

(横井時靖藏)

一一〇 宿 許

萬延元年十二月八日

小楠在福井

十月廿三日之御狀四五日前に到着、時節益御機嫌能奉_レ恐悦_レ候。私も相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。あおのりやら何やら被_レ下忝候。早速寢酒等に相用申候。先便にも申上候通り私歸郷は當月二十日比には江戸より御家老歸り可_レ申其節相分候間、早速に可_レ申上_二候。

先便に申上候普請之事定て正月比より御うち懸りと奉_レ存候。新宅にて作り續き六ヶ敷候へば新宅は門並に引き書生塾にいたし、只今之塾を小屋やら馬屋やらにいたし候方可_レ然候。江戸に參らぬ様に相成候へば二月末より打立候間最早間も無_レ之事に相成候、どふぞ_レ其通りを祈申候。此節は言上之筋も無_三御座、何も二十日前後にい才可_二申上_一候。以上。

十二月八日

横井平四郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿
倫 彦 殿
お つ せ 殿

尙々當冬さしたる雪もふり不_レ申仕合に御座候。然し是よりが如何と案申候。何も又之便に可_二申上_一候。以上。
(横井時靖藏)

一一一 宿 許

萬延元年十二月二十五日

小楠在福井

十一月十四日之御書狀昨夜相達、難_レ有拜見仕候。寒中愈益御機嫌能奉_レ恐悦_レ候。私も相替り不_レ申無事に罷在候、御安心可_レ被_レ成下_二候。

お逸男子出生之由、其跡母子共に申分無_三御座、何より_一珍重にて、どふかこふかと案じ候處大に安心いたし申候。至誠院様へはさぞ_レ御心遣被_レ成候と奉_レ存候。今比は赤子さぞ_レふとり候事と被_レ存、一刻も早く見申度事に御座候。

たんす類着いたし、先月十五日には目出度御用、且又廿九日御法事へも御用可_レ被_レ成段悦入申候。たんすは私は見もいたし不_レ申、随分宜敷御座候哉如何と奉_レ存候。(奈良稚子)ならかたびらと淺着ちりめんからげ着いたし不_レ申由嘉悦よりゑびすや手許に申遣候段此許よりも外に用事も御座候間此節い才申遣候事に御座候。左平太御目見も正月は早々御頼に相成候段何角御世話被_レ成候と奉_レ存候。留守様々之物入之段い才承り申候、嘉悦よりも其段申遣候。此節之御紙面迄は平瀬より七十兩さし出候筈の事、いまだ届き不_レ申故何角御心配と奉_レ存候。只今比迄は右七十兩到着いたし候事と被_レ存候。嘉悦紙面にては坪井出

府所も、いまだ御取りきめには相成不_レ申由、左平太共出府は嘉悦方不_レ苦事に候へば當時出府所入用にも無_三御座_一候。いまだ先便通り御取りきめに相成不_レ申候へば先御止め方に被_レ成候方可_レ然、尤其内御相談相決し候へば其通りにて宜敷御座候。然し可_レ成事に候へば御取り止之方重々宜敷奉_レ存候。左候へば沼山津普請一刻も御取り懸り被_レ成度奉_レ存候。先便にも申上候通り新宅引き候ては餘り粗略に見込候へば別に作り續き候ても宜敷、左候へば是迄之新宅は門並に引き候て諸生寮にいたし、只今迄之塾を馬屋・長屋・小屋にいたし候へば十分之事に御座候。此節作り續きの^(廊下)へやえろふか二間半か三間は出來可_レ申、右ろふか幅壹間の板じきにして北の方へはとだな・米びつ其外一切の物置のたな^(御座)にいたし候へば日用の物の物置きに相成りかたづき可_レ申候。是等は御見つもり宜敷様御世話可_レ被_レ成候。私歸郷も當月廿五六日は執政歸り申筈にて其節相分り可_レ申候、分り次第に早々可_三申上_一候。最早年暮に相成り何角御世話可_レ被_レ成候。此許にてはし^(師走)わすも正月も無_三御座_一候。却て來客等も少く何かの事も大抵落着いたし大に閑散にて御座候。然し御家老廿五日比迄には下着いたし候筈にて其上は又々多用に相成可_レ申候。

新へや爐はろふかに切り候様に嘉悦に咄し置候へ共都合次第にては八疊敷の方可_レ然哉、御見込次第に可_レ被_レ成候。將又歸郷之上は九尺に二間位之土藏もこしらへ可_レ申哉、左無_レ之ては家財等治り申間敷、是等も御見込に因り此節御作り被_レ成候ても可_レ然奉_レ存候。右等の譯合にて出府所之方御取り極に相成り不_レ申候へば御止方可_レ被_レ成奉_レ存候。何も此段迄申上候。餘は年明目出度萬々言上可_レ仕候。以上。

十二月廿五日

横井平四郎

至 誠 院 様

おつせどの

尙々此許當暮は雪も格別無_レ之、寒氣よ程強く御座候へ共暮し能事に御座候。御許如何と奉_レ存候。先便たばこの事申上候通り自然正月比よりも江戸に參り候事に相成候へば其段申上候紙面着次第江戸の様に御廻し可_レ被_レ下候。夫故葦北の方一刻も早く出來いたし御許に參り候様奉_レ存候。尤此趣は先便に純三郎よりも葦北へ申遣し候事に御座候。以上。

(横井時靖藏)

文久元年

一一二 萩角兵衛・元田傳之丞へ

文久元年正月四日

小 楠在福井
萩・元田在熊本

新春之御慶目出度申納候。御兩家被_レ成_三御揃_一愈御安康被_レ成_三御加齡_一、珍重之至に奉_レ存候。小拙も相替不_レ申無事に加年仕御休意可_レ被_レ下候。御許 新君初御入部當春の風光如何哉と想像仕候。此許 君

公初執政諸有司總て一致いたし、初て國是と云ふもの相立申候。小生罷越てより年は四年に至り去初冬迄は人心各々に分^ア瓜いたし陰嶮智術に落入候を主として心配致し候處、當夏以來漸々開明各々心術之上に心を盡し候勢にて遂に十月十五日大議論と相成り十分之地位に押つめ候處此大第は幸に晝夜の如く打替り、執政初盡く落涙にむせび十分之開明と相成申候。直様執政一人目付一人江戸へ出府、中將公に積年以來君臣否塞之次第言上に及び、臣は君に御斷を申上君は臣に過を謝せられ自然に良心之禮讓感發致し、靄然たる春風窮陰積雪之中に發動致し、去月廿五日兩人歸國致し候。此事情自然と國中に風動致し、彼之俗論抔も何となく消融致し候。扱又國是三論出來、一は富國一は強兵一は士道、此三論を以て一國を經綸する土臺に立、其根本は堯舜精一之心術を磨き聊の私心も無^レ之所之修養第一にて決して秦漢以後之私心に落さず、三代秦漢之論は追々御五に及、議論候通りに候處、日夜講明此事に御座候。扱舊冬は御家中御借米是は百年前御知行之内官府御不知意にて御借米なり。先一ヶ年の處御返しに相成る、此一事に因て御家中案外の仁惠と成り上下一統誠に難^レ有存候。扱一統之勢角迄御仁惠被^レ下候て、町人百姓の難題となり候ては不^レ相濟と申心得より、町・在之借金或はかい懸り等可^レ成丈拂方いたし候間、其仁惠は下々の濕澤と相成町・在の悦び不^レ大方、扱又町・在へは至窮民救卹は勿論、第一大問屋と云役所を建何品によらず民間職業之物をかひ上る、其役人は官府にては町奉行・勘定奉行・郡奉行・製産方當時専三岡主として取斗ふ、其下役を本しめ役と云ふ、是は國中町・在豪家の者に申附、當時給人廻々増員之善此本しめ役之下に町・在にて可^レ然人物を撰びて五十人斗を付て

領内を打廻り、職業の品を買ひ或は其本入等の世話致さしむ、尤買入候品は諸方にてさばき候こと大切にて是又右の役人より國々にも出して取計ふ事也。大抵の究めを申候へば斯の通にて内輪様々は筆上に盡されず候。此問屋出來に因て市・在一統甚敷はげみ立、年の明暮抔は莫大にもち懸候て勢甚よろしく御座候。右の本じめ抔は日夜問屋に出勤官府役人と討論講習、總て民間立行之事のみにて我家之事は何も忘却致し候勢に相成候。必竟人心之向背上之心の公私に有^レ之、是迄は天下列藩總て政事は官府四人にて取計ひ聊衆言を取用ざるより、下情に暗きのみならず先我私心にて一切下情を拒絶致し候故誠に無理不都合なる政事之押方のみ相成、決して治平を爲し得ざる所以なり。是天下鎖國之私見誠に道を知らざるの甚しと云ふべし。然に此問屋一條にて上下一致に相成、初て上之仁心下に通じ下の良心上に通じ、是迄聚斂等之舊習も一時に消融致し、只々上よりは下之富を樂み下の貧を憂る元來之心と相成候て、下又是迄疑惑不^レ信之心解候て上を信する本心と相成候。元より此一事にて政事相濟む事にて勿論無^レ之、是より郡政を初家中之仕置・強兵之手段等漸々相立候事に有^レ之候。乍^レ然是等政事も末之事にて其根本は初にも申通り此學の一字三代以上之心取第一之事にて是又申に不^レ及候。此三代之心取と秦・漢以來之心取は事功に應ずる心性情より發すると發せざるとの二の間にて、譬ば賈誼抔の如き人材と云はれ候者の心吳・楚七國を削り或は匈奴を亡さんと打立心の起りは只に時之弊を見て思ひ立ものにて、吳・楚七國は文帝之兄弟叔姪之骨肉たるを少も氣の付ぬは餘りなる不仁不義の心ならずや。是を

以て後世人才の心術の間違押して知るべし、決して家國之治まらぬ心底なり。總じて弊と云は大抵は法度政令には無_レ之事にて、上之心之私が忽に下之心を塞候ものにて法度政令如何に宜しき筋之事も下より用ひざる様に相成候、是則弊にて上之私にて有_レ之候。然ば三代之際より一步も下る事は不_レ相成_一候。孔子は堯舜を祖述文武を建章し天地之時に隨ひ被_レ成候。孟子も孔子に私淑し孔子之學び玉ふ通りに學ばれ候。程朱も同斷。然るに孔孟程朱を學と云へば孔孟程朱の言行之跡をしらべて、是が道の是が學のと心得たるは孔孟程朱の奴隸と云ものにて唐も日本も同一般之學者之痼疾にて遂に一人之眞才無_レ之所以悲むべき事ならずや。小拙平生學ぶ所信する所此藩にて聊行ひ候次第前條之通にて三年之今日に至り此道聊一藩に行れ候事に相成、彌益此學之眞切なる堯舜之盛大なる天地之間此道を知らざるは決して家國を治る不_レ能之實症を合點仕候。如何御了會に候や承度候。

扱又私事中將様是非御逢被_レ成度思召候て、去月初に江戸へ出府之儀龍ノ口に御頼入に相成、近々熊本に申越に相成候間、熊本御差支無_レ之候は、出府致し吳候様懇々之御頼有_レ之候。御承知之通り最早知命も三ツ過ぎ、殊に去秋大病相煩以後本復に至不_レ申、此許晝夜多用心配致し實に幾段か老衰に落入申候。尙又出府と申ては甚以困窮千萬に御座候へ共致方無_レ之事に相成候。熊本 思召も無_レ御座候へば一ト先出府早々切揚げ引返し申度、然し夫に成候へばどふしても秋末に至り歸郷可_レ仕、扱々心痛之至に御座候。先此段拜呈餘は付_レ後雁_一申候。以上。

正月四日

横井平四郎

荻角兵衛様

元田傳之丞様

(小楠遺稿)

右書面につきては『横井小楠傳』第十一章、二及び第十二章、二・三を参照すれば其の事由明瞭となる。

一一三 嘉悦市之允へ

文久元年正月二十六日

小楠在福井
嘉悦在京郡

一書拜呈仕候。春寒之砌愈御安康に被_レ成_一御勤仕、珍重之至に奉_レ存候。私相替り不_レ申御休意可_レ被_レ成_一下_一候。然ば此許御家老江戸表より歸國いたし申傳候は中將様思召之筋御座候て私事江戸表に御呼寄被_レ成度旨龍ノ口に御頼入に相成候處、早速其趣熊本に申越に相成、於_レ熊本 思召不_レ被_レ爲_レ在候へば私への御達江戸に相廻り候ては及_レ延引_一候間直に福井に御通達に可_レ相成_一旨小笠原殿より返答有_レ之候段、右之通にて來月中旬比迄には熊本より御達狀可_レ有_レ御座、何に御手許之様にも參り可_レ申哉。左様にも御座候へば此許御屋敷森賢次郎手許迄、御用狀にて有_レ之候段御添書にて御届被_レ成_一下_一候様奉_レ存候。尤森へは左様に相心得、御用狀御届に相成候へば急飛脚にて此許に相届候様御役人より申達有_レ之候間、私より御手許へは得_レ貴意_一置吳候様との事に御座候。尤熊本より直に此許に御通達と申事に候へ

ば必定御手許に参り候と申儀にては無御座候間左様御承知可被成下候。
當春は早々歸郷之心得にて何角其用意も仕、大に樂み罷在候處右之通之次第にて大方出府之方と被存、實以當惑之至に御座候、御憐察可被下候。此許相替り不申、何も治平に趣き大慶仕候。此段迄拜呈、餘は大略仕候。已上。

正月廿六日

横井平四郎

嘉悦市之允様

尙々御地餘寒如何に御座候哉、御自愛可被成候。此許雪も消へ候てさしたる餘寒も無御座先暮し能御座候。宿狀御届奉希候。已上。
(弓削和三藏)

一一四 嘉悦市太郎へ

文久元年二月九日

小楠在山中温泉
嘉悦在熊本

正月九日之御狀今日相達、忝々拜見仕候。御全家様初愈御安康に被成御加年、珍重の至に奉存候。私も相替不申無事に罷在申候、御安心可被下候。

此節之便に此表に御留置き江戸表へも罷出候様組脇より通達之狀参り申候。來月末には當公御出府に付御一同之出府仕筈に御座候。此許執政・執法も十二月下旬に歸國、中將様御手許も至極都合宜敷無此上事に御座候。正月には狛山城御家老歸役、中根鞆負御側御用人歸役、兩人共に至極難有がり申候。此

一舉にて雙方共氷解いたし以前之事申出候て大笑に相成候事に御座候。最早御家中何のさし障りも無之、此上老拙江戸に参り中將様に寛りと御咄合申候へば決して御子細無之事情にて、君公・執政は勿論一國中より此節之出府は念願にて聊も異議無之候。何に不遠從^{イッレ}江戸萬縷可申述候。

普請之事竹やぶ手に入り可申、是迄之新宅手入れ御配意被下候段、此上重々可然御頼申候。江戸に参候へば急ぎ候事にては無御座、寛りと御取懸可被下候。

江口も江戸に参るや否之事いまだ決し不申候、何に近日に落着可仕候。

執政中よりすゝめにて山中に四五日以前より湯治に参り居候處に飛脚到來、直に返事相認め、數通之事にて何も呈書出來兼、此段迄拜呈仕候。別紙は御届方重々奉頼候。以上。

二月九日

平四郎

市太郎様

(松平慶民藏文書「雜纂」第四卷)

一一五 荻角兵衛へ

文久元年二月二十五日

小楠在福井
荻在熊本

江口歸郷に付一書拜呈仕候。愈御安康に被成御勤、珍重之至に奉存候。私も相替り不申御安心可被成下候。然ば十一月廿七日之御狀到着、忝々拜見仕候。縷々被仰下候趣厚忝奉存候。此許之事情

横井小楠遺稿

三五三

は彌以都合宜敷、先は七八分之土臺は築立聊安心仕候。私も東行之命を蒙り來月廿日前後に此許發程之筈に御座候。此度は中將(春謀)様厚き思召にて出府仕候に付、此公御心術一變之場合尤以肝要之儀に有之候。此上は此公御心術之正不正に拘り此國之治不治に關係、扱々大事之至に御座候。然し此節は十分都合宜敷事と被_レ存申候。い才之儀江口より御承知可_レ被_レ下、略仕候。

御許可か一變いたし可_レ申段如何之御模様かと深く案申候。江戸此許役筋より申越候には溝口・大木兩大夫退役外貳十人餘も黜斥と承り、殊に驚魂仕候。御初政に如_レ此黜斥有_レ之候ては邪正善惡は暫く置き決てよろしき筋とは不_レ奉_レ存、甚以痛心仕候。一刻も江戸に參り御様子承り度奉_レ存候。

江戸表は水府黨類の爲に何も心魂を被_レ奪、他之事に及び不_レ申候。水府之學問天下之大害を爲し、扱々絶_ニ言語_一申候。此許も有志者と被_レ唱候者は大抵此學に陷入居申候處、小拙罷出候ては必死に打破り、今日に至り候ては先此弊害は消亡に至り申候。熊本も米大夫死去に相成候ては此等之風習は絶脈いたし

候事と被_レ存候。扱も學問之正不正は大切千萬にて、此許は君公初大夫以下總て第一等之三代に志し候筋には參り申候。乍_レ然一人として心得之人は無_レ之候、唯々着眼迄は一體之地に至り申候。刀劍之事被_ニ仰越_一定て段々御手に入候事と奉_レ存候。小拙も去冬相州廣正貳尺二寸聊も申分無_ニ御座_一もの手に入、此節江戸に持參こしらへ申筈に御座候。小道具類は色々物すきに求め申候へ共寸斗氣に入候もの無_ニ御座_一候。熊本之心得とは大に違候は小道具にいたし候ても後藤か柳川か又は奈良かの作にて無_ニ御座_一候

ては、其他は譬ば見事に出來候ものも遂にしろふと細工と申ものにて一向に面白無_ニ御座_一候。江戸に參り候へば少しは手に入り可_レ申、相樂申候。

江戸も百日斗も到留可_レ致哉、尙又此許に歸り、扱歸郷之積に御座候。何に九月末にも至り可_レ申候、大分待遠事に奉_レ存候。御頼之紙類長崎便船に仕出し置申候、不_レ遠さし出可_レ申候、代料は歸郷之上御算用可_レ仕候。先拜復迄仕候。已上。

二月廿五日

平 四 郎

萩 角兵衛様

尙々時下御自愛可_レ被_レ成候。御詩作珍敷事に奉_レ存候、何れ拜見仕度事に御座候。中將(春謀)様御手草之事江戸に出府之上可_レ奉_レ願候。かな文字御さし出之儀是又何のさし支も無_ニ御座_一候。御清書之上江戸に御廻可_レ被_レ成候。此段迄拜呈、餘は略仕候。已上。
(長野忠次藏)

一一六 宿 許

文久元年三月九日

小楠在福井

一書拜呈仕候。益御機嫌能奉_ニ恐悅_一候。私も相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。い才は純三郎當月末には歸着、可_ニ申上_一候。普請之事純三郎歸りに申談置候處、尙又相考候へば竹やぶ手に入り不_レ申候へば屋敷餘りせべく永住之處無_ニ覺束_一、村近き所によるしき地方も御座候へば積(つまの)りは引き移り候方可_レ然とも被_レ存

候間廊下は御見合可被下候。新宅雪いんも只今通りにてよろしく御座候。其外何も是迄の御取り繕にて可然奉存候。餘り度々了簡うちかわり御當惑可被成奉存候。

一 新宅八疊之東に四疊敷程作り繼ぎ十二疊にいたし候へば來客之節大に都合宜敷、床押入は是迄之通りにてよろしく御座候。

馬屋・男部屋・小屋等は純三郎に咄し置候通りにて御座候。來る廿四日彌出立仕筈にて晝夜多用夜もねられざる事にも相成り中々困り入申候。乍去萬事之都合彌以よろしく珍重に御座候。最早十餘日に相成り、此許よりは紙面は是切にて來月十二三日比は江戸に着可仕、彼表より早速書狀さし出可申候。

二月四日宗育紙面にてたばこ御遣し難有奉存候。宗育紙面にい才は別紙御仕出しに相成候段申遣し候へ共御別紙は今以届き不申候。此段迄申上縮候。以上。

三月九日

横井平四郎

至誠院様
左平太殿
倫彦殿
おつせ殿

(横井時靖藏)

一一七 横井牛右衛門へ

文久元年四月十九日

小楠在江戸
牛右衛門在浦賀

此の書は小楠は江戸に在りて、當時浦賀に在勤せる牛右衛門に出府後の近状と水藩の鎮靜及び對外關係の概況とを報じたるもの。十五日之御狀相達、忝々拜見仕候。愈御安康に被成御勤、珍重之至に奉存候。被仰下候趣御厚情之御事共、且今暫は御出府も難被出來次第委細に拜承仕り候。小弟も到着以來誠に寸暇無御座何角之用事に取り紛れ、外出も六ヶ敷龍ノ口に一度、淺草邊迄晝後閑歩致し候迄にて何方へも參り不申、當方之次第は福井表も至極好都合、上下一統一致國是も相立何の異議も無御座候。中將様へは日夜罷出様々御咄合の中尤も學術之要領至極に御了會被成、御父子様并に執政御一座之御咄合も既に及四度、毎に九ツ頃より暮に入り父子君臣誠に家人之寄合の如くに有之面白き成り行に御座候。小拙へは餘り御手厚き御あひしらい御父子様共に次之間迄御送迎、且痛足之事も御承知にて茵を敷き候様被仰付、一重に御斷に及候へども御聞入に相成不申、御自身様御立被成候間致方無御座其通りに致し候、誠に心痛之事共に御座候。右之通りにて餘事は何も御承知可被成候。

水浪人之事内輪の事情を承り候處、亡命集散の者共は様々のあぶれ者にて、從來思ひ込候者御家中にて八十人餘も有之、是等は亡命致し不申、勅書返納之事并に外國之事等先老公思召之通りに行れず幕庭之御所業日本之大耻辱にも至り候節は大事を起し候覺悟に罷在申候。中納言殿へは殊之外御心痛、

實に被_レ致様も無_レ之より武田伊賀是は先年懸居御召出し御家老再勅と云ふ諸事御家老同様に被_二仰付_一、此伊賀は初より何の黨と申にては無_レ之何方へも受能き上最早六十餘に相成候て物馴候故、伊賀種々に心配、天狗黨之者共に及_二相談_一萬一日本之耻辱に至り候節は伊賀初大事を起し可_レ申候に付今は十分鎮靜致し候様、且亡命の者も立歸り候へば以前の通り被_二召仕_一べき段も達に及び、此等之次第は水府切りの事にては無_レ之、右之通り内實は幕庭より御内諭相談も有_レ之候。にて亡命者も退散漸々歸家致し、且八十人之者共も落付候て鎮靜に相成候。幕庭にては外國も何も扱置き水浪一事に心魂を被_レ惱候處、右之通りに相成大に安心の躰あり何に警戒も不_レ遠解け可_レ申候。尤も勅書返納も夫切にて泣寝入りと相成、櫻田殘黨御仕置も何に此儘にて押送り候事と被_レ存候。

外國之事内實承り候處ハルリス格別に心配誠に厚きとも何とも云はれ不_レ申流石にアメリカの國躰感心之至りに候。通辨ツバ官被_レ殺候後之所置は定て御承知と奉_レ存候。是等誠に意外之次第に御座候。凡通信交易之列國是迄既に七國に及、日本二千年來の鎖國一旦に開通と相成候はでは逆も内輪政事の一旦に改り候筋合には參り不_レ申、政事は矢張鎖國の無理にて萬國と開港致し候ては諸物價沸騰は勿論萬事の困窮に相成候事情得斗熟知致し 廟堂に申出、 廟堂より困窮の情實被_二打明_一無_二餘義_一次第を以て七國之外交易御斷に相成度付ハルリスより列國に申述取り計らひ吳候様御都合可_レ被_レ成、左候へば直様可_レ然申談じ可_レ申段内談致候に付 幕庭も至極御聞取り、右之事情書もハルリス内輪に相認め夫を以て英の「ミニストル」に及_二相談_一候處是又至極尤と同意にて外に五ヶ國に申談七ヶ國より餘國にケ様

之事情無_二餘義_一次第に付日本政躰改り人心落合候迄は餘國交易相斷との請合に相成候間、 幕庭にても至極大悅之趣に有_レ之候。

漢土は是迄通信無_レ之候へ共、隣國と云ひ舊來恩義も有_レ之國柄故、今般西洋同盟諸國へ使節被_二差立_一候前に先漢土に通信の使節被_レ遣候儀可_レ然との内議にて有_レ之、尤左様に決定候へば英の「ミニストル」取計可_レ申筋に御座候。

右等の次第且は御音信物のととのへ方又は使節仕舞等逆も秋迄に用意出來不_レ申候。何に來春に可_二相成_一、尤も此節は七ヶ國打廻り候事にて三ヶ年懸り可_レ申との内議に御座候。

廣東港に交易として幕府官船被_二差立_一候筈、然し是は内々之取組にて後日開船之手初之積に有_レ之候。此以前英・佛より對州開港を願ひ候へども御斷に相成候。此節魯使同様申出御斷次第六ヶ敷成り行候。對州にて承允致し不_レ申（文字アリ）魯使歸帆（文字アリ）餘程六ヶ敷可_二相成_一候。右に付て英・佛は對州は差置き中國・四國之内海にて可_レ然港を借り受申度との事にて、既に二國より内海に乗り入り所々開港場等測量等致し候事、魯・英遂に不_二兩立_一之勢深く可_レ憂々々。此亂起り候へば日本海岸共に戰爭の巷と可_二相成_一、ハルリスも甚氣遣に罷在候由。然し只今之事とは決して見え不_レ申、何に後日之大患此事に有_レ之候。今日の情實列國何れも日本を憎惡之心底は聊も無_レ之只々憐愛を加へ候事にて、英・佛も疎忽之情は決して無_レ之候。（觀此）ゑぞ地にて金・銀・銅等堀出しの打立にてアメリカに石工兩人御頼に相成不_レ遠參り候

管、シーボルト出府、是は内情は同人より昔年罪を得候事深く心外に存じ、此節は長々日本に居住致し醫道・物産之學并に西洋發明之事等教導致し度段願出候に付江戸に被_レ召寄_レ候。當時横濱に居住蕃書調所之指南方役之中より先三人修行の爲に同人手許に被_レ遣候。右三人之内に此方様御醫者市川齊と申す者被_レ選參候筈、外に坪井信良と申醫者蕃書調所之懸り役被_レ命有_レ之、西洋之事情は随分明白に相聞候。先右之次第一と通り拜呈仕候。水府之事情委細之内情は近日委しく相分り候筈に有_レ之、此段拜呈申縮候。

四月十九日

平 四 郎

牛 右 衛 門 様

向々此許今暫くも致し聊閑を得候へば、中將様より被_レ仰聞_レ候趣も有_レ之横濱表に參り候筈に御座候。其節は御許にも參上可_レ仕、何に來月末にも可_レ相成_レと奉_レ存候。何分不_レ遠得_レ拜顔_レ萬縷可_レ申上_レ候。

(小楠遺稿)

一一八 城野靜軒へ

文久元年六月六日

小楠・城野
在江戸

一書致_レ拜呈_レ候。然ば御染筆中將様(春原)に差出候處深被_レ成_レ御感心、今四五日御留置被_レ成度思召に御座候。御故障も無_レ之候へば左様御聞置可_レ被_レ下候。此段得_レ御意_レ度、餘は大略申縮候。以上。

六月六日

小 楠

靜 軒 老 兄

(彌富破摩雄藏)

一一九 在熊社中へ

文久元年六月十六日

小楠在江戸

一書致_レ拜呈_レ候。諸君愈御靜安珍重之至りに奉_レ存候。老拙相替り不_レ申無事に罷在り御懸念被_レ下間敷候。此許兩君彌以御精勵珍重に御座候。福井も殊の外靜安一統一致、且明道館紛々此人輩も出席いたし漸々盛成る様子に申越、悦入候。東北共に何之申分も無_レ之誠に平治に相成申候。

水浪東禪寺一條後衛士血戦浪輩逃亡にて 幕庭大に人意を強し申候。夷人も 幕庭無_レ他意_レ事は大に了會致し候。然し追々刺客夜討等水浪共治り不_レ申義は日本治道行れ不_レ申故にて甚不_レ相濟_レ次第にて急度御取りしめ可_レ有_レ之、左無_レ之ては安堵いたしがたく、既に通辨官殺害に付ては英國女王殊之外氣遣に存じ軍艦さし向け、模様寄りては「ミニストル」の警衛を爲_レ致候存意にて不_レ遠軍艦も着いたし可_レ申候。日本にて水浪等制止出來兼候へば英國より軍兵さし向け責潰し可_レ申段申出候由重々尤之申出にて 幕庭も心痛之御事と被_レ存候。扱水府之模様は此節捕れ候者共御吟味に相成候處此者共一致後陣之備三十人程出亡、舟より江戸に罷出候約束有_レ之、右三十人之者共當時行方知れ不_レ申專吟味最中に

て有之候。右之次第にて金川等夷人館之警衛も増方に相成候。追て近々水戸中納言公御登城御家老并御用人杯も罷出、閣老御咄合有之如何之様子に候哉いまだ相分り不申候。右之外にも天狗黨大分有之扱々絶言語申候。然し列藩中同意と申は薩州・長州杯少々之馬鹿物共にて、二躰は水府を是といたし候勢絶て無之、唯々夷人館等之警衛に及困窮候迄にて、禍亂と相成候勢は無之候。

對州一條此節は治り可申、然處是は獨り日本之大患と申迄にて無之世界之大患とも相成り可申哉、魯・英之勢不兩立遂には亂と相成り可申候。就ては魯既に黒龍口を取り頻に軍艦等の設盛にいたし候へ共、黒龍口は九月に至り候へば海水氷り航海相成不申、三月より九月迄之海路に候へば殊之外迷惑に候。夫故對州手に入り不申ては一向之無益にて有之、對州は朝鮮と五島との中間にて唐土・印度等アジャ州に出候門關にて、此島を英・佛等より取られ候ては魯は全く封印を被付候て聊の働きも出來不申甚大關係之地にて有之候。英・佛よりは魯よりも先きに借用懸り合いたし御斷りに相成候。右之次第故魯よりは必死に懸り候事情にて候。尤此節急迫に懸り申にては無之積り果は甚以六ヶ敷可相成、魯・英之戰爭此處より始り可申哉何とも難被申、深く可恐は對州一條にて有之候。右之外相替り申義無之候。老拙も八月半頃は此許出立いたし度、既に内意も申談じいまだ決定には相成り不申候へ共大抵落着可致候。左候へば九月中福井に罷在り、十月始より彼表出立いたし候へば霜月始には必定歸郷可致、屈指いたし候へば最早百三十日程の客中大分仕付け心樂申候。此段迄拜呈餘は何も略

いたし候。以上。

六月十六日

小楠 拜

同社諸君

(小楠遺稿)

右文中「水浪東禪寺一條」とあるは文久元年五月二十八日水戸浪士十四人江戸高輪東禪寺の英國公使館を夜襲し、書記官領事を傷つけ衛士二人を殺し十餘人を傷つけたる事件で、「對州一條」とは同年五月二十六日露人宗對馬守に會見を求めて海岸の一小地帯を租借せんことを強請したそれである。

二一〇 城野靜軒へ

文久元年六月二十二日

小楠・城野
在江戸

一書致拜呈候。然ば例の件に付急々御咄承り申度、御多用之御中に御座候へ共明朝五ツ半前御出被下候様相希申候。此段迄得御意申候。以上。

六月廿二日

平 四 郎

城野彌三次様

(石塚正治藏)

一一一 宿 許

文久元年七月二日

小楠在江戸

宛名の中の大平は倫彦の後の名である。

安藤彌太出立に付一書拜呈仕候。益御機嫌よく奉_三恐悦_一候。私も不_三相替_一無事に罷在り、御安心可_レ被_レ下候。當夏はとんと雨ふり不_レ申、夫故殊之外暑さにて困り入申候、御許も御同様かと奉_レ存候。然ば私歸郷の事中將様(春盛)・當公(茂明)に御相談申上げ八月十五日に此許出立仕度段々及_三言上_一候處兩君にも御合點に相成候間福井表へも申遣候、大抵落着仕候。就ては土産物等の用意いたし申候。十五日に出立仕候へば來月中に福井に着九月一ぱい、到留いたし、十月初に彼表出立同月末には御許に着可_レ仕、指ををり候へば最早百貳十日に過ぎ不_レ申大に相樂居申候。就ては追々申上候座しきを十二疊に御建續之事御世話被_レ成度吳々奉_レ希候。且又馬も引入申度、彼是物入多く可_レ有_三御座_一候間金子貳拾兩さし上申候、夫々御受取可_レ被_レ成候。

- 一 馬は別紙之通り書附さし上申候。敬之助・嘉悦杯に御頼み手に入次第に御引き入被_レ成候様奉_レ存候。
- 一 (數)くらは江口歸りの節申上候通り水導屋敷より澤村方にしちに入置候もの定て敬之助に御相談被_レ成候事と奉_レ存候。
- 一 (證)あぶみ無_三御座_一候間是は敬之助より暫之間御かり受被_レ成度奉_レ存候。
- 一 (江口が福井に召遣し男)惣右衛門は一日も早く入り込み諸事なれ候様に奉_レ存候。純三郎に御申遣被_レ成度奉_レ存候。萬一さし支參り不_レ申候へば廿前後之者御吟味御抱へ置可_レ被_レ成候。

一 諸生四五人は必ず參り可_レ申候。先便に申上候通り夜具は借し不_レ申候ては難_レ叶、極々下品之物にてよろしく御用意被_三成置_一度奉_レ存候。以前も申上候通り三岡・平瀬杯と違ひ、誠之書生にて候へばめしは寮にてたき候間此方よりは日々汁か(香)こふの物杯一度づゝ遣し候へばよろしく御座候。其御心得にて何角御用意可_レ被_レ下候。

- 一 (總)すゞのそふめん皿并猪口十人前手に入申候、是はよ程よろしく御土産と奉_レ存候外、尾張やき猪口貳十人前並茶わん十人前も手に入申候。
- 一 九谷は徳利三對、是は比類無_レ之上品にて御座候。
- 一 「ギヤマン」類は様々手に入申候。
- 一 平瀬去月に罷出候段定て暫は到留仕候と奉_レ存候。「ギヤマン」しよじは大方持參いたし候と被_レ存候。何分しよじは「ギヤマン」にて仕度吳々御世話可_レ被_レ下候。此段迄申上縮候。以上。

七月 二日

横井平四郎

至 誠 院 様
 左 平 太 殿
 大 平 殿
 お つ せ 殿

尙々時分柄御自愛可被成候。

一 鐵炮之當り付け先便にも申遣候通り九分さやも福井より遣候。二挺も十分に付候様嘉悦にぞ永嶺にぞ都合よき方に頼み、拙者歸りまへに夫々出來いたし居候様左平太心配いたし可申事。但異様之仕懸けの筒は(工合)クヤイかたく候間極々和成る様に仕直し可申事。

(赤星陸治藏)

追 啓 (一)

此紙面着いたし御返事は懸合申間敷、福井には九月中は到留仕候間一應之御紙面は彼表に御遣可被下候。夫も八月半頃よりは懸合申間敷候。

八月十五日比の出立は十に九つは相違仕間敷、其御心得可被下候。尙又盆前後には決定之事可申上候。歸郷に打立候へば百日餘之日も却て待遠に相成り、日々指をおり申候。

江口純三郎に橙の酢壺斗程用意致し吳候様御申遣可被下候。歸り候て註文は時候におくれ可申、只今より御失念無く被仰越可被下候。牛右衛門(浦賀在物)此許に出府致し不申、何に此節は逢ひ不申ものと被存候。是も様々物入多く其上不案内にて金子も相應に持參いたし不申候由にて極々困窮致し、借用申遣し候間貳十兩遣し申候。彼是にてよ程いり申候へ共不足は仕り不申、此段迄追啓申縮申候。以上。

七月三日

(横井時靖藏)

追 啓 (二)

追て拜呈仕候。此許出立之儀來月十五日十に八九は相決し候様前書に申上候處昨日(尊政・茂昭)兩君も得斗御許容被成、一兩日中に福井表に被仰越候筈に落着仕候。左候へば彌以十五日に出立可仕、其内御飛脚に尙可申上候へ共一日も早く相連れ居候儀よろしく、其御心得にて普請等何も御心配被成下度奉存候。馬は何分歸り前に御引き入れ、歸りの節左平太乗り候て迎に參り候様吳々奉存候。敬之助・市太郎列に早々御頼み可被成置候。最早此許へ罷在候事も四十日許に相成り、何角いそがしく用意等仕候。向の貞作屋敷にて地方少々御かり受被成、大根又は京な・唐茗の類御うえ付被成、虫に食せ申さぬ様御世話可被成候。尤一日も早くうえ候儀よろしく、歸郷之上の樂に御座候。

純三郎に申談し置候門は丈夫成る材木にてうちぬぎのぬれ門に可被成候。小倉路いたし候へば毎の通り熊本の様に參り候事にて坪井出府所に着いたし度事に御座候。いまだ何もふとのひに候へば小川に立寄り可申、何方たり共早く知れ居不申候てはうへ木(植木)にて人馬のとゞけ間違ひ可申候。此紙面着之上御返事福井表に御仕出し可被下候。自然は又大坂より鶴崎に船便都合御座候へばめづらしく豊後路を可仕哉、左候へば大津より直に沼山津に着可仕候。是は十に一つにて御座候。來月出立仕候へば此節は北陸道(しカ)を通行仕筈にて名にのみ聞え親不知子不知杯の名所をも見、

信州・越後・越中・加賀等の國々九州者のいまだ見不_レ申所々見物仕候。東海道よりは兩三日日數懸り候間九月朔日か二日に福井に着可_レ仕候。扱九月中滞在十月初は必定福井うち立同月末には歸着可_レ仕と大に相樂申候。

にごり酒は隨分澤山に御作り込み被_レ成度萬々奉_レ存候。此段迄追啓仕候。以上。

七月 四日

横井平四郎

至誠院様

おつせどの

(小楠遺稿)

前出(三月九日付と七月三日付)の書狀にある小楠の江戸出發は八月二十日に延びた。越前よりは松平源太郎・青山小三郎・堤市五郎・奥村坦藏・山縣岩之助・大谷治左衛門・横山強の諸生を伴つて大阪より鶴崎に上陸し、豊後路を通つて十月十九日沼津山に歸着した。

一一三 城野靜軒へ 文久元年八月八日

小楠・城野
在江戶

先時は御來臨忝候。扱春嶽公御認出來、御懸物及_ニ返進_一申候。御召之儀も何角御障りのみにて及_ニ延引_一、何も不_レ遠御催可_レ被_レ成との御咄に御座候。此段迄拜呈、餘は大略いたし候。以上。

八月 八日

小楠

靜軒君

(彌富破摩雄藏)

前出六月六日付及び同月二十二日付の二通と本書とは文久元年小楠在府間靜軒も出府し、全紙一枚に『論語』全卷を細書したものを小楠に示し、小楠はそれを春嶽の覽に供すると大いに嘆賞して、暫く手元に留め置きたる後特に軸物に表装せしめて其の外側に「文久辛酉七月七日春嶽觀」と自書して靜軒に返し與へた事が有るのに關しての書面だと思ふ。此の軸物は今なほ城野家に珍襲されてある。

一一三 吉田平之助へ 文久元年八月十日

小楠・吉田
在江戶

吉田は肥後藩江戸留守居役で、小楠とは懇意である。小楠は春嶽及び越藩主から招かれて文久元年四月下旬福井より出府し約四月滞在したが、本書は近く江戸を出發せんとする頃のもの。

昨日は參上御妨仕候。扱上總屋御同伴及_ニ御約束_一置候處、十三日には小生出立に付福井表えの御用、尙御評議有_レ之趣今朝被_ニ仰聞_一、外に餘日も無_ニ御座_一候間何分操合之義申談出來兼、度々御無答にも相成候へ共致方無_ニ御座_一御斷仕候。山形(典次郎)へも毎度御手数數恐入候へ共可_レ然被_ニ仰越_一可_レ被_レ下候。花開多_ニ風雨_一、兎角にさし障遂に大都之花を見不_レ申空敷歸郷、眞に遺憾之至に御座候。此段急ぎ拜呈仕候。餘は十四日に拜顔萬縷得_ニ貴意_一可_レ申候。以上。

八月十日

平之助様

平四郎

三七〇

尚々十四日には八ツ比(午後二時)より御許に罷出可申、右様御心得可被下候。以上。

(藤本龍雄藏)

一二四 勝海舟へ

文久元年八月十四日

小楠・勝
在江戸

小楠と海舟との交情は頗る親密であつた。隨つて書面の往復も頻繁だつたと思はるゝが編者の目に觸れたのは數通に過ぎぬ。此の書は上記吉田平之助への書簡につきての説明通り近く江戸を出發せんとする數日前のもの。

小楠 勝海舟 へ

難有拜見仕候。秋冷に罷成愈御安泰に被成御起居、奉賀候。然ば縷々被仰下候趣御厚情之御事篤忝奉存候。私も來る廿日に彌以出立仕候心得にて何角取り込多事勝にて御無禮申上候。一昨々日は不斗晝より閑を得申候間頃日來之御約束も御座候間卒然と大久保様に罷出寛々と御咄合仕候。最早一夕も閑暇無御座罷成り誠に(困りの意カ)込入申候。尤朝之内是非御暇乞には罷出候心得に居申候間十七八日之内五ツ比迄に參殿可仕、何分御在宅被成

の簡書(勝家藏)

下候様吳々奉頼候。

亞より御持越之御小刀拜領御厚情不淺忝候、長く重寶可仕候、何も奉得拜顔萬々可申上、先不取肯拜復迄仕候。以上。

八月十四日

平四郎

麟太郎様

(勝家藏)

文中の「亞」は亞米利加の事ならん。勝は萬延元年正月遣米使節の隨行として別に軍艦成臨丸に乗じて品川を發し二月下旬桑港に着し五月上旬歸朝した。

一二五 勝海舟へ

文久元年八月十七日

小楠・勝
在江戸

一書拜呈仕候。益御安泰に被成御座、珍重之御事に奉存候。然ば明日之中罷出候様申上置候處、出立前餘日無御座候内兩三日外邪にて引入候て殊之外多用無寸暇罷成、何分御暇乞に參殿出來兼甚以御無禮に奉存候へ共御斷申上候。段々拜顔之上相伺候儀も種々御座候處擬々殘懷之至に御座候。此段迄申上度、餘は大略仕候。頓首拜。

八月十七日

平四郎

横井小楠遺稿

三七一

麟太郎様

尙々此節は一ト先福井表に參り、用事の仕舞候へば肥後に歸郷仕候。何に歸郷之上書狀にて可^{イッレ}奉^レ伺上^ニ様御聞置可^レ被^レ下候。以上。

(大久保立藏)

一一六 江口純三郎へ

文久元年十一月二十八日

小楠在沼山津
江口在葦北

小楠の榜示犯禁事件に關しての書面。

一書致^ニ拜呈^ス候。愈御安康珍重之至に御座候。先頃は御來臨忝候。御歸途御氣削と存候。然ば小生去る廿六日朝熊野宮に鳩打に參り歸り懸け村廻れ往還にて矢放いたし候處、榜示横目見各姓名承り候間無^ニ致^ス方^ニ相答申候。(榜示木のこと)榜示キは御場廻れより十間餘之處にて平生是迄無^ニ何心^ニ致^シ來り候事には候へ共、被^ニ見^ル答^ニ候ては表向に相成候て全く御法度を破り候事に有^レ之、當然之處分^{□□□□}(四字不明)相決し居申候。然し熊本にて下津^(休也)杯心配專いたし候事に御座候、誠に心痛千萬に御座候。右に就ては普請之方見合不^レ申候ては難^レ叶候間最早材木等切り出しもいたしたるとは存候へ共御取り止被^レ下候様相願申候。定て大工杯も取り懸り居可^レ申候へ共右之仕合にていか様とぞ御取計可^レ被^レ下候。此段急ぎ得^ニ御意^ニ申度、早略申縮候。已上。

十一月廿八日

純三郎様

平四郎

(横井時靖藏)

一一七 十時攝津・立花壹岐へ

文久元年十二月朔日

小楠在熊本
十時・立花在柳河

十時攝津はじめ長門と稱す。立花壹岐の兄で柳河藩の家老。小楠を最も尊敬して居た。

先月廿六日之貴書忝々拜見仕候。時節愈御安康に被^レ成^ニ御勤、珍重之至に奉^レ存候。隨て小生先々月歸郷仕無事に罷在り、御懸念被^レ下間敷候。

然ば縷々之御書中且壇氏より御許御事情承り萬端御都合宜敷、重々目出度奉^レ存候。池邊氏も東行に相成候段、彼御許違亂も必靜安に歸し可^レ申候。東都之事情且外國之成り行等壇氏に咄合申候間御承知可^レ被^レ下候。扱も六ヶ敷世界に相成り此末如何落着可^レ仕哉、何共愚按に落兼申候。兎角今日と相成候ては天地自然之情理にて無^レ之ては決して行れ不^レ申候。此所に於て工夫第一に奉^レ存候。越前も彌以上下一致に歸し、中將公御父子様共に格別御精勵珍重に奉^レ存候。來春共は拜顔可^レ仕、心情様々之事難^レ盡^ニ紙上^ニ、先拜復迄仕候。頓首拜。

十二月朔日

横井平四郎

十時 攝津様
立花 壹岐様

尙々美酒拜戴さし寄拜味仕、不淺忝々奉存候。近比は酒も殊之外弱り、半ば下戸之様に罷成御一
笑可被下候。已上。

別 啓 (一)

壹州君御副書之趣夫々拜承仕候。戸次氏暫は到留さし支無御座、い才は壇氏に咄置御承知可被下候。
已上。

別 啓 (二)

小 楠 拜

御許彌御治平に歸候趣重々恐悦仕候。池邊氏も不遠御歸國之由何も種々御心配之程想像仕候。

江戸安藤家變動此末如何と奉存候。此人は聊應酬之才有りて賢を嫉之病甚し。幕庭兩三人之人物有
之、總て此人に嫉まれ閑廢いたし居候。引入に相成候へば目出度事に御座候。

久振に歸郷九州筋之事情段々承り申候。最早天下之勢余程急迫に相成り、深可恐事に奉存候。清正公
御參詣も候へば必ず御來訪奉待候。山海のこと何も大略仕候。以上。

横 存 拜

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

文久二年

一一八 中根鞆負へ 文久二年正月十五日

小楠在熊本
中根在江戸

中根、諱は師質、雪江一に味庵とも號す。越藩の功臣で諸要職に歴任し、春嶽の側には毎にほとんど中根あらざることなく、春嶽の
事功の一半は中根の力にあると云はれてゐる。

十二月廿三日之御書狀到着、忝々拜見仕候。先以上々様益御機嫌能奉恐悦候。隨て賢丈愈御安泰被
成御勤、珍重之至に奉存候。縷々被仰下候次第忝々。就中兩君様益御精業被遊、爲國家奉恐
悦候。當公様御痛足も御全快被遊候段御一統御安心之程奉察入候。將又御縁女様も大抵被爲
濟、當月中にも御引移被遊御模様重々恐悦至極に奉存候。然し何角御心配之程想像仕候。

老公え、一ト際御廣被爲成候御事種々御心配、閣老方も御都合よろしく越中守様へも御心配被成候趣
重々祈望之至、何分此義は當春中には御開運に相成不申候へば難叶、御心配之程奉察入候。最早年
數も相立、格別之御慎戒も自然と幕庭へも相聞候事にて必定御開運と奉存候。左候へば當夏は目出
度御歸國可被遊御國家之大慶無此上御事に御座候。拙生事も君公様より越中守様に御直に御相談
に相成、越中守様も御許容被成候段、定て尙罷出候様被仰付候方と奉存候。左候へば早速に罷出奉

陪侍 兩君上候も半年餘りに相成何角心用意仕候。

内海御受持被_二仰付、横濱御逃れに相成候に付被_二仰下候次第承知仕候。彼是相替り候儀には無_二御座候へ共當座の殆難御逃れに相成申儀はさし當り御苦勞も無_二御座、先々珍重に奉_レ存候。就ては本多大夫被_二召寄、老公様へも久々御目通り不_レ被_レ仕、且は一昨年來之御開明君臣無_二一物之御咄合いか斗御大慶かと奉_レ存候。大夫も近年之心配相達し喜悅之程想像仕候。

御文通之儀に付小笠原卿重之心得にて思召通りに相成兼候段、是以時世之勢と奉_レ存候。爾後如何落着仕哉と奉_レ存候。養母御紋服之儀種々御心配被_二成下、忝々奉_レ存候。

顯光院様御下向も秋に相成候段、此許にては御住居所御建方舊冬は夜を日に懸け大急ぎに被_二仰付候處、右之次第にて少しく寛に相成り申候。

此許一體之事情は不_二相替、鎖國之勢一向に開明之模様には相成不_レ申、然し御許には小笠原掛都合宜敷參り、君上思召に相叶候へば重々恐悅に奉_レ存候。長岡佐渡年明早々出府之積にて御座候處何か江戸より申越候趣有_レ之由にて出立延引に相成申候。

驛州大夫御出府にて御國許之事情御承知被_レ成、定て彌御都合宜敷諸執政中も一致精勵と奉_レ存候。拙生御國許に罷出候砌郡宰一條如何相成候哉、大井は其儘にて轉じ不_レ申町・在・勘三局一致之申談に相成候哉、いまだ何とも承り不_レ申無_二心許罷在候。廟堂内情被_二仰下、誠に依然たる舊光景扱々痛心之至に

御座候。乍_レ去根本之開明は中々六ヶ敷勢にて是さへ開き候へば日本國中引き起り可_レ申は相違無_二御座、尤以難治之難症と奉_レ存候。然し列藩人と相替り外國之事情等直々見聞に相成、且外國之模様日々危殆に迫り候へば如何にも心頭には懸り可_レ申、夫よりして大久保氏出現にも相成候事かと被_レ存候。此人出世は重々恐悅何分人材之種作りと被_二相成度祈申候。此人非常之人材に候へば又一種之氣癖も有_レ之、所_レ希は寛大之度量にて人と相手に不_レ被_レ成のみならず、小田原評定が面勵にも苦勞にも不_二相成氣長く心廣く運候様之工夫第一と奉_レ存候。勝氏も無事に被_二相勤候と奉_レ存候。村田氏二家に御出の節可_レ然御傳被_レ下度奉_レ頼候。

九州筋は彌以鎖國之勢に相成り、就中筑前甚敷家中二つに相分れ候由笑止千萬に御座候。薩は被_二仰下候通り家中も格別之混雜と申事は無_二御座、當二月は彌御出府に相決此許へも先觸も二度か參り申候。柳川は彌以能き都合に參り、家中も大抵一致仕候。池邊藤左衛門御許に出府定て罷出候と奉_レ存候。此人九州中の人材に相違無_二御座、柳藩中も當時に至りては心服仕候。追々には中老にも御拔擧之由に承申候。

此節同行之諸君疾病も無_二御座、御安心可_レ被_レ下候。舊冬十一月より何も長崎に參り、青山・堤・奥村は平戸・五島に渡り鯨漁見物、夫より唐津・下關・長崎・豊前・筑前・肥前・筑後二藩等打廻り、當月下旬に拙宅に歸着之積にて御座候。山形・大谷・松平列は先月初に長崎より直に拙家に歸着、日々程に會業相始專

咄合仕候。就中山形・松平は大分志も相立、珍重に御座候。横山(題)小師匠是は九州中四五藩并長州に打廻り當時拙宅に歸り罷在候。此人始て士道之合點參り心術之修行に確乎と心を立誠に面目を替申候。既に相願置候日數も近まり歸國可_レ仕事に御座候處拙生此地に罷在候迄到留いたし修行仕度念願に御座候間、其趣御國表に申遣し日延相願置申候。此人眞實に修行相成候へば後日講武所之御引立之柱に相成大に都合可_レ宜事かと奉_レ存候。大學より會業相始當時論語に相成り日々種々咄合大分面白御座候。御國許にて會業等いたし候とは各々之心得打替り格別しみぐと相見へ申候。どふしても自國を出不_レ申ては何も無益と奉_レ存候。

驪州君御出府に付ては外記君(酒井)は勿論酒井(十之丞)・村田諸君日々御集會何かの御咄し合想像仕候。定て 老公(春雄)當公(茂昭)之御前御會御咄等節々之御事と奉_レ存候。酒井君舊冬御引入中格別之御工夫之由、何か不_レ存候へ共必定一格之價相増し可_レ申、珍重之至奉_レ賀候。石原氏(長十郎)氣癆消亡深感じ入申候。萩原氏(金兵衛)彌以長進工夫嚴密と奉_レ存候。其他諸君不_レ相替_レ修勵之程想像仕候。拙生歸郷以來日夜家人と相樂み或は諸生と講論いたし、暇は山水を眺望いたし何も心にさし障り候事も無_レ御座_レ和樂に此日を送り申候。夫故か何之申分も無_レ御座_レ壯健に罷在り、御安心可_レ被_レ下候。此段拜復迄拜呈、餘は後雁に附與仕候。頓首。

正月十五日認

雪江賢兄

小楠拜

机下

尙々時下御自愛可_レ被_レ成候。當節は諸君に別呈不_レ申、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。

長崎表相替り不_レ申、浪平港も色々違亂に相成り、必竟小曾根(從家)一家者共不埒千萬故にて御座候。全體長崎町人之惡癖として諸藩之役人・他國之商人共をたぶらかし金銀品物かすり取候事のみにて、何方よりも長崎之引合には大手ごりいたし、當時に至りては交易も行れ兼候程に相成申候。就中小曾根は其巨魁之者にて長崎町人よりも手を置候位にて有_レ之候。近年 御國を後立にいたし様々の我儘を相働候に付此節平瀬(儀作)より手切に相成、浪平港は小曾根にまかせ、別に町内にて福井屋をこしらへ 御國之交易品物等は一切小曾根之手を借り不_レ申福井屋よりさばき、且又是迄御役人初浪平港に居住いたし候も福井屋之方に引き移り、小曾根とは全手切に相成申候。右に付小曾根浪平港を受持にても金子之根城無_レ之實に致し方も無_レき困窮に相成候のみならず、御國と手切いたし候ては長崎中に面目を失ひ必死之困窮に落入申候。先月末拙宅に參り様々辨解いたし候間一々及詰問候へば一言半句之申譯も無_レ之引取申候。尙當春は御國表に罷出嘆願仕候積に御座候、萬一 御國に罷出候ても平瀬見込通りに手切に相成候方重々可_レ然奉_レ存候。平瀬も當春は歸郷之打立に御座候。いまだ拙生方へは參り出來不_レ申、何れ歸郷之砌に立寄之事と奉_レ存候。

ホンベ傳習も松本良淳手許に風波懸り、松本も一旦は江戸表に引取候筈に御座候處、案外風波も治

り八月迄は滞在に相成り候間諸方諸生も足を留罷在候。當時は貳百餘にも滿候人員と承り申候。已上。

(松平慶民藏)

一二九 中根鞞負へ

文久二年八月二十五日

小楠・中根
在江戸

春嶽は政事總裁職となつて間もなき文久二年八月二十四日老中等の因循に憤慨して引籠つたが、多分その時の書面であらう。

先時は御妨仕候。然ば能々勘考仕候處御出方に相成不_レ申候ては何もかも瓦解可_レ仕、去らばとて聊も見詰は無_ニ御座_一候へ共唯々 廟堂に閑坐被_レ成候迄にて鎮靜之一手段と奉_レ存候。左候へば何か手綱も付き可_レ申哉、先きは不_レ被_レ斗候へ共どふでも御出方之方利ある事に奉_レ存候。此段心付き候間不_レ閣拜呈仕候。以上。

廿五日

小楠 拜

味庵 君

机 下

(松平慶民藏「都鄙文書」)

一三〇 宿 許へ

文久二年閏八月八日

小楠在江戸

文久二年六月小楠は四たび春嶽の招聘にて甥大平と内藤泰吉とを同伴福井に赴く途中春嶽の急使に迎へられて小楠のみ出府し、大平と内藤とは小楠に別れて一旦越前に落付き、更に二十日ばかり後に出府して小楠と同居。本書は小楠春嶽の帷幄にあつてその機密に參與中一橋慶喜・閣老及び諸有司にその才幹を認められて幕府に重用の議ありたる時のもの。

一書拜呈仕候。秋冷に罷成り増御機嫌能奉_ニ恐悦_一候。私相替り不_レ申外大平・泰吉以下何も申分無_ニ御座_一罷在申候間御安心可_レ被_レ成候。此頃は漸々秋冷相催し朝坏は羽織も懸け申位にて暮し能、夫故あしき流行病も漸々静まり大分心よく罷成り申候。御許よりは御書狀一切着不_レ仕、如何に御暮し被_レ成候哉。はしか并_(麻疹)ころりの流行朝夕あんじ申上候。

昨日嘉悦より七月廿四日認の書狀到着、初て沼山津相替り不_レ申候段承り責て安心仕候。最早夫よりも四十日程に相成り一切御狀着いたし不_レ申、如何之次第に候哉と思ひやり參らせ候。何に次之飛脚にて必々參り可_レ申候。此許日夜多用は相替り不_レ申、中々非常之折柄にて格別心配仕事に御座候。御側衆・大御目附初御役方追々咄合等誠に寸暇無_ニ御座_一候。其外御老中へも罷出申事に御座候。此頃は 幕庭へ被_ニ召出_一候筈に御議定に相成、春嶽公丁度御引入にて有_レ之候間大議定御窺に大御目附被_ニ罷出_一候處、其前に様子ほのかに相聞へ居候間必死に御斷申上候覺悟之次第春嶽公に申上置候間大御目附へ十分御斷に相成、此上にも是非共召出候事に候へば横井は殿斗覺悟罷在候段迄御咄合に相成候間、廟堂上にも重々尤之筋と却て感心に相成候趣にて、此一事件は存念通りに治り候て先安心仕候。

大平も洋書調所に英學修行に日々參り大に競ひ申候。同人より委細は申上候と被_レ存候。出立前おつせより註文のきぬ糸并針遣し申候。

新宅かべぬり等定て出来いたし、二階物置も恰好よろしく色々の物も治り候事と被_レ存候。最早稻も少々は黄色に相成り秋之景色思ひやり申候。此許にては秋の野は申に不_レ及青色の物さへ見候事叶ひ不_レ申、夜分酒給_レ候折は泰吉杯御許之事のみ咄し出し申候。御許に居候へば(新種)かんしやくも起り無理も申候へ共客中にては唯々やどもとゆかしく思ひやり候事のみ有_レ之、誠に困窮の至りに御座候。

朝夕の給物是には誠に困入り申候。先便にも申上候(青海苔)あをのり早々御遣し可_レ被_レ下候。外にあぶらめ(魚名)も時候にて御遣し奉_レ希候。

來年夏にも相成り候へば是非々々歸國いたし候覺悟にて彌以沼山津永住之心得に御座候間漸々修覆等御世話可_レ被_レ成下_一候。金子も小野殿歸り又は當冬迄に五十兩程さし上可_レ申、夫にて不足いたし候へば尙さし上可_レ申候。何分御世話之程奉_レ希候。

出立前申上候通り梅の木の方は西屋敷の道に御直し、不足分は何方よりも御求隨分多分に御うへ被_レ成、其花の頃は罷在り見可_レ申と相樂申候。至誠院様御帶地は小野殿歸にさし上可_レ申候。火事羽織先便に申上候通り定て御廻しに相成候と被_レ存候。先此段迄申上候。以上。

後 八月八日認

横井平四郎

至誠院様
左平太殿
おつせ殿

尙々時分柄御自愛可_レ被_レ成候。泰吉先日來コロリ相煩、一旦よ程氣遣いたし候得共都合よろしく快く相成申候。兎角旅中病人には困り入申候。御許如何と案じ申候。小法主も彌以元氣よろしく飛びあるき可_レ申候。何も後便に可_レ申上候。以上。
(小楠遺稿)

一三三 宿 許

へ

文久二年閏八月二十五日

小楠在江戸

前文尙々書にある如く内藤コロリにかゝりたる後、間もなく小楠も亦同病に罹つた。幕府では小楠の擧用につきては思止り、その代り一時細川家から借用の再議ありしも小楠病氣全快に至らぬ爲その事情の詳悉を得ない時のもの。

一書奉呈仕候。秋冷之砌益御機嫌能奉_レ恐悦_一候。隨て此許には私初大平以下何も相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。然處私事去十五日朝より暴瀉相催し晝頃に至りひた_くとあしく相成り暮前よりは人事をわきまへ不_レ申、下シ(下痢)はやみ不_レ申誠に危(危)どくの容體に御座候處早速手廻しよろしく、公義之御醫者西洋家は大抵皆々打寄評議之上治療いたし候故か其夜之半頃より下シとまり候てねいり申、夜明け候へば何とやらん人心地も付き申候て何も大(息)いきをつき悦申候。其後は次第によろしく日々元氣も付申候へ共、

死病の活き上り候事故年も寄り候へば若者之様にも參り不_レ申今日迄も牀上げ出来不_レ申候。昨日共よりは食事過ぎ候に大に迷惑仕候。泰吉快復後五六日よりの事にて御座候。何に五六日も過ぎ候へば外出も出来可_レ申、少も御氣遣被_レ下間敷候。

(小楠先妻の家) 小川方散々此節迄は書狀仕出し得不_レ申、よろしく御傳へ可_レ被_レ下候。

おつせ・小法主はしか相濟み、大に安心いたし候。

此許御改革追々被_レ仰出、誠に非常之御事に御座候。就ては私事非常之御用にて、先便にも申上候通り一橋様初御老中方きつと御頼に被_レ思召候事にて、此節之病氣早速相聞へ候や否所々より御醫者等さし越され御見舞等御座候。就中於_ニ御城_一は上様より春嶽様迄追々容體御尋被_レ遊、誠に以非常出格類例等も無_ニ御座_一候事にて難_レ有内深く恐入奉_レ存候。必竟右之通りのみよふがもの故如_レ此死病もいき上り候事と被_レ存候。

私事被_レ召出_ニの儀御斷申上候事は先便に申上候通りに御座候處、病氣之前又々模様打替り、根より御こぎ上げは御無理にて、御用中當分御當家より御借り受被_レ成候筈にて、丁度只今越前より御借受同様之御取あつかひと申御内意御座候。是なれば御斷も出来不_レ申、一と先罷出不_レ申ては難_レ叶次第と相心得申、則委細龍ノ口御家老手許に申入置候間此節之御便には御許にも申越候事と被_レ存候。然し病氣後は何事も春嶽様より御遠慮にて御申聞無_ニ御座_一候間此事如何成り行候哉承知不_レ仕候。い才は次の御便に

は相分り可_レ申候。

(永平) 元田も家内死後宿本無_ニ餘義_一さし支にて願下り申候。何に來月七日頃は此許出立可_レ仕候。同人歸國にて不_レ遠御承知可_レ被_レ成候。此節は急やとひにて此段迄申上候。餘は後便に可_レ申上_ニ候_一以上。

後 八月廿五日

横井平四郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

お つ せ 殿

尙々此許此秋は雨斗にてとんと晴れ不_レ申迷惑仕候。御國許如何、定て御同斷かと奉_レ存候。時分柄御自愛專一に奉_レ存候。以上。

(横井時靖藏) 小楠が右書面を認めた前日の夕、大平が郷里の母と兄とへ書いた書狀がある。大して興味あるものではないが右小楠の書面の補遺となるから左に掲げる。

横井大平より母と兄へ

先月十九日御認之尊書相達、忝奉_ニ拜見_一候。先以御揃愈御安泰可_レ被_レ遊_ニ御座_一、珍重之御儀に奉_ニ拜賀_一候。此之元御叔父上様次第御様子宜敷、今日共は大略平日通りの御容體に御座候、御安意可_レ被_レ下候。隨て私共末々迄無異罷在申候間乍_レ憚御安心可_レ被_レ下候様奉_レ願候。

一 おつせ様(又雄)又さんはじか首尾能相仕舞に相成候由何より以奉_ニ恐悦_一候。御叔父様にも御案じ被_レ成居候處十九日の御狀にて誠に、

横井小楠遺稿

御安心被遊候間左様御安心可被下候。

一 御狀拜見仕候へば柳川(小川家)丁誠(小川家當主)に何とも難申残念至極に奉存候。源左衛門殿は少々宜敷申、御伯母様にも御煩被成候由、尤御老人様之御事に付如何や夫れ已奉察候。御飛脚も川支滞留いたし此之表へは當月廿三日相違、其後流行も如何に御座候哉奉遊察候。申上には及不申候得共御母様初御自身御養生專一に奉祈候。柳川丁子供別て御世話可被成奉存候。扱唯今小野御叔父様・元田相見、御叔父様御咄に承り候へば御伯母様には御口御かなひ不被成候由、別て御心配可被成奉察候。御狀御仕出後之御様子如何にと夫れ已奉察候。

一 唯只御叔父様御出被成、明日御飛脚出立之由御咄御座候間早々略仕候。以上。

閏八月廿四日夕認

横井大平

御母上様
左平太様

貴下

(横井時靖藏)

一三三 宿許

文久二年九月十日

小楠在江戸

幕府の聘を全く辭し得たる時の書。

元田(永平)十五日出立仕候に付一筆奉呈候。よ程秋冷に罷成り益御機嫌よく可被成御入、恐悦に奉存候。私も病後次第に快罷成り、不遠内には出勤も仕候間御安心可被下候。先つは(叔父彦次郎)小野殿御歸國にて此許の様子い才御承知可被成、又元田歸り候て其後相替り不申儀は御聞き被下候間格別申上候儀も無

御座候。

私御やとひの事病後早々も被仰付候御模様にて御座候處此頃尙又達して御斷申上候へば御聞入れに相成り當分安心仕候。其外此許之様子は才元田より御聞可被成候間何も略仕候。近日少しく快く相成候へば來客やら何やら不_二相替_一多用にて、病後元氣にも差障り、可_レ成丈相斷候へ共無_二餘義_一用事抔誠に困り入申候。乍去漸々快く御座候間少も御氣遣は被_レ成間敷候。御許コロリも定て静り候事と被_レ存候。此許も近頃は大に治り何の沙汰も無_二御座_一、沼山津は度ごとに入り込み不_レ申、當年も同様と被_レ存候。誠に仕合_レ成る事に御座候。昨日は村祭りにて來客も御座候。夜前泰吉抔と咄し合申、敬之助列今朝迄も給居可_レ申候。壽加手製之酒も出來いたし今朝は(相煮カ)かすにと奉_レ存候。

元田に金子三十兩借申、(貸の意)當冬・來春迄に返し候筈にて御聞置被_レ成候様奉_レ存候。御藏札手許に參り差上申候間當冬根段よろしく御座候へば御拂可_レ被_レ成候。十三石借も御許にて御受取可_レ被_レ成候。此節萩頼(角兵衛)のたばこ入(煙草)・させる遣し代錢三兩壹歩餘にて留守に遣し候様申遣候間御受取可_レ被_レ成候。當冬は色々様々の物入多く、金子御下し申上候事些六ヶ敷、右之分にて御仕舞被_レ成度奉_レ存候。乍然不足も仕候へば日向屋に御相談可_レ被_レ成候。菊は定てさき申たるにて可_レ有_二御座_一候、如何やと思ひやり申候。最早秋もくれ新宅之景色かり田新雁之聲抔いか計りと被_レ存候。此許にては日々物見より通りをながめ申候外何も樂しみ無_二御座_一、誠に困り入申候。新宅二階上ぬりは定て出來仕候と被_レ存候。出府所も少は御手入被_レ

成では叶ひ間敷、廊下杯(雨漏)もいたし候間かわらきせ不申所は瓦を御かけ被成候方可然哉、其外は來春に何も御延し被成候様奉存候。來春に相成候へば此許の模様も打替り可申哉、其上にて普請等はともかくも仕り可申、何も左様に御聞置可被成候。先此段迄申上候。い才は元田より可申上候。以上。

九月十日

横井平四郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿
お つ せ 殿

尙々時分柄御自愛可被成候。左平太は嘉悦に出府稽古(勉強の意)がま出し候と被存候。留守はさぞ御さびしく御暮し可被成、又法主彌盛長申分も無御座、悦入申候。大平は日々洋書しらべ所に參りがま出し申候。

友岡彌三死去、誠にいたわしき事に御座候。私出立之節見舞候處よ程之容體、とても六ヶ敷と被存、金杯遣し申、跡之處熊四郎氣遣しく定て久右衛門世話仕候事と被存候。此節御叔母様より熊四郎外出之儀起り可申、決して不相成様に久右衛門に御咄し可被成候。小川清心院様は定て御甘快被成候と被存候。源太後妻一日も迎ひ不申候ては難叶、どふぞ程能人躰御座候へかすと

被存候。何方へもよろしく御申傳へ可被下候。以上。

(小楠遺稿)

一三三 宿 許

文久二年九月晦日

小楠在江戸

明日御雇出立に付一筆申上候。増御機嫌能奉恐悦候。私も次第に快罷成り近日は外出も仕候。大平其外も聊申分も無御座、御安心可被成候。然ば九月六日之御狀四五日前に着いたし、い才承り悦入申候。左平太被申越「ミニヌラル」も見事に出来候由、大慶に存候。其外コロリも沼山に入り不申段誠に以仕合千萬、小法主も彌以壯に盛長いたし大慶いたし候。おつせ定て生出し申たるにて可有御座、何角御世話と奉存候。いか成る者にて候や、御書狀參り候を相待罷在申候。自然男子にて候へば秋峰院様御幼名竹童タケドコ可然、女子なればどうともよろしく御座候。此許種々之混雜にて甚以心配いたし候。病後誠に困り入申候。秋の天氣もよろしく且芝居も大當り、小團次・田之助組合お七吉三郎杯大評判にて候へ共一向に夢にも見られ不申候。扱々此節の詰は御察可被下候。西園門外梅の木は可成丈多く御うへ付可被成候。新へや西のかきの木二本の内小さき方はいづ方へぞ御うへかへ可被成候。來春に成候へば川方は石垣築立不申候ては難叶、東の方杉垣迄は是非いたし候方可然被存候間是迄東のかき(垣側)かわに有之候梅木杯も總て御なをし被成候方と奉存候。是等にて金子御入用は被仰越候へば夫々さし上可申候。小の殿(野)に御傳言仕候通り私歸郷之成り行いまだどうとも分り不申候故本屋のふしん

は御とり止め(編)も留迄にて被_レ差置一度候。最早年内は四月斗に相成り年内にはどふともこふとも分り可_レ申候。其上にてい才可_二申上_一候。近日中には御飛脚立申候間其節い才は可_二申上_一、先一寸不_二相替_一段迄拜呈仕候。以上。

九月晦日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

おつせ殿

尙々時分御自愛御いたみ無(病氣)き様奉_レ祈候。壽加にこり酒能出来候由一抔給度、山々に御座候。病後給物には誠に困り入申候。
(横井時靖藏)

文中「おつせ定て生出し申たるにて可_レ有_二御座_一」とあるが、九月十五日に女子が生れて「みや」と命名した。これより小楠の書狀には「又法主」と俱に「びくに」「小びくに」の代名詞が連發される。

一三四 嘉悦市之進へ

文久二年十月二十三日

小楠在江戸
嘉悦在熊本

一書拜呈仕候。時下御全家愈御安康珍重に奉_レ存候。隨て老拙相替り不_レ申候、御安心可_レ被_レ下候。大病後近來漸甘快に趣扱々危き命を續き申候。先便には御書狀被_二成下_一忝々、御奉職(御奉方組、かとなる)即日何角御多用と奉_レ存

候。此許種々様々變動不_レ一、日夜苦心御察可_レ被_レ下候。必竟は 廟堂俗論否塞、第一 京師御尊奉一條誠に六ヶ敷、近日に 勅使も參向相迫り大混亂に御座候。然し是は大抵是迄之格式も改り候方に落着之御内情に候得共、二百年來 京師を押付けの大弊病此節一時に御改正に相成候勢十分六ヶ敷、是は必竟氣習病根にて所謂不知不覺之私に候へば尤以改正之大難事に候。然し此大難事改り不_レ申候ては 京師御尊奉之實地相立不_レ申候へば決して 公武御一致は出来不_レ申候。今日之勢に至り候ては 京師は御憤興 幕府は衰弊、東西之勢如_レ此之盛衰に相成候へば頼朝公以前の君臣に復し不_レ申ては天命人心之正理に背き、日本全國大亂之外は無_二御座_一候。夫故今日に至り候ては何も扱置き君臣の大禮を被_レ正、十分是迄の非禮を御斷り、 京師御尊奉之實地相立候事は第一之事にて、此事因循不_レ改候ては何事も行れ不_レ申候。忽天下之大亂にて御座候。右之次第にて越藩にて御奉職之初第一に被_二仰上_一候筋は 幕府是迄の私を御去り天下公共之正理に御順ひ被_レ成候様、其實は 京師御尊奉第一にて一切是迄之御仕來り御改正、君臣之大義を御立被_レ成候事に有_レ之、此大義相立候へば其外は皆枝葉之末々必ず漸々被_レ行可_レ申候。尤形跡にて無_レ之御實心之御改正重々大切之御事此一條始終御申立にて今日に至り、形跡之上はどふなりこふなり參り可_レ申候へば 廟堂一致之御實心之處甚以痛心之至に御座候。中將君(春忠)にも近日引入に相成申候も此一條にて有_レ之候。いまだ御登城之儀は見え不_レ申候。右之通りにて長州・土州・會津杯は能々情實相通じ何の申談じも出来候へ共、却て 廟堂六ヶ敷迷惑千萬に御座候。其外之事様々に

候へ共一々不_レ及_二呈達_一候。何に 勅使近日御參向之上又々變動いたし可_レ申候。其上にて得_二貴意_一可_レ申候。先此段拜呈、御社中へも御内達可_レ被_レ下候。以上。

十月廿三日

平 四 郎

市 之 進 様

(小楠遺稿)

一三五 宿 許 へ

文久二年十二月九日

小楠在江戸

明後十一日御飛脚立申候間一書呈上仕候。寒中益御機嫌能奉_二恐悦_一候。隨て私相替り_(不_レ申脱カ)大平以下無事に罷在り御安心可_レ被_二成下_一候。去月六日左平太共よりの書狀相達、御替り無_二御座_一びくにも宮參等いたし彌盛長仕候段悦入申候。次第に人心地付き可_レ申、何角思ひやり申候。

顯光院様・鳳臺院様來る十八日御發駕、御前様廿日にて御屋敷中殊之外いそがしく事に御座候。先月廿五日より此許御前様濱丁御屋敷に被_レ爲_レ入三日御到留、且又五日に顯光院様此許に被_レ爲_レ入夜明方に御歸殿にて御座候。御母子様御生き御別れ誠に御いとしき御事に御座候。御三方御立後は龍ノ口初さぞ

淋敷事に相成可_レ申候。

太守様今比には御國御發駕可_レ被_レ遊、就ては御許種々様々之評判さわがしく可_レ有_二御座_一候。春嶽様も

正月七日比には此許御發駕御上京可_レ被_レ成、いまだ御達には相成不_レ申候。私も何に上京と被_レ存候、然しいまだ被_二仰付_一は無_二御座_一候。先便にも申上候通り京師之模様により候ては一と先歸郷之心得に御座候へ共如何成り行可_レ申哉、ずんと相分り不_レ申候。何分上京之上にて相決可_レ申候。石垣・なげし・西園之事申上置候處當冬は様々之物入にて右代料二十五兩程引き除けさし上候儀些操り廻し六ヶ敷御座候間石垣等暫御見合被_レ成度奉_レ存候。來春に相成り金子もさし上可_レ申、其上にて御修覆可_レ被_レ成候。茶種も大分御手に入り候段大慶仕候。當暮はとや角御仕舞も出來候段先便被_二仰下_一安心仕候。萬一不足も仕候へば日向屋に被_二仰聞_一候てよろしく御座候。此節格別申上候事も無_二御座_一候。此段迄略呈仕候。以上。

十二月九日

横井平 四郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

お つ せ 殿

尙々此許近日は寒氣少しはよろしく御座候。何に正月様には再寒と被_レ存候。御許如何、定て田表杯こふり候事と奉_レ存候。最早無_二餘日_一罷成り、不_二相替_一種々様々之事共にて晝夜寸暇無_二御座_一、困り入申候。何も後便に可_レ申上_二候_一。以上。

(横井時靖藏)

一三六 宿 許

文久二年十二月十六日

小楠在江戸

來る十八日御雇立申候間一筆奉呈仕候。寒中益御機嫌能奉_ニ恐悅_一候。私事も相替り不_レ申大平以下同様無事に罷在候間御安心可_レ被_ニ成下_一候。顯光院様・鳳臺院様御二方様十八日に御立、御前様廿二日御立にて熊本御屋敷内は殊之外そふく敷、御立後はいか斗御屋敷中さびしく相成可_レ申哉と奉_レ存候。

春嶽様も正月十日前後は彌以御出立之御内定にて此節は蒸氣船より御出懸けの御積、私も御同船大平を召連候筈にて、泰吉以下は海道を御供同勢と一同に遣し候筈に御座候。蒸氣船にて候へば都合よろしければ二日三日路にて大抵五日路と存候へば無_ニ相違_一大坂に着仕候。誠にめづらしき事に御座候。當暮も誠無_ニ餘日_一相成り、殊之外いそがしく困り入申候。今一應は此許より書狀仕出し可_レ申候。其餘は大坂・京師より可_ニ申上_一候。

來春御上洛諸事相濟候へば私事も一應御國に歸り候心得に候へ共追々申上候通り如何成り行可_レ申哉、其節に至り不_レ申候ては分り不_レ申候。歸郷出來兼又々江戸に罷越候事に候へば大平・泰吉は京師より歸し申心得に御座候。

普請之事は先便申上候通り今暫止方に被_ニ成置_一度奉_レ存候。龍ノ口懇意の人抔頻に引き出をす、め、綾部敬之允屋敷可_レ然と申事にて、都合によれば敬之允とかへくいたし上_レ錢拾五貫目程も遣し候へばよろしく抔と都築^(四郎)・長谷川^(右衛門)より咄し申候。兩人此節御供にて歸り申候間頼み置候事に御座候。左様之相談に落着仕候へば西園の方に別莊を造らへ時々出浮之方も可_レ宜かと奉_レ存候。然しいまだ取りきめ候事にては無_ニ御座_一候。最早此許に罷在候も廿日餘りと相成り、殊に年暮にて何角之多用これ日も足らず送り申候。此段迄拜呈、餘は何も略仕候。以上。

十二月十六日

横井平四郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿
お つ せ 殿

尙々随分々々御自愛可_レ被_レ成候。此許は近日は餘り寒氣にても無_ニ御座_一、先づは暮し能御座候。何に正月には餘寒も可_レ有_ニ御座_一候。御許如何と奉_レ存候。又法主元氣宜敷事に被_レ存候。びくにも次第に盛長いたし可_レ申候。此節も何方へも書狀遣し出來兼、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。以上。

(横井時靖藏)

一三七 吉田平之助へ

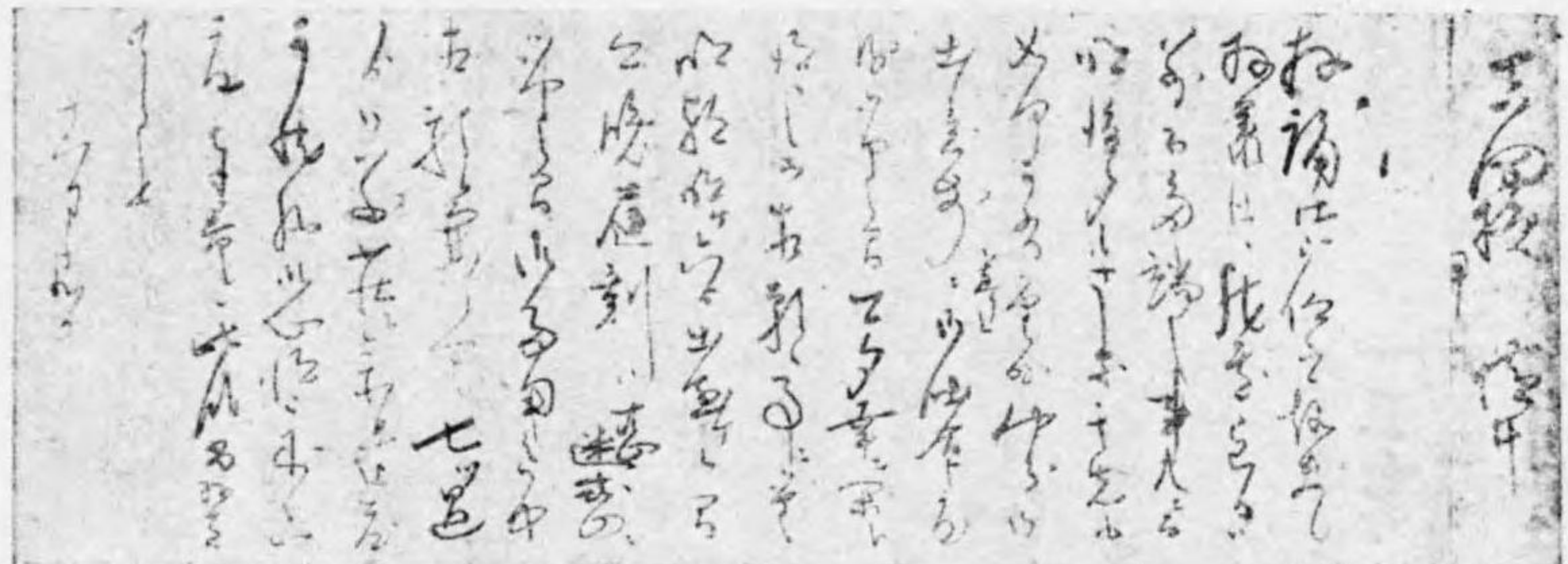
文久二年十二月十九日

小楠・吉田
在江戸

小楠は吉田平之助・都築四郎と會飲中刺客に襲はれ、吉田は重傷を蒙り數日後落命したが小楠は幸に難を免れ都築は微傷を受けた

横井小楠遺稿

三九五



江戶遭難の吉田平助之助に寄る小楠の簡手

(吉田傳次藏)

のみであつた。然るに小楠と都築は此の場の行動が士道忘却であるとして知行を召上げられ士府を差放たれることになつた。此の書面は右遭難のあつた日にその遭難を惹起した會合につきての打合せのために認められたもの。

拜誦仕候。被_レ仰下_一候趣夫々拜承仕候。然處近日は別て多端之事共にて明後夕もさし支其先も如何可_レ有_二御座_一哉、何分御出立前に寛りと御咄合申度儀御座候間今夕幸に閑を得申候て相願候事に御座候。明(午前六時)朝明ヶ六より出懸け候間今晚遅刻は甚迷惑に御座候間、御多用之御中相願兼候へ共七ツ過(午後四時)より御別荘に參上仕度、可_レ然様御心得被_二成下_一度奉_レ希候。此段尙拜呈仕候。已上。

十二月十九日

横井

吉田様

(吉田傳次藏)

一三八 宿 許 へ

文久二年十二月二十一日・小楠在江戸

小楠は前記十六日付の書面にて春嶽と同行して入浴することになつたのを楽しみ報じたその三日後前文説明の如き出来事に遭ひてその計畫顛倒してしまつたので、本書は

その遭難の状況と此の後の身の振方とを記したるもの。

一書奉呈仕候。益御機嫌克奉_二恐悅_一候。然ば私事不慮なる變事出来、誠に致方無_二御座_一痛心之至に御座候。右一件之次第は來る廿五日吉田平之助京師へ被_二差立_一候に付其談之用向有_レ之一昨十九日之夕七ツ過より同人妾宅檜物丁と申所に有_レ之二階にて都築四郎・谷内藏允參り、都築も廿三日(一本二)に出立仕候間離杯之心得にて酒肴取はやし申候内、谷は先に歸り、夜五ツ過頃(午後八時)に至り、何者にて候哉兩人拔身にて聲を懸二階に懸上り候を見受候間、私は上り口際に居候て大小取候間無_レ之候に付兩人之者と行違ひ階子走り下り階子半にて又一人の者に行違ひ申候。無刀にて有_レ之候間常盤橋御屋敷へ驅歸り此道十丁位差替追取、同所へ驅付候處狼籍者どもは退散致候跡に相成候。扱て承り候へば右之者ども吉田を目懸切懸り候間直に組合之内、一人之者吉田之股を切申候。夫より組合ながら落ち物分れに相成候。都築も一人切懸り刀鳴居に打込候間組合にて二階之縁より落物分れに相成、都築手疵天窓一ヶ所顔一ヶ所、吉田は顔に一ヶ所股一ヶ所、吉田は餘程重手にて候得共只今の模様にては命分には障り申間敷、都築は格別之事にては無_レ之候。誠に不慮の變難にて絶_二言語_一候次第に御座候。扱狼籍者ども何者なるやら相分り不_レ申候得共、私家來忍び提灯無敵に御座候にて迎に參り候節怪敷者ども十二三人も其近邊に居候て一人は其跡に付來り候由申出候。私驅歸り候道にては見受不_レ申、其夜龍ノ口詰足輕之者黒瀬市郎助・安田喜助と申者晩方より外出、直様致_二出奔_一候。此者外出之節長州之者一人誘引にて出候。近來取沙汰にて私開國談を唱へ申候

迎意趣を含むもの御國者ども長州・土州の者杯示し合せ致し聞討一企有之由にて、長州藩桂小五郎と申人より密に心付候事も有之、外にも土州之藩よりも同様申聞せ候。又吉田は先年彦根大老擅權之節大老方に相成色々取斗候由にて土州人杯憎居候唱専ら有之、近日は兩三度も吉田妾宅何とやらん見繕ひ等致候由、何れも私・吉田を目懸候に相違無之、右出奔人専吟味に相成、一人にても被_レ捕候へば何も分り可_レ申候。右之通りの次第にて誠に不思議之禍に逢申候。則別紙之通書付差出し申候。私其場之處置階子を懸下り候へ共有合之物棒にても何にてもおつとり懸上り兩人を助け身命限り働候儀當然にて御座候處、無刀故駈歸り候て其機に後れ候處士道之處置を失ひ候て深恐入奉_レ存候。依_レ之病氣下之願書春嶽様迄差出、龍ノ口へも内意申入置候。一日も罷下り候心得に御座候處此許君臣にては別格之議論有_レ之候。其主意は越前國中五ヶ年来種々之混雜之所今日に至り上下一致治平に至り候も全く私致_三心配_一候儀故にて有_レ之候。且御奉職以來今日迄御處置等私内々御助け申上候事様々にて實に杖柱と御依頼に相成、因て此度之變亂も起り候に相違無_レ之候。然るに私此節之處置士道を失候故御國許に罷歸り相愼候儀私に於ては重疊尤之次第にて候得共、怨を懸候者様々有_レ之道中は勿論御國許に歸り候後と申候ても如何成禍變致_三出來_一候儀も難_レ斗事に候。若哉左様之變も出來致し候へば春嶽様に於ては格別之功勳恩も有_レ之而已ならず師弟之禮をも御取被_レ成候御事に候へば一旦の禍誤を以御見捨被_レ下候儀は天地神明に對し御濟不_レ被_レ成、此上此信義を御失被_レ成候て何を以總裁職を奉ぜらる、哉實に御一身之大事に

關係仕候。尤是迄等閑に押移られるより此節大變も生じ候事にて夫は重疊之御誤に有_レ之候。乍_レ去夫は過去之事にて致方も無_レ之事、是より後之事重疊御念被_レ入私事龍ノ口の様引取せ度段昨日懸合に相成候間、右之通之御主意にて禍亂治候迄は福井方へ御引取せ被_レ成福井に閉居罷在候へば御安心被_レ成候との御主意にて、今暫く龍ノ口へ此次第被_三仰向_一候段、且太守様へは御上洛之上御直に御相談可_レ被_レ成との趣昨夜執政より御達有_レ之候。於_レ私何とも可_三申上_一筋無_レ之只々恐入奉_レ存候。私一身はケ様之不東仕出申候上は如何成禍變も聊か厭い可_レ申様も無_三御座_一候得共、春嶽様御一身に關係仕候に付此上は龍ノ口との御相談之落着致候處に處置可_レ致相心得申候。右之次第にて誠に痛心之次第にて御座候。嘸々御驚可_レ被_レ成、何共申上様も無_三御座_一候。乍_レ然人事變態如_レ此事に候へば乍_レ憚御氣強に被_三思召_一、家内之面々御引立被_レ下度重疊奉_レ希候。此節は他事差置此段迄申上候。縁家中心易き方々別に書狀も差出不_レ申候間此紙面御見せ被_レ下候様奉_レ存候。是より後之儀は後便より可_三申上_一候。已上。

戊十二月廿一日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

おつせ殿

尚々随分々々御自愛被_レ成度、重々奉_レ希候。此節之事にて左平太嘸々氣落可_レ致候へども、重々修

行を心得、張立候様吳々存候。

(肥後藩國事史料)

右文中別紙の通り書附を差出したとあるのは左の届状。

届 状

私儀昨十九日夜都築四郎・吉田平之助近々此表出立に付檜物町々家に於て離杯相催候處、五時過狼籍者兩人白刃を提樓上へ登候を見懸候得共、其節私儀腰刀側近く無之に付直様階下へ走り下り候節又々一人に行違申候。夫より松平越前守様御屋敷へ馳歸、兩刀追取、同所へ駈着候得共事散候後に相成候。右に付尙又家來共々承糺候處、最初私迎に罷越候節檜物町河岸に致し覆面候者十三四人罷居、跡を慕ひ罷越候様子に御座候。其節都築四郎・吉田平之助手疵を負申候。私儀狼籍者可打留處腰刀身近く不差置機に後れ奉恐入候。右之趣即夜不取敢御達申上置候得共、尙又篤と承糺候次第奉申上候。以上。

十二月廿日

横井平四郎

(同上)

一三九 元田永孚へ

文久二年十二月二十二日

小楠在江戸
元田在京都

一書拜呈仕候。時下愈御安康に被成御勤、珍重の至に奉存候。此節御許御留守居被仰蒙目出度奉祝候。然ば私事不慮なる變難に逢ひ誠に痛心之至、御察可被下候。定めて御承知と奉存候間委細の儀は略仕候。就ては春嶽公思召之筋被爲在、龍ノ口に御懸合之上ト先福井表に罷越候筋に相成

り、今晚此表出立中早にて罷越申候。右に付て御内談之儀も御座候間、御目附村田巳三郎此紙面持參致候間御逢被成下、萬端御咄合可被下候。委細は村田より得貴意可申候。此段迄略呈仕候。以上。

十二月廿二日

小楠 拜

茶 陽 賢 兄

尙々福井より宿状さし出可申候。御届吳々奉頼候。

(元田竹彦藏)

文久三年

一四〇 宿 許

へ

文久三年正月十二日

小楠在福井

小楠福井に落着き、大平・内藤も後から來福せる時のもの。

一書奉呈仕候。春寒之砌愈増御機嫌能奉恐悦候。私事も不替無異に罷在り、御安心可被下候。然ば大平列先月二十六日出立にて昨夕此許に到着仕候。下々迄聊も申分無御座壯健に罷在り、御安心可被下候。大平・泰吉出立前日に兩人共に春嶽様御前に被爲召段々御慰勞被遊、御手づから拜領物も有之誠に難有御事に御座候。大平へは別て御懇にていくつに相成哉、立つて見よと被仰候間則立申候へば殊之外大男と御ほめ被成候。兩人共に怪しからず難有申候。春嶽様へは來る十五日に御船に

て江戸御出帆御同船に相極り、御船中大抵三日より五日位之御積りにて大坂に御着、夫より京師に御出方にて御供は其前に大坂に罷出申候。何に二十五日比迄には御出京に相違有御座間敷候。左候へば先便に申上候通り私身分之事は(細川慶順)太守様に御直に御相談に相成り、どふとも相決し可申候。何に二月初には何も分り候方と相心得申候。其上大平・泰吉外に誰ぞ附け候て歸郷致させ候存念に御座候間左様御承知可被下候。

私江戸出立前 廟堂中御老中方何も春嶽様思召に御一致に相成り至て御都合よろしく、其後も追々江戸表より申越候次第聊あしき事情は無御座候。尤春嶽公思召筋 京師御尊奉は申迄も無御座候。其外之稜々夫々正道を御ふみ被成候御事にて自然と京師えも聞へ、關白様奉初御一統方春嶽様・容堂様御上京を御待被遊候御様子にて、只今之處は京師中殊之外靜に御座候段相聞へ申候。

將軍様えは二月七日蒸氣船にて江戸御發帆被遊候御内定之趣に御座候。右之通りにて當春中には天下之動亂も治り候方と奉存候。然し不三容易事にて此上如何變亂に相成候義は難斗御座候へ共、先只今之見込にては何方も御都合至極御宜敷方に參り申候。先此段迄拜呈、餘は追て可申上候。以上。

正月十二日

横井平四郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿

お つ せ 殿

尙々時分柄御自愛可被成萬々奉存候。此許當春は雪も平地之分は消へ候て殊之外暖和にてめづらしく暮し能事に御座候。又法主初小びくに彌以盛長可仕候。日夜來客等にて不三相替多事に罷在候。一件に付て種々御心配之程萬々奉察入候。然し此非常之時分にて候へば夫を被思召、何角御愛養專一に奉存候。以上。
(横井時靖藏)

一四一 宿 許

文久三年正月二十八日 小楠在福井

一書拜呈仕候。春寒之砌被爲成御揃益御機嫌能奉恐悦候。隨て私初何も相替り不申壯健に罷在申候間御安心可被成下候。此許不三相替多用にて日夜來客にて困り入申候。君公へも一日越位に罷出申候。春嶽様去る廿三日に御發帆に相成、定て昨今は大坂に御着と奉存候。容堂様も廿五日に京師御着と承り申候。京師の御模様も大に御都合よろしく、青蓮宮様御還俗被仰出、鷹司様關白職、近衛様御願にて關白職は御免にて内覽如元被仰出、此御三方御同心にて能々關東の事情御承知被成專御配慮被成候間一橋様と萬端御相談何も大に御都合よろしく、春嶽様御上京を御待被成候事に御座候。春嶽様も今頃は太坂御着、來月朔日頃には御上京可被成、左候へば何も治り可申重々恐悦に被存候。公方様は來月末に御上洛にて此節は決て相違有御座間敷、去春以來之様々の禍亂も平治いたし可

申、其上にて諸侯御引立日本國中一致之上大に御興隆被_レ成候御都合にて是よりが又重々御大事にて御座候。京師にて (長岡藩美) 良之助様御評判大に御よろしく、(前出) 太守様も御出京にて春嶽様御上京を御待萬端御相談被_レ遊候思召に有_レ之誠に恐悦に奉_レ存候。三岡(師走)しわすより京師に罷出、大坂にて牛右衛門に出會いたし、急用にて四五日前に福井に歸り、明日又々此許發足京師に參り申候。元田杯へも寛りと咄合申候。牛右衛門に御託しの品物も慥に受取申候。金子五十兩三岡に託し上申候。何に元田か右田才助に頼みかわせにいたし候筈に御座候間御勘定所に御聞合御受取可_レ被_レ成候。私身分も春嶽様御上京之上御直談にていか様とも決し可_レ申、何に不_レ遠相分り次第大平・泰吉を歸し候心得に罷在申候。先此段迄申上度、餘は後便に譲り申候。以上。

正月廿八日

横井平四郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿
お つ せ 殿

尙々御許春寒何程に御座候哉。此許雪も消へ一旦は和暖に御座候處一兩日又々寒氣に相成申候。然し最早さしたる事は無_ニ御座_一候。

又法主・小びくに日に増盛長仕り可_レ申候。何ぞ遣し度候へ共此節は出來不_レ申、何に後便に遣し可_レ

申候。何方にも書狀仕出不_レ申候、よろしく御傳へ可_レ被_レ下候。以上。

別 啓

別啓申上候。私身分の事先便にも極密に申上候通り春嶽様初此許一統是非被_ニ召寄_一候思召にて有_レ之、且諸藩之有志よりも同様之申立之由何に御直談之上落着可_レ仕候。京師に罷在候様に相成候かも知れ不_レ申候へ共夫では心痛之次第も有_レ之、何に今暫は此許に到留、春嶽様江戸に御引取之上又々江戸に罷出候様に相成り候事かと被_レ存候。然し諸藩之有志連中よりは是非京師に引き出し候存念にて追々懸け合有_レ之候趣京師より申來候。何分御直談にてどふとも決し可_レ申、此段内密申上候事。

(横井時靖藏)

一四二 宿 許

へ

文久三年二月七日

小楠在福井

一書奉呈仕候。春暖に罷成益御機嫌よく奉_ニ恐悦_一候。隨て私相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。扱左平太(不殿設之助の弟、至誠院の甥)源次郎當月三日に此表に到着、い才御許之御様子承り大に安心仕候。右出立に付ては何角之御心配被_レ爲_レ成忝候。然しよくこそ參り候事に御座候。此許一躰相替り不_レ申、中將様蒸氣船より大坂に御着、去る四日に御上京にて御座候。越前守様去る十日に此許御發駕、御家老兩人御前後に御供、大分之大勢にて御上京に御座候。夫故御留守は御役人迄も極々すくなく罷成申候。

横井小楠遺稿

四〇五

將軍様も當月二十一日に蒸氣船より江戸御發帆に相極り申候。京師之御模様は誠に御都合御宜敷何事も首尾よく治り、重々恐悅に奉存候。然し將軍様御歸城之上は日本國中御引き起し御改正之新政被行申筈にて夫等之御相談は種々被爲在候御事に奉存候。先一件は治平に相成り申候。私身分も京師にて早速(慶應)太守様へ御懸合に相成候、何角御相談中と申來候。先便にも略内密申上候通り諸藩よりも申立此儘にて罷在候儀は出來申間敷、自然は早速京師へも罷出候様に相成候儀も難計との事情と承り申候。就ては私身分は春嶽様に御まかせ置候事にて何も存念は無御座候へ共可成事に候へば今暫は此儘に罷在り候方重々念願にて、左候へば寛りと大病後之保養も仕り度段内意申達置候。然しどふ相成可申哉非常之時節にて何ともはかられ不申、何に不遠御さし圖可有御座候。源次郎・左平太・大平・泰吉は夫迄は此許にさし置、御模様因り候て御國に歸し可申候。
先便申上候通り金子五十兩かわせてさし上申候。左平太列參候に付て(平野)九郎右衛門方殊之外心配いたされ候段、且金子もかし被申厚情之至りに御座候。右五十兩の内より御返し被成度奉存候。不足いたし候へば追々御廻し可申候。尤古京町へは書狀敬之助に頼み仕出し置申候。此節は殊の外多用にて先此段拜呈仕候。以上。

二月七日

至誠院様

横井平四郎

おつせ殿

尙々追日春暖に相成暮し能御座候。御地は最早十分の春色想像仕候。左平太共參り候てはさぞ御淋敷御暮し被成候と奉存候。此許はにぎ々敷不思議成る世の中と存申候。又法主・小びくにも殊之外盛長いたし候由、左平太留守にては又法こひしがかり可申、後便には何ぞ遣し可申候。此節も何方へも書狀仕出し得不申、可然御傳可被下候也。

(清浦奎吾藏)

一四三 宿許

文久三年三月九日

小楠在福井

一書拜呈仕候。春暖に罷成益御機嫌よく奉恐悅候。此許末々迄相替り不申御安心可被下候。然ば京師之事情殊之外六ヶ敷春嶽様思召通りに參り不申甚以氣之毒成御事に相成申候。將軍様四日に御京着、此末如何參り可申哉。何に一兩日には御模様分り候事にて實々心痛千萬に御座候。イギリスより三條の申出御取り上げ無之候へば直様大坂へ乗り込候か薩州へ仕懸候か二ツの間にて誠に無謀成る事に落入申候。い才は敬之助へ申遣候間同人より御承知可被成候。右之通りの次第にて京師より申越候筋によりては源次郎・泰吉之兩人は急に歸し候筈に御座候。どふぞよろしき様に相成申候へかすと禱申候。清右衛門熊本に參り候間金子貳拾五兩さし上申候。定て色々物入も可有御

座候。自然大亂にも相成候へば沼山津御住居は氣遣しく御座候間敬之助方に御同居被_レ成候様奉_レ存候。沼山津之屋敷は岩男にでも又左衛門にでも御あづけよろしき様御世話被_レ成候方に奉_レ存候。越前守様も一昨日御着にて様々御相談仕候。此許は上下一統一致いたし何之申分も無_レ御座誠_ニに安心に御座候。用金も貳拾萬兩程も有_レ之、萬一亂に相成候ても都合よろしく日々申談仕候。是非共亂はしづめ候覺悟にて御安心可_レ被_レ下候。様々申上度事御座候へ共殊之外取紛、此段迄呈上仕候。何も後便に可_レ申上候。以上。

三月九日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

尚々近日はよ程暖和にて暮し能、御許御同様と奉_レ存候。随分々々御自愛可_レ被_レ成候。又法主・小びくに彌以盛長仕候と被_レ存候。菓子遣し大悦と存申候。以上。

追啓

追て拜呈仕候。今日京師より飛脚着、將軍様も六日に御參内相濟候へ共御一致之處へは參り不_レ申、此先き如何と深くあんろふ仕候。(案察)イギリスの様子はいまだ分り不_レ申候へ共申出之三條共に御斷切之上一切拒絶に相成候へば、必定大坂に押懸候か薩州え仕懸け可_レ申候。何にしても戦争近々に相成候勢に有_レ

之候。唯々禱り候處は京師・關東御一致に御成り被_レ成候へば外國はどふとも御都合出来可_レ仕誠に痛心之至に御座候。

二月十日書狀今日到来何も御さし障不_レ被_レ在(辛皮山腹の皮)小兒迄無事壯健、珍重此事に奉_レ存候。藤崎御守體に受取あられ并(辛皮山腹の皮)からかわ忝候、早速調へ申候。敬之助も上京と申事馬淵方より申來、何に十五日頃迄には到着と奉_レ存申候。左候へば源次郎早速遣し可_レ申候。此後京師之模様_ニに因りては泰吉を歸し候事に相談仕置候。私事は當分は歸國とても出来不_レ申、日夜心配のみに罷在候。

此許より書狀追々仕出し、一向に着いたし不_レ申候段さぞく、何角御案勞可_レ被_レ成候。最早書狀は六七度も仕出し置申候。其内二月初金子五拾兩京都にて替せに取り組さし出申候、定て夫々相達候事と奉_レ存候。此節二十五兩清右衛門よりさし上申候間是にて當分は御さし支無_レ御座候事と奉_レ存候。萬一亂れに相成候へば敬之助方に御同居被_レ成候方重々可_レ然、早々御引出可_レ被_レ成候。自然御引出等にて金子不足仕候へば日向屋に御相談被_レ成、清右衛門ぬの代より御かり受可_レ被_レ成、其段しつかりと御申越に相成候へば此許にて竹内方には仕向け可_レ申、金子之儀は少も御遠慮有_レ御座間敷奉_レ存候。此段迄追啓仕候。以上。

三月十日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

尙々外々え書狀仕出し不申候。何方へも可然御傳へ可被下候。以上。

(横井時靖藏)

一四四 宿 許

文久三年三月二十日

小楠在福井

一書拜呈仕候。益御機嫌能奉_三恐悦_一候。此許相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。然ば京師御所置彌以外国御拒絶に相決し誠に恐入奉_レ存候。春嶽様へは御役御斷にて明廿一日に京師御發駕と只今申來り候に付、只今より源治郎・泰吉を京師に大早にて遣し私存念を小野殿_(前出)・敬之助迄申達し候。源治郎は直に御國へ歸し候筈にて泰吉は引返し候事に御座候。源治郎不_レ遠歸郷可_レ仕、委細は御承知可_レ被_レ成候。左平太・大平は今暫此許に留置申候。竹内手代も來月初には熊本に到着可_レ仕、金子もかわせとして貳拾五兩さし上申候間手代より御受取可_レ被_レ成候。此許にては一統一致いたし町・在迄も少も異議無_三御座_一、何事も能々行届き此折柄少も氣遣無_三御座_一、何も御安心可_レ被_レ下候。勇姫様_(春嶽夫人)も來る廿三日には御到着之御積にて御座候。唯々日々執政初寄合咄し合夫にひま無_三御座_一候。何にいたし非常之時節がひぶん_(推分)を盡し不_レ申ては難_レ叶事にて、誠に心配のみに御座候。

先便追々申上候通り萬一亂にも相成候事御許に聞へ候へば直様敬之助方に御同居被_レ成候方重々可_レ然

奉_レ存候。

左平太・大平は大に心も付き此節は一段上り申候。朝晩咄合大分了簡も付き大に悦び申候。先此段迄、餘は後便に可_レ申上_二候也_一。

三月廿日

横井平四郎

至 誠 院 様

お つ せ 殿

尙々時分柄御自愛專一に奉_レ存候。又法主・小びくに彌以盛長いたし大慶仕候。何方へもよろしく御傳可_レ被_レ下候也。
(小楠遺稿)

一四五 宿 許

文久三年五月二十四日

小楠在福井

太右衛門宿本_(従者)さし支にて歸郷いたし申候間一筆拜呈仕候。向暑之砌益御機嫌よく奉_三恐悦_一候。私も相替不_レ申無事に罷在候、御安心可_レ被_レ下候。

十一日之御狀先日到着拜見仕候。左平太兄弟引返之義六ヶ敷趣社中よりもい才申參り無_三餘儀_一次第にて當分留守番にて罷在候てよろしく、又よき都合も可_レ有_レ之其節出懸候て可_レ然奉_レ存候。

京師の事情嘉悦_(市之邊)列に委細申越候間此に略仕候。種々様々之世の中誠に心痛之至にて、一向によろしき勢

は相見へ不_レ申候へ共、又昨今に軍イクサに相成候事とも見へ不_レ申、何分心力を盡し候覺悟迄にて御座候。
 中將様御咎も去る十五日に御免に相成り申候。色々御相談等にて不_三相替ひま無に暮申候。段々御改革
 に相成り當君講武所茂路杯に御出之御供も御先に歩立兩人、御小姓兩人、御小姓頭も壹人外に兩三人にて、
 御枕槍一本、御茶・御辨當も無_レ之、稽古場のあり合の茶にても水にても召上りに相成申候。尤御乗切に
 て御座候。是よりは在中へも追々御出にて庄屋頭・百姓位御直に御呼出にて民間の事情御聞被_レ成候事
 に御座候。此一事にて一躰うち替り申候、先一統人心も靜にて御座候。
 七月は普光院様御三十三回、誠に何角思ひ出申候。何やらかやら品物御送被_レ下いまだ船より上り不_レ
 申、何に此許にても茶を上げ可_レ申候。

左平太兄弟歸り候ては又法主さぞく悦び可_レ申候。加賀落_レ遣し申候、大悦びと存申候。

江口（純三郎）か山田（五次郎）・宮川かどふか參り候様に申越、如何に成り行申たる哉相待居申候。

内藤（泰吉）も京師より被_三呼出、去る七日に此許出立仕候。同人への御狀は私開封拜見仕候。隣家水野へ直に見
 せ申、此許女へおつせより書狀殊之外難_レ有則返書さし出申候。此女（小楠從者）誠（名）に無事成る者にて、唯助共
 對してもあしく無_三御座候、大仕合にて御座候。太右衛門に御聞可_レ被_レ成候。藤崎御守慥に受取申候。此
 節は外に相替り候儀も無_三御座候、此段迄拜呈仕候、何も追々可_三申上候。以上。

五月廿四日

横井平四郎

至 誠 院 様
 お つ せ 殿

尙々何方へもよろしく御傳へ可_レ被_レ下候。時分柄御自愛專一に奉_レ存候。私も病後次第に全快御安
 心可_レ被_レ下候。小びくに盛長申分も無_三御座候、悦入申候。以上。

（海老名一雄藏）

右によると左平太・大平は歸國した。なほ内藤泰吉が着京後五月廿二日付にて小楠の宿許に寄せた書面がある。大した内容でもな
 いが右小楠の書狀と多少關係があるから左に掲げよう。

内藤泰吉より小楠宿許へ

清九郎を拜借仕候て家來に召連れ申候。替りの人を待候はゞ早々指下し申筈に御座候間林作罷出候はゞ左
 様御示し可_レ被_レ下候。

四月廿五日之尊翰難_レ有拜見仕候。益御安泰被_レ遊_三御座候、奉_三恭悦候。私義も無異に罷過今月十日に京着仕候。福井表
 先生先達ては少瘡御煩に御座候處速に御平癒被_レ成恐悦至極奉_レ存候。丁度左平太様方福井御出立之夕方、私京師より
 歸り着申候。最早少しも御氣遣無_レ之候。此節は御用にて此表え罷出申候處、去る十六日に御達御座候て外様御醫師御
 雇被_三仰付二條詰被_三仰付二被_三召仕難_レ有仕合に奉_レ存候。不破御兄弟様不_レ怪御世話に罷成難_レ有、同じ御屋敷詰めに
 て日々往來賑々敷事に御座候。福井之方は下女おつち事至極實跡の者にてさし寄り料理も相心得、縫針も殊之外手に
 入り、言葉少なきものにて大に都合宜敷、呉々も御安心被_レ成候様奉_レ願候。此壹人にて大に相治り大慶至極に奉_レ存

横井小楠遺稿

四一三

候。外に一人十五六のもの参り兩人にて御介抱申上居申候。

一 此節其御贈り被下、御紙中の趣一々承知仕、今日越前之様に指送り申候。左平太様方御出立如何之御様子に御座候哉、御案じ申上候。先生御紙面今日参り、則拜呈仕候。

又雄様・御(みまの事)や、様御成長恭悦至極に奉存候。久々不_レ得_レ拜顔如何御太り被_レ成候哉御懐ケ敷奉_レ存候。宜敷々々奉_レ願候。何分御警衛之御様子も追々には御都合も付き可_レ申、秋末比迄には得_レ拜顔候事に相成可_レ申と相樂み居申候。近日少し流行之眼病を帯、乍_レ略義右之段迄拜呈仕候。頓首。

五月廿二日

内藤泰吉

至誠院様

又雄様

おつせ様

尚々私香料として其御贈被_レ下難有々々拜領仕候。大平様分は越前之様に送り越し申候、御承知可_レ被_レ下候。只今京都詰めは中根頼負・千本彌三郎・堤五一郎に御座候。一日越位には出會申候。

三白 眼病のため社中え紙面届き不_レ申、岩男初壺井内には御序の砌前段御吹聴被_レ下候様奉_レ願候。矢島氏(頼助)えも宜敷奉_レ願候。
(横井時靖藏)

内藤の右文中に左平太福井出發の夕方京都より歸りついたとあるは内藤が三月廿日京都に使用してから歸福した時のことを云つたもの。(同日付の小楠の書狀参照)なほ其の後内藤は京都から呼出されて五月七日福井を出發したが、そのあとに小楠の宿許から内藤宛の手紙が着し、それを小楠が開封して讀んだ事は小楠の書簡(五月廿四日付)中にある通だ。小楠は更にそれを在京の内藤に送

届けたので、その返書として内藤は此の書狀を沼山津に送つたものであらう。

一四六 在熊社中へ

文久三年五月二十四・二十六日

小楠在福井

本書は當時の形勢・幕府の状況を説き、越前藩論の一定・主従決心の内容を小楠社中の横井久右衛門外十名に通報せるもの。

五月十一日御仕出之御狀同廿一日に到着忝々拜見仕候。先々諸君御揃愈御安康珍重之至りに奉_レ存候。然れば左平太兄弟歸郷尙又罷越の儀は一統之論説有_レ之微行六ヶ敷次第等被_レ仰越、就ては段々御心配被_レ成下、厚意之御取計一々御尤にて聊遺憾無_レ御座候。左平太兄弟昨今罷越候には及び不_レ申、爾後の都合宜敷節に参り候様に奉_レ存候。必竟は兄弟共に小拙變難より稽古等も出來兼候のみならず、御許に罷在候ては様々の悪評等唯々心痛のみならず誠に困究至極と存じ候。此許にては航海を初め天下之事情講究討論等夫々有益之事のみ有_レ之候。彼是之處より呼よせ置度存念迄に御座候。小拙不_レ鹽梅にて看病願の方も今暫は差扣候方可_レ宜哉、何れ後便に尙御取遣御談可_レ仕左様御承知可_レ被_レ下候。御許事情先々宜敷方にて珍重に奉_レ存候。唯親兵一條は誠に笑止之至りに御座候。此許より御直書持參御使者被_レ差立候事、模様にて如何にも可_レ然既に其議も起り居候て幸蒸氣船も有_レ之御國并薩州へ御家老初御役人四五輩被_レ差立ては如何と咄し合は致し居候へ共未だ決定には相成不_レ申、中根頼負先日より上京、沼田氏(勘定由)・元田(水谷)へは寛りと咄し合有_レ之聊異論も無_レ御座、兩氏も十分憤發に相成居候趣きに承り申候。

中根も近日に歸り申答にて其上にて議定可致奉存候。

一橋公攘夷拒絶御受にて御歸りの上、此義は逆も出來不申との趣にて御辭職御願に相成申候。全體初發春嶽公と御議論合ひ兼候より、春嶽公は御引入に相成、一橋公は何もかも無異議。朝命を御受にて今日に至り御辭職と申ては誠に絶言語申候。拒絶之御先手水戸へ被仰付候處水戸も御斷に相成申候。償金の一條大もつれに相成、薩州よりは手強く申立候趣に相聞へ候。

大樹公御滯京御歸城出來不申に因て、當時參府之御家門御譜代大名連合同に上京強て御歸城被相願候申談じ專有之趣にて、未だ上京には不_三相成候。

大御目附岡部駿河守一橋公御供にて歸途小田原之宿にてか鐵砲に當り候由、死生不_三相分。

勝麟太郎兵庫之港にて海軍場を起し、大樹公御巡覽之節御直命專取りかゝり申候。近日勝より門人を遣し御助力相願申候。此義は珍重に御座候。

幕府即今の事情は唯々御歸城のみの主意にて、外に何も無_レ之誠に笑止千萬に御座候。尤御歸城の上は大權をも御差上可_レ被_レ成御内議とも相聞申候。於_二天朝_一は鷹司殿關白職御斷にて、一條様に御内命有_レ之候處是又御斷、二條様御同様、不_レ得_レ止鷹司様強て御留にて有_レ之候。三條様杯も近來は暴論御了解にて、下々の公家八人程依然たる暴論主張有_レ之由、右之次第にて暴論も又漸々衰への勢に相成申候。只今と成りては、公武共に實に難_レ被_レ致容躰誠に絶言語申候。如此之光景不_レ忍見聞事候へば、此許

近日一大議論を發し夷人攝海に乗り入るを不_レ待春嶽公尙御上京一藩を擧げ御供致し、朝廷 幕府に必死に被_レ及_三言上_一度、其言上之次第は攘夷拒絶之義は既に天下に布告に相成候事に付今更争に不_レ及、此上之處は在留の夷人を京師に御呼寄 將軍様・關白殿下を初め歴々之御方御列座にて談判被_三仰付_一、彼等之主意を得斗御聞取其上にて何れ道理可_レ有_レ之、其道理に因て鎖とも開とも和とも戦とも御決議被_レ成候へば彼是共に安心之地に至り可_レ申候。此次第は先日中根鞞負上京 幕府迄御書達に相成別紙後出の通りにて有_レ之候。右之次第是非々々御取り用に相成候様相願、一藩君臣再び國に歸らざる覺悟を極め可_レ申との議相起り、既に執政兩三人は内談致し近日に大評議に懸り可_レ申、此節之義は一と通りの覺悟にて打立事にては無_レ之身を捨て家を捨て國を捨るの決定にて、第一春嶽公・當公其御覺悟に御決心無_レ之ては逆も叶はざる事にて中々以て大難事に御座候。尤も此議御決定に相成候へば隣國にては加賀是へは先頃就政本多飛騨・致野主殿介三國八郎・前五郎御使者に被_レ差遣此節の事に付萬事御一致に御相談被_レ成度、加州より重々御同意にて有_レ之、其後村田三郎・青山小三郎被_レ差遣未だ歸り不_レ申候。御國・薩州等御使者被_三差立_一被_三仰談_一、可_レ成丈は三四藩も一致の上一同に御上京の上被_三仰上_一候へば必定治平可_レ致事情に有_レ之候。乍_レ然此一舉は國・家・身をも捨て候覺悟之上にて無_レ之ては不_レ叶事に候へば、此許御兩君初執政等御決定之地如何に相成り可_レ申哉、且又中根鞞負近日京師より歸り彼表之事情等も得斗熟知の上談決如何に落着可_レ致哉、何様未だ決定之趣意にては無_レ御座候。此舉に出で不_レ申とも夷人攝海に乗り入れ候へば、先頃左平太より得_三貴意_一候通り其時は全國上洛既に決定致し居候。

大樹公攝海御巡見は大に利益有_レ之、兵庫港に海軍所御取立の儀御直に御差圖にて速に相決し、前條の通り勝氏に被_二仰付_一候。姉小路殿も其躰巡見にて勝氏より存念十分咄し合に相成り候處同公大に同意にて、御歸京之上 朝・幕より表向被_二仰付_一に相成早々取り懸り候筈に候。此一條は誠に大慶致し候。此事に付ては小拙よりも勝氏に存念申遣置候、如何成り可_レ申哉。償金之事元より 京師と御熟談と申事にては無_レ之、幕府の内議にて小笠原閣老専ら主張にて一旦英人に被_レ遣候約束に相成、其後不日に又難_レ被_レ遣事に變却致し候間、英軍怒て軍艦を以て松山の臺場を取り圍候由、砲臺には破裂を恐れ放發不_レ致大恐怖にて早速洋金を車に積み金川に遣し候故英人圍を解き去候由、右の次第にて江戸は閣老を始諸侯役人總て攘夷拒絶不同意、水戸殿御先手御出來不_レ被_レ成、二番手一橋公は御引き入實に埒もなき事に相成候。京師より責め付け被_レ成幕吏を誅伐致し候様降 勅有_レ之、江戸表閣老初め盡く引入られ御城中には竹内下野守殿唯一人之事も有_レ之候由、右之通りにて此上は 大樹公御直に御東下にて御拒絶の外は無_レ之、御暇被_二仰出_一候様被_二仰上_一に相成尾老公も御同意にて御輔翼被_レ成度との事の由、此末如何落着致し可_レ申哉、薩州にては此一條に大憤怒、其子細は曲直名義を正す時節に償金相渡になりては全く三郎(島津久光)の曲に相成るのみならず、此義は 叡慮も御決定の義なるを三郎へも御沙汰なく天下の公議にもかけられず關東切りの御評議にて御渡に相成候段不_二相濟_一と申立、頻に板倉閣老(勝部)に責め付け候由。板倉侯にては關東にての取計にて一切御承知無_レ之事と御答へ相成候由。

山田・宮川・江口諸君御打立如何に決したる哉、何分相待申候。右等の事情にて未だ決議は出來不_レ申候得共何分危急存亡之時節實に盡力致し不_レ申ては不_レ叶事にて乍_レ不_レ及晝夜心配仕候。小拙身分一日も罷歸り罪に伏候儀實に懸念致し候へ共何分其儀出來不_レ申、御許にては定て様々の悪評可_レ有_二御座_一候へ共是又致し方無_レ之、社中は勿論左平太共の心痛誠に察入氣の毒千萬に御座候。何れ當年中にはどうともこうとも落着可_レ致、心力の及ぶ迄に相働き自然命もながらへ居候へば早々罷歸り罪狀に伏し御斷申上候迄之心底に御座候。先今日迄の成り行如_レ此之次第得_二御意_一申上度、餘は後便に追々可_二申述_一候。以上。

五月廿四日

小楠拜

- 横久(横井久右衛門)君
- 嘉市(嘉悦市之進)君
- 牛島(五一郎)君
- 吉村(嘉勝太)君
- 山田(五次郎)君
- 宮川(小源太)君
- 兼坂(照四郎)君

馬淵(廣助)君
 江口(純三郎)君
 安場(一平)君
 矢島(源助)君

尚々時分柄御自愛專一に奉存候。御許御事情何分委敷被仰越可被下候。先頃の不快も最早宜く、御案じ被下間敷候。

宿本儀は申迄無之御世話重々相希申候。

古京町初知己の方へは御序に可然御傳へ可被下候。此書狀は外見一切御用捨可被下候。返すく左平太共へは何も不申越候間可然御申聞可被下候。

追啓極密

廿四日本書認置候後、京師の事情申來候内左之通り

廿四日夜四(十時)時頃姉小路(公知)殿退朝途中武士三人切懸り急所にて即死、此敵いまだ相知れず。主上には大に御逆鱗專御吟味有之候。

償金一條違亂尤甚敷、朝廷より取計候御方々誅伐可致旨被仰出候處、滯京幕庭よりは此一條は江戸にての取計にて此許にては一切御知り不被成御吟味に可相成との御答、扱近日に至り關東

にて如之違亂甚敷、御在京にては可被致方無之一刻も御いとま被仰出度早々御歸國違勅之輩御誅伐、攘夷拒絕 將軍様御自身にて可被遊旨被仰上有之候。是より尙更六ヶ敷相成。朝廷よりは京師御引取候へば攘夷拒絕・御役人誅伐共に不被爲出來旨にて、大權御差上御斷之計策と御洞察にて出も入りも成らぬ事に相成候。幕庭更に亦大困窮に相成り今更申出候儀も取り返しも出來不申より、尾の老公にたより老公御周旋にて尙又御滯京の御議に相成候へ共、如何の御決定に相成可申候哉、誠に以言語同斷絶言語申候。

朝廷にては拒絕の行れがたき事情も 主上・關白殿・中川宮にては能々御熟知被遊實に大御苦惱にて被爲在候へ共、國事掛等之暴論家 幕庭如之此の僞欺を憎み候より只今と相成候ては外國は兎も角も先差置き、公武大不和大争端と相成實以危急至極の御場合今日に差迫り申候。依之此許一昨日來君臣大評定と相成り、今一左右之模様にて因て兩君御出京執政以下大小臣大抵不殘程に御供、君臣共に必死を誓ひ爲皇國御盡力と申所に今日決定に相成候。尤此節は 天朝 幕府の御間柄御周旋坏と申事にては一切無之、本書の通り天下に大義理を御立とほし被成候御趣意にて有之候。尤此許は開國論と申候儀列藩へも相知れし事故兩君を始如何成る暴發の變難も可有之夫等少も御厭無之、全君臣必死再び歸國いたし不申との御覺悟にて誠に人心大に振ひ義勇感動は格別に御座候。既に御決定之上は不可及遲滞旨にて今日直様大番頭牧野主殿介一組出京被仰出四五日内に出立之筈、且夫々

御役人御先きに參り候面々同様被_レ命候。兩君へは今一左右御待に相成申候。明日よりは高知衆・寄合其他御番組士分以上兩君御前に被_レ召出_レ御直に御決心之御申聞有_レ之筈に候。尤此節は如何成る大變差起り候も難_レ計事にて、御家中若者相すぐり外は農兵精練を撰び三隊被_レ召連_レ精兵大抵四千餘の積り立にて御座候。

右之次第にて一藩中一人も異儀申者無_レ之何も御尤々々と競立何も必死の心底相顯心地能き事に御座候。就_レ中御家老にて本多飛驒・松平主馬・狛山城等感激盡力無_レ殘處、其外御役人にては長谷部甚平・三岡石五郎・村田巳三郎等御番頭御用人にて誰某誠に盡力感心仕候。唯々今一左右相待静り返りて罷在候。小拙も勿論上京致し、此節は 皇國之御爲存分之盡力死て止耳、萬一にも天運有_レ之生きながらへ候へば早々御國に罷歸り罪狀に伏し可_レ申候。對_レ天耻無き心底今日之盡力に可_レ有_レ之決て御案じ被_レ下間敷候。明朝僕歸郷致し殊之外多用にて誠に早々に相認申候。何も筆頭に盡され不_レ申候。先此段迄申縮候。以上。

五月廿六日

尙々本行之通り既に決定之上は更又所置も可_レ有_レ之、第一是迄相交候列藩へは申談無_レ之ては不_レ相濟_レとの評議にて、村田巳三郎・青山小三郎杯急に上京被_レ命候。其列藩と御國の御間柄は申迄も無_レ之、去年來は格別御親睦萬事御申合せ有_レ之事にて沼田大監(勘解由)・元田(八右衛門)へ被_レ談合_レ候筈、其他薩州・加

州・尾州・會津等なり。

御國暴論家親兵として罷出候事は内輪無_レ御餘義_レ事とは乍_レ申誠に笑止千萬に被_レ存候。然し是もあとの申事にて今更申に不_レ及候。良之助様御内沙汰も被_レ爲_レ在候御事にて、此節は是非々々御上京御盡力被_レ遊度此許にて御兩君も深く其思召にて御座候。是は爲_レ御心得_レ得_レ貴意_レ申候。此段迄申縮候。以上。

此書狀は格別知己之外は一切外見御斷、且此咄し流布も不_レ致様御心得置相願候。(平野)
へは極内々にて御差出し可_レ被_レ下候事。

越候より板倉殿へ上申の寫

右本文に別紙とあるは是にて、五月初御用人中根親負上京板倉閣老に達したるもの。

此度外夷御拒絶御決定にて期限も被_レ仰出_レ候儀は飽迄御廟算被_レ爲_レ立候上と奉_レ存候へば今更兎角可_レ申上_レ様も無_レ之候へ共、斯迄御危急之御時節臆察之愚案には御座候へ共心付候義不_レ申上_レ候ては不忠之次第に付一應奉_レ汚_レ清聽_レ度奉_レ存候。元來攘夷之策略は我が直を以て彼の曲を討不_レ申候半では天地間之道理上に於て條理難_レ相立_レと申候は天下確定之輿論に御座候へば、從_レ是御拒絶に付ては猶更其筋詳明曲盡に無_レ之ては被_レ對_レ世界_レ御國辱とも可_レ相成_レ候儀にて、不_レ容易_レ御義は勿論と奉_レ存候。扱又十日より御拒絶と御申渡に相成候ても、差寄直様御打拂相成候儀共不_レ奉_レ存、何れに事情を盡され御應接の上屹度御拒絶之御挨拶にも可_レ相成_レかと奉_レ存候。左候とて方今之夷情決て於_レ東海_レ卒然兵端を開き候には及び申間敷、是迄 皇國之内景も洞察罷在由に候へば御上洛中と申旁攝海へ渡來可_レ仕儀も可_レ有_レ御座_レと奉_レ存候。於_レ關東_レ已に御斷切に相成候處押て渡來之事に候へば、彼を曲として警衛之向へ被_レ命直に御打拂に可_レ相成_レ哉と奉_レ存候。尤外夷拒絶之 叡慮は即ち 皇國之御國是にて唯今と相成候ては御國內に於

て決て異議無之事に候へば全世界之道理に於ても必是に歸し可申哉、此義は地球上之全論に懸け不申ては決し兼候義にも可有御座哉と奉存候。全世界の必是に無之ては地球上の必直とも難申道理に候へば、彼是の曲直も地球上の論定に有之度義と奉存候。左候へば此度も於東海一は已に承服之上、忽ち其約を變じ攝海へ相迫り強暴之爭端を開き候次第に候。彼の曲勿論に候へば其節は不顧成敗義勇之闘戦に及候より外は無之候へ共、若又於東海承伏にも至り兼候所より攝海へ乘込み兵器を動かさずして猶又應接を希望候はゞ從是も平心を以再三再四拒絶の國是たる所以をも御應接有之、承伏相成候へば無此上一義に候へ共、自然彼も又不得止事情國是を以應接に及び是非曲直之公論互に難被決事に相成候はゞ其次第具に被及御奏聞、彼へも御談之上兼々從朝廷御倚頼被思召候諸侯は勿論天下之侯伯諸藩之有志草莽之輩に至迄偏に彼が論說する所の國是を御商議有之、彼も亦我が國是を列國へ商議之上各條理を推て猶又御應接に被及、和戦共に互に必是必直双方内外壘蓋の遺憾無之所へ御歸着相成候様仕度義と奉存候。近來改て御委任之御沙汰をも被爲仰蒙候御義とは乍申、恐ながら如從前幕府御私之御商量を以て曲直を被決勝敗共に世界の誹謗を被爲受皇國の御瓊瓊とも相成候義を徳川の御家に於て御引起し被遊候ては天朝への御不忠は不及奉申上、御先祖へ被對御孝道も如何可被爲在哉、御大切至極の御義と奉恐察候に付萬死を犯し此段奉言上候以上。

五月

(小楠遺稿・續再夢紀事)

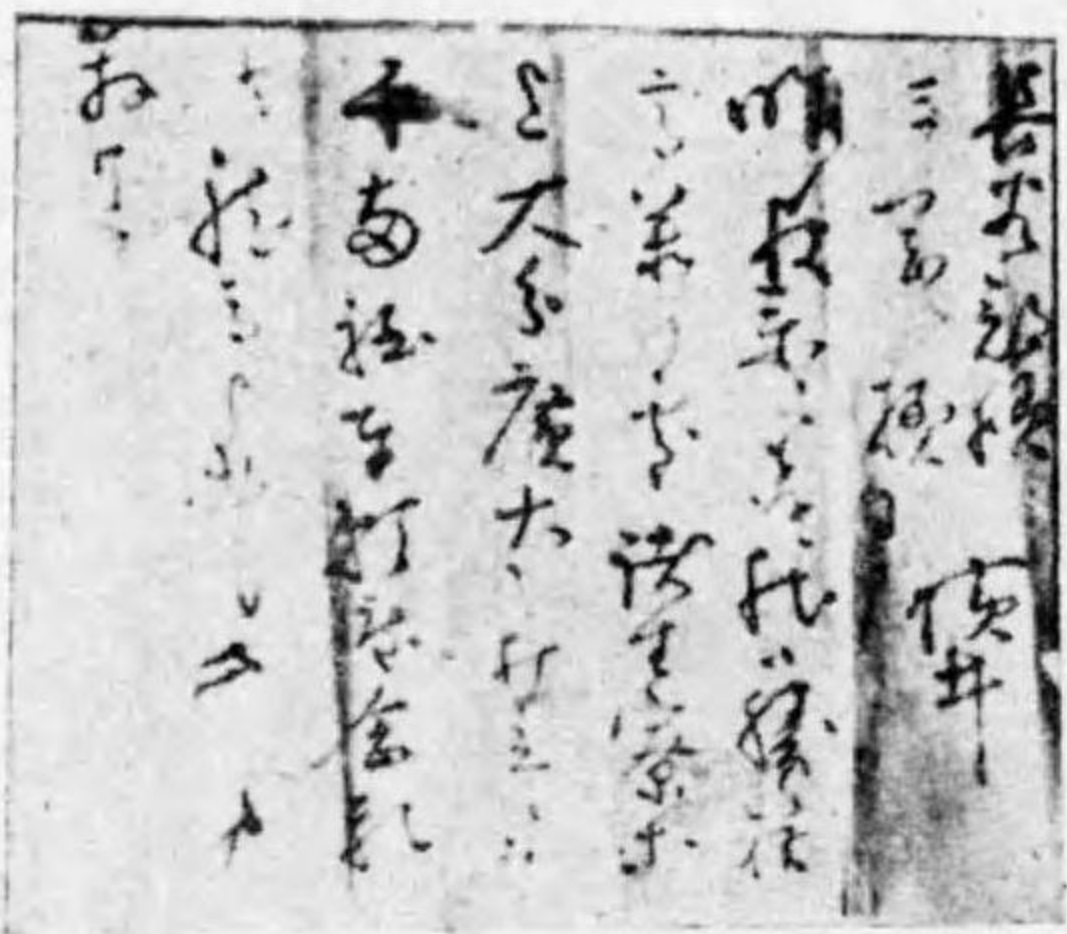
『小楠遺稿』には右書面につきて「先生最も他の指目する所たるを以て其身を全するの念無し、此書殊に周悉懇到なる所以なる乎。蓋し故郷門下の士其志趣を體せんことを希望するの意瞭然言外に見はる」と評してゐる。いかにもさうである。當時福井に於ける小楠の活躍は『横井小楠傳』第十四章、一〇に詳述してある。

一四七 長谷部甚平・三岡八郎へ

文久三年五月

小楠・長谷部・三岡
福井

三岡は越前藩士。幼名石五郎、後八郎と改め、更に舊姓由利に復して公正と稱した。越藩に於ける小楠門下中にては最も傑出した



小楠より長谷部・三岡への簡手
(藏彦英田村)

逸才で、藩政に與りては特に殖産貿易の事に卓越したる手腕を揮ひ漸次果進して奉行職となつたが、明治維新後は中央政府の財政を擔當して目醒しき勲績により子爵を賜はつたその閥歴は周知のことだ。此の書面は坂本龍馬が勝海舟の命を受けて神戸海軍所の費用補助を泰嶽に請うべく福井に來り、先づ小楠を訪うて此の補助のことを談じたので長谷部・三岡兩人に書き送つたもの。

昨夜忝奉存候。然ば勝拜借高承り候處、諸生寮等迄大分廣大之打立にて千兩程奉願度念願と龍馬申出候。此□□拜呈□□。

長谷部様
三岡様

横井

(村田英彦藏)

一四八 在熊社中へ

文久三年六月六日

小楠在福井

一書拜呈仕候。烈暑之砌各様愈御佳祥珍重に奉存候。老生無事に罷在り御安心可被下候。然ば先月末書狀拜呈いたし此許事情得貴意候通にて、彌以御兩公御上京に相決一藩人心十分激動中々盛成勢に御座候。此上は過擧有之候ては難相叶、京師之事情十分熟知之上其條理に應じ公平至當之御所置可

有之事にて一昨日牧野主殿介・青山小三郎上京、今日又村田巳三郎發程、其外執政之中も彼の表模様に應じ上京之筈に御座候。右之面々十分相はたらき見すへ候上大勢被_レ召連_二候も又者平生に一と通りの増供位にて御上京とも可_レ相成、且御出京之日限も何ぞの機會にて御出懸けと廟議相決申候。人心如_レ此激動いたし候へば議論誠に紛々と相成り昨今は大抵鎮靜いたし候。必竟執政諸有司一致いたし居候故にて有_レ之候。大樹公今日京師御發途之御模様と申參り甚以殘念之次第に御座候。左候へば此方之舉動も聊變じ可_レ申哉、何分朝夕之變態にて見すへがたき事に御座候。

此許今般之本意は外國への御所置は先便さし出候。幕庭へ御書達之通り攘夷拒絶之御主意御談判に相成、彼等申出之趣至當之分は御取り上に相成候様。幕庭萬事之御不束一々。大樹公之思召に出候儀にては無_レ之、如何に御責被_レ成候ても。大樹公にて難_レ被_レ遊御事情に候へば於_二朝廷黜陟進退被_レ遊、列侯方にて有名之御方御擧用に成度、諸有司之撰擧は必しも幕士に限り不_レ申列藩有名之士は御用。朝廷にて御惣裁被_レ成度、左候へば政出_二朝廷_一日本國中共和一致の御政事と相成り終に治平に歸し可_レ申候事。

大略右二條にて有_レ之候。其餘は枝葉不_レ足論候。總て天下之人例の暴論に恐れ是迄明白に言上不_レ仕實以心と言相違いたし、夫よりして攘夷拒絶も御尤と相成り終に如_レ此之至迫之禍亂に落入り誠に不_レ耐_二痛心_一事に御座候。先書に得_二御意_一候通り實以一藩必死之覺悟にて無_レ之ては十分之獻言は出來不_レ申の

みならず、決して申通し候事は不_二相成_一候。此節は老生一生に再び無_レ之事にて實に盡_二心肝_一申候。一兩日あとに一首出來申候。

群嶽亂山總草茸。奇觀何處立_二此節_一。愛來大丈夫心事。寄在_二芙蓉第一峰_一。

此段迄拜呈餘は大略申縮候。以上。

六月 六日

横 平 拜

同 社 諸 君

尙々此節は家書仕出し不_レ申、可_レ然御傳へ可_レ被_レ下候。不_二相替_一外聞は用捨の事。

(安場保健藏)

右書簡につきては前記「書簡」二四六參照。

一四九 村田巳三郎・青山小三郎へ

文久三年六月十四日

小 楠在福井
村田・青山在京都

青山は名は貞、越藩士。安政三年に明道館句讀師となりてより萬延元年には訓導師に進み、その翌年は春嶽の命によりて殖産取調として樺太に行き、文久元年には小楠に隨ひて肥後に來り、小楠塾に滞在して講學の傍九州諸地方を視察した。文久二年歸藩して勘定吟味役となつたが、幾回となく或は江戸或は京都などに使して重要な任務を果した。堺町の變、征長の役にも功ありて明治維新後も諸官に歴任し男爵を授けられた。

此の書簡は文久三年越藩の國論を決定するにつき議論沸騰せる際、同年六月十四日中根靱負が蠻居を命ぜられた日に書いたもの

横井小楠遺稿

であらう。當時の状況は『横井小楠傳』第十四章、一〇、ニを見ると明らかだ。

拜呈仕候。何角御心配可被成候。此許不相替と申内 君側大破に相成り突止之至に御座候。然し此亂は遂には大破におよぶことにて今更驚事にては無之、雨降りて地堅まりの方に御座候。い才は所々より申越候事にて略仕候。

右一亂にて彌以 御上京は堅まりの方と被存大慶仕候。何に近日には御書狀參り可申と相待申候。別紙御届方奉願候。此段略呈申縮候。已上。

六月十四日

小楠 拜

村田 様

青山 様

尚々牧野君(主殿介)に御一聲奉希候。已上。

(村田英彦藏)

一五〇 嘉悦市之進外二名へ

文久三年六月十五日

小楠在福井
嘉悦等在熊本

一書拜呈仕候。烈暑之砌御全家様被成御揃愈御安康珍重之至に奉存候。然ば江口列(三郎)去る九日に着京、江口は昨日此許に參り、い才御許之容躰承り、御書狀も拜見仕候。方今之砌因循依舊、誠にいたし方無き勢嘆息仕候。乍去世界如此之變動に候へば、とても其分にては行れ申間敷、其上 良之助様御明

達、何に御所分も可有御座候、何分御盡力之程相希申候。

此許之事情は先月末迄に二通之書狀さし出申候、定て御披見御承知可被下候。爾來京師并關東之御模様格別相替り不申由。

將軍様も去る十三日に大坂より御船にて御歸城と申參候。關東之事情は 將軍様御歸城之上は全く大權御さし上、關東御保守被成候 幕議と被存候。夫故横濱之様子も殊の外無事、江戸内一躰鎮靜と申參候。長州度々取り遣り誠に絶言語候。去る五日の戦に長軍敗北、六日又々戦相始まり候處にて、小倉よりの飛脚京師に到來迄相聞へ申候。定て六日も敗北と被存候。京師より援兵之 御沙汰も被仰出候へ共、諸藩とても兵を出し候事は有御座間敷被存候。全躰此節之混亂長州より相始め、如此之天下之動擾と相成り候へば、長州一國にて相請け破亡に至り候も當然に御座候。外國之事情横濱より申參候には、日本國中之内長州のみ抗敵いたし無道相はたらき候事故此國さへ責潰し候へば存意相立、餘國へは聊も手を出し不申との事に御座候。何に當月中には落着可仕候。此一亂にて攘夷拒絶大方消亡いたし候方と被存候。

此許も京師近々御役人被差越、彼表之模様に応じ御兩君御出京御盡力に一決いたし、今や〜と相待申候。長之一件は大成る仕合と奉存候。い才は前書に申達候間略仕候。小楠も勿論出方仕十分之盡力心懸け罷在候。私身分之儀奪俸之國論之段御別書、且江口よりもい才承り申候。誠に痛心之儀は申迄も無

之候へ共、夫等を免や角申候事にては無御座候。是より御知行さし上候儀可然筋に候へば其御取計被成下度奉希候。其他當然之御取計は御懸合には決して及び不申候間、御見込次第に御取計可被下候。其上にて被仰越候へば宜敷事に御座候。吳々も御遠慮等は決して被下間敷候。家内幕し方はどうともいたし候間、是又よろしく家内御相談御世話之程萬々奉希候。此段拜呈餘は後便萬縷得貴意可申候。以上。

六月十五日

横井平四郎

嘉悦市之進様

安場一平様

横井久右衛門様

尚々當夏此許殊之外烈暑難凌御座候、御許如何と奉存候。江口參り、何かとの御國咄し樂申候也。

(萩原義雄藏)

右書面につきても「横井小楠傳」第十四章、一〇、口を参照せば其の事情明らかとなる。

一五一 宿許へ

文久三年六月十七日

小楠在福井

一書拜呈仕候。烈暑之砌益御機嫌よく奉恐悦候。私も相替不申御安心可被下候。江口列去る九日に

京着、江口一人一昨夜此許に參り、御許事情い才承申候。一躰相替り不申段先々珍重に奉存候。此許之儀先便嘉悦列迄追々申遣し、御承知被成候と奉存候。

將軍様去る十三日大坂より御船にて御歸城に相成申候。是は江戸御役方一致いたし是非々々關東に御歸り其上にて大權を御さし上、關八州御保守被成候事情に相違有御座間敷候。是にて 京師 關東御手切に相成り扱々笑止千萬に奉存候。

長州より戰爭相始、五日迄の様子申參り、散々之敗北絶言語申候。とても戰爭と成り彼等に敵對出來可申様無之事は明白成る事にて夫を聊も合點いたさず無理無謀之攘夷拒絕之打立は長州専ら主張いたし、如此之動亂に相成り日本國中之大困窮をかもし求候。長州之罪國を亡し候こと當然に御座候。諸藩より援兵さし出候様 勅旨も出候へ共誰あつて應じ候もの有御座間敷候。長州より國事掛りの御方に罷出敗北之次第申達し諸藩援兵至急にさし出候様尙御催促被仰出候様、左様出來不申候へば講和之降 勅被仰出度段申出候由、只今に至り箇様之申出言語同斷論も評も無御座候。長州敗北にて京師之暴論者も大に恐懼之色を顯し候由、扱此許にては兩君御上京相決し御役人京師に被差立置、彼許之模様に応じ直様御出懸け大議論御立て暴論御取り静めに相成る覺悟にて四五日以前に御番士一手は被差立、其外御役人も一兩日中より追々出立仕候。長州今一ト敗北に至り候へば手も無く治り可申候、大に仕合に相成申候。

此節長州に仕懸け候英・佛之軍艦は横濱に居り候船にてかわるく押懸け申候事に御座候。勿論多分も無之事にて毎も二艘位にて御座候。彼等にては日本之事情能々承知いたし、長州さへうちひしぎ候へば日本國中は忽に開國に相成候儀も深く合點之上にて候へ共無名に軍を仕懸け候儀は相成不申是迄さし控へ居候様子に有之候。然處先月初長州より商賣船に鐵砲打懸け候を聞候て大に悦び其より取り懸け申候。尤いまだ本國へも知せ申いとま無之、横濱有り合の少々之軍艦にて最易く仕付け申候。まして本國より軍艦も参り候へば何も無論事に御座候。

去る十四日にイギリス軍艦一艘大坂港に乗り入石炭所望いたし候。是は長州より歸りの船にて可有御座候。大坂之模様見に参り候ものと被存候。

京師之事情は山田列(五次郎)より社中へ申越候事に被存候間略す。

私身分御國許論評等い才江口より承り、御知行さし上候事宜敷候へば其御許にてどふともこふとも可然御取斗被下候様奉存候。尤久右衛門列(權平)えも此節申越候間夫等之手數遠方御懸合には決して及び不申、跡にて御知被成候へば何もよろしく御座候事。

此段迄申上度、何に當月末迄には私も上京と覺悟いたし罷在候。何も後便に可申上候。頓首拜。

六月十七日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

大平殿

おつせ殿

尙々當夏は格別に暑甚敷近日九十六度に至り候事に御座候、御許も御同様と奉存候。又法主・小びくに不相替(本總)元氣よろしく罷在候と奉存候。唐もめん(紺屋)にて黒染にいたし清水(紺屋)こふやに申附置候、不遠出來可仕候。至誠院様・坂口御袋・おいつ・おつせ并に壽加・唯助妻に差上候心得に御座候事。

(横井時靖藏)

一五二宿許

へ

文久三年六月二十四日

小楠在福井

越藩より藩論決定につき肥後・薩摩兩藩に使者を派遣せし時のもの。(前記書簡一四六參照)

一書拜呈仕候。烈暑之砌被爲成御揃益御機嫌能奉恐悦候。然ば此度御家老岡部豊後・御側御用人酒井十之允・御奉行三岡八郎御使者として蒸氣船より熊本・薩州に御遣し、此許出立敦賀港より出帆、行程考候へば七夕比にも御許に到着と奉存候。御使者之次第は三岡より同社中え咄合可申、略いたし候。到着相知れ候へば左平太兄弟早速三人旅館に見舞に參候様に存候。たばこかそふめんの様之品遣候方可然候。此節は極々急ぎにて御用相濟候へば直に薩州の様に參候間何に到留も四五日と存候間沼山

津に參候事は出來申問敷、至誠院様・おつせ共に坂口迄御出酒井・三岡に御逢ひ、此許の事も御聞被_レ成候方がよろしく可有_二御座_一と奉_レ存候。

唐もめん黒染紋附さし上申候。唯助誠にたまかに相勤候間おみかにも遣し申候。此許御兩君御上京も何に御使者歸りの上にも相成可_レ申哉、又は京師之様子により候ては只今にも知れ不_レ申、勿論私も上京仕候間日に夜に何角之御用にて誠に心配仕候。純三郎列も去る九日に京師に着、純三郎一人此許に參り、四五日到留にて又々京師に參り申候。純三郎より承り候へば隣家水野家内にじよふ布にても御遣し可_レ被_レ成との由此許にて反物等遣申候間夫には及び不_レ申候。私身分之事も兩君公思召有_レ之此節御相談に相成筈に御座候。

純三郎咄にて御暮し方當年中は御さし支無_二御座_一段、自然不足も仕候へば三岡に御相談被_レ成可_レ然奉_レ存候。

此許御上京も御使者歸國之上にても可有_二御座_一候哉、まだ機會參り不_レ申候。然しいつ何時も御出懸之御積にて一統も其覺悟に罷在申候。先此段迄拜呈、何も三岡より御承知可_レ被_レ下候。以上。

六月二十四日

横井平四郎

至誠院様
左平太殿

大平殿
おつせ殿

尙々此許殊之外之著にて困り入申候。然し申分も無_二御座_一、御安心可_レ被_レ下候。又法主・小びくに壯健珍重に存候。ねりよふかん遣し候間悦び給_レ可_レ申候。三岡到着之上は前にも申上候通り至誠院様・おつせ坂口迄御出御逢ひ被_レ成候様三岡にも申やり咄し置申候。随分々々御自愛專一に奉_レ存候事。

(横井時靖藏)

右文中坂口は不破敬之助の家之事、小楠の宿許の人達がこゝにて面會すべく酒井・三岡に打合はせてあつたものと見ゆ。

一五三 嘉悦市之進・安場一平へ

文久三年七月四日

小楠在福井
嘉悦・安場在熊本

一書拜呈仕候。烈暑之砌愈御安康に被_レ成御勤、珍重之至に奉_レ存候。然ば今般此許より御使者として岡部豊後・酒井十之允・三岡八郎御國許に被_レ差越、明日此許出立敦賀より蒸氣船にて出帆、何に御國許えは十五日前後に到着と被_レ存申候。い才之儀は三岡より御承知可_レ被_レ下、略仕候。

先月初比より追々書状さし出申候、定て夫々到着仕候と奉_レ存候。何も事情様々うち替り、誠に風雲變態にて御座候。右書状は彌以他にもれ不_レ申様御心得可_レ被_レ下候。其外三岡咄し合之筋も同社中よりは決て口外無_二御座_一様奉_レ存候。

山田・宮川・江口一昨夕参り何も元氣宜敷、御安心可被下候。朝夕何角之咄し合樂申候。今暫は此許に到留、追て北國筋へ出懸候筈に御座候。不相替一段迄拜呈仕度、い才は三岡より御承知可被下候。頓首。

七月四日

小楠拜

嘉悦君

安場君

尙々同社中によろしく御傳可被下候。以上。

(安場保健藏)

右書狀の使節派遣のことは『横井小楠傳』第十四章一〇、ハに詳記してある。

一五四 岡部豊後へ

文久三年八月十一日

小楠在福井
岡部在九州

岡部は越藩家老。武道を嗜み頗る硬骨の人。能く藩主を輔けて政務の樞機に參與した。越藩進歩派の錚々たる一人にて小楠の最有
力なる支持者であつた。本書は文久三年藩論俄に一變し小楠越藩を見限りて福井を出發せんとする日に認めたもの。

一書拜呈仕候。秋冷之砌愈御安康に被成御勤務、珍重の至に奉存候。就は御國許大變動に就ては私
事も御暇奉希、今日出立仕候。海路とても御逢申事は出来不申候故心事聊拜呈仕候。天下之變動不遠
事にて、其節に臨み候へば人材御用ひ無之ては難叶は申に不及候。老公様にも初發より其思召は

被爲在候事にて私も御直に奉仕候。即今の勢御國政向は如何にうち替り候とも天下に對し候へば誠
に少々の事柄に候へば、何もかも御かんにん被成従容と御勤、聊たり共不平等の御事無御座様萬々
奉希候。左候へば其變に臨み急斗御手段御盡力之被成様可有御座は相違無御座、此外拜呈申儀は
無之候。吳々も従容の二字御心得被成候様奉存候。此段御別に拜呈、餘は何も大略仕候。以上。

八月十一日

小楠拜

岡部大夫

机下

横井時雄より岡部廣へ

本書は前文に關係がある。時雄は小楠の、廣は豊後の嗣子。

拜啓仕候。残暑難凌候處益御清榮被成御起居、奉大賀候。過日は先大人御祭辭並に維新前御往復の書翰御示被
下、御勤績を追想し轉々感嘆に不堪奉存候。就中小楠より贈呈の一書は憶ふに文久三年將軍上洛中に係り、當時大
樹公攘夷の勅命を奉じたるも之を實行するの途なく、一橋公後見職を辭し春嶽公亦總裁職を辭し國に就かれ、内公武
の確執あり外列國の威迫あり國勢の窮縮實に其極に達せり。

茲に於て越前の藩議老公及當公を奉じ舉藩上京、天下公論に訴へて攘夷の問題を解決し、又國政の統一を圖らん爲に
大權を朝廷に收め、天下の人材を登用し共和一致の基を立つべしと云ふに一決し、加賀・肥後・薩摩等の友藩に特使を
派し協力を求めたり。由利子爵の祭辭申君が先考豊後氏春嶽公の内旨を受け肥後・薩摩の兩藩に使し國事を圖りし事

あり、是實に維新鴻業を爲し、ものと云へるは即ち此時の事情を指すものなり。不幸にして藩議一變し大事將に成らんとして敗れしも、若し然らずして其大事果して決行せられしならんには、維新の鴻業は蓋し實際よりも五箇年の以前に成りしならん。乃ち志士の憤慨想見すべきに非ずや。小楠の書中事の敗れたるを憤らず從容時機を待つべしと云ふもの蓋學意の存する所にして、亦當時の光景殆んど眼之を見るが如し。然れども當時越藩の提案は即ち後年維新皇謨の骨子なり。後世の史家必ず因縁の在る所を明にするの日あるべし。往事を追懷し感慨湧くが如く、試に其一節を記して座右に呈す。僭越の罪御海容千萬祈處に御座候。不宣。

明治三十九年九月二日

横井時雄

岡部廣様

(以上二通肥後藩國事史料)

一五五 勝海舟へ

文久三年十一月三日

小楠在熊本
勝在兵庫

一書奉呈仕候。愈御安泰に被_レ成_二御起居_一、奉_二拜賀_一候。先以即今事情追々申來り、順路之御運かと大慶仕候。兼て御高論之通り今日之第一議_一海軍之一途に有_レ之、開鎖之論抔徒に閑是非を争のみにて何も被_二差置_一、此一途に御運被_レ成候へば自然に人心開明は相違無_二御座_一候。乍_レ去 廟論悉くは此に一定仕間敷深懸念仕候。越老公も御上洛とは承り申候。黜斥之諸有志再用之處恐くは出來申間敷、二三之人物を差置其他は凡輩のみにて誠に絶_二言語_一候。御知己之藩にて何分御心配被_二成下_一度奉_レ希候。

同藩末松覺兵衛・大谷徳太郎此節歸國仕候。兼て御景慕仕候間乍_二御面働_一、御一面被_二成下_一度奉_レ希候。徳

太郎事は是迄航海に志し彼藩蒸氣船引受乗り廻し罷在候。歸國之上都合に寄り御塾に罷出脩行仕度念願に御座候、吳々可_レ然御申聞奉_レ願候。

六久保公御再用とも承り、如何之次第にて御座候哉。幕庭不_二相替_一、依舊之御模様かと奉_レ存候。此公御舉用必ず樞要之地にては有_二御座_一間敷慨嘆仕候。此段迄拜呈、餘は追々可_二申上_一候。頓首拜。

十一月三日

横井平四郎

勝 麟 太郎様

尙々坂本_(龍馬)・近藤_(副次郎)二子御塾に罷在候へば、よろしく御傳へ奉_レ願候。先頃は同社之者など罷出、御懇意被_二成下_一候段申遣候。其外追々出京仕候間可_レ然御申聞吳々奉_レ希候也。

(小楠遺稿)

『小楠遺稿』には「此書は慶應二年なるべし越前藩士末松・大谷兩人肥後より歸路勝氏に面謁せんとす。依て紹介の書なり」とあるが、慶應二年の十一月頃には勝は閑散の身となつて江戸に在つた時であるし、文中「御塾」の文字は勝が文久三年神戸に出來た海軍所を監督すると共に塾を設けてゐたそれを云ふらしく、又末松覺兵衛は文久三年八月下旬小楠と同行來熊して此の頃はまだ滯熊してゐたと想像されるし、なほ春嶽も文久三年十月上京してゐるから寧ろ此の書面は文久三年に書いたものと思はれる。左に記するは此の書狀に對しての海舟の元治元年正月二十五日付の返簡であるが、その中に將軍再入洛の事があるのは同年正月の入洛を云つたもので、又「昨冬上京之節春嶽公へも拜謁」とあるのを見ても猶更さうらしい。

勝海舟より

横井小楠遺稿

其後は意外之御無音申上候。益御勇祥被成御座、重々此事に御座候。扱昨々已來兩度尊翰被成下候處一も不レ及貴答、怠慢之至御海容相仰候。昨年已來種々變遷當春再 御上洛相成此度は海路御供にて相下候。先々無御滯御着船當節は 御上京、小拙義は神戸之罷下居候、京間之御模様如何哉。當表操練局も出來いたし候へ共未だ兎角故障勝果々敷參不レ申、拙家も出來塾生は追々集申候。昨冬上京之節春嶽公へも拜調少々申試候へ共彼御家も兎角議論一定に無レ之、先生是迄之御骨折も半途に相成遺憾不レ少、中々小拙之力にては改復も無覺束哉と相考候。此度は何卒御國是相立候様偏に相祈候。(大久保忠實) 江戸も不レ相替、空談勝にて番町も未だ其儘に相成居候。少々周旋建言もいたし候へ共却て害生も難レ斗、先其儘いたし置候。(兩人共小楠門人) 余田・兼坂生折々來訪其他も追々被見候。僕儀も昨冬已來空奔無レ限多忙にて、大坂へも最早六度斗往返終に一事も不レ成、當今御一定相成候共恐らくは萬事御弛寬に流れ安心生可レ申哉如何哉。未だ議も興不レ申候由、長・薩之間種々雜説も起居候由是等格別六ヶ敷事共存不レ申候へ共世間雷同家紛々之説而已と被察候。海軍も此再 御上洛侯伯京間之入費にて大方倒れ可レ申、中々正大之世話は難レ及哉と被相考候。世は追々行詰形勢隱伏不レ顯候へ共甚六ヶ敷哉と存候。其内又々可レ申上御無音之御詫旁如レ斯御座候。頓首。

勝海舟より小楠 德富蘇峰藏

正月廿五日認

麟太郎

小楠先生

(德富蘇峰藏)

元治元年

一五六 勝海舟へ

元治元年四月四日

小楠在熊本 勝在兵庫

簡書

一書奉呈仕候。益御安泰に被爲成御勤、恐悦に奉祝候。先以熊本御通行之砌(龍馬)は坂本生御遣し懇々被仰聞、其上金子拜戴御厚情不淺奉拜謝候。然ば坂本生迄奉願置候養子横井左平太、養弟同大平并同藩岩男内藏允航海爲修行差出し、誠に犬豚兒之者共御難題に罷成候義は彌奉恐入候得共御門下に被仰付、御家來に被召仕被下度萬々奉願候、い才は同人共より可申上候。河瀬典次罷出、拙著さし出候事と奉存候。兼て御高話承り居候上平生之志願にて有レ之、閑散に任せ認候事に御座候。只今に成り候ては天下之人情海軍にも異議は無レ之、自然之勢に候へ共唯々 廟堂一決萬牛回首とも可レ申哉。近々京師之傳報承り誠に因循之極に落入甚遺憾に奉存候。必竟は又天下列藩疲弊之極

に至り候へば海軍之事も總て費用を厭ひ候人情是又致し方も無之勢に御座候へば、此費用を辨するの術尤以大切と奉存、拙著には三件之事を申立候へ共御取り起に相成候得ば必しも三件に限り候事には有御座問敷、外に肝要之事も一二ならざる儀と奉存候。此段之經綸は本邦はいまだ開闢之昔にて御座候へばいか計之事業を起し候儀も難計、方今之疲弊を變却仕大富國と相成候事は決て疑惑無御座候。乍然是等之着眼は口に發しがたき時勢に御座候へば先船を造る用意迄三件を出候事に御座候。何分可然御用捨奉希候。

今般之御下向御配意之事と奉存候。乍然外國人は眼孔遠大にて御心遣も被爲在間敷、唯々内地人情近小其勢因循に落入らざる事を不得慨嘆之至に御座候。各豚兒之事御頼申上度、餘は大略仕候。頓首拜。

四月四日認

横井平四郎

勝麟太郎様

(小楠遺稿)

勝は下關戦争の爲に長崎に来れる英・佛・蘭の聯合艦隊との接衝を命ぜられて元治元年二月下旬坂本龍馬を隨へて長崎に来り、各艦將に説きて馬關攻撃を中止せしめたので、長崎を發して三月(海舟日記には四月とある)六日熊本に来り、特に坂本をして小楠の沼山津の寓を叩かして金員を贈與した。これは小楠が實罰を蒙り家祿を沒收されて生計に困窮してゐるのに同情してゐる。此の時小楠は勝の厚意に感激すると共に二甥左平太・大平及び岩男内藏允の三生を勝の塾に入れて貰ふやう坂本に肝煎を頼んだのである。『河瀬典次罷出拙著さし出候事と奉存候』は小楠が勝の右長崎滞在間に門生河瀬をして「海軍問答書」を寄贈せしめたその事である。

一五七 嘉悦外三名へ

元治元年四月十二日

小楠在熊本
嘉悦等在京師

去月廿三日・廿四日の御狀追々相達し、忝々拜見仕候。愈御安康に被成御勤、珍重に奉存候。御許事情夫々拜承、誠に致し方無き勢と相成申候。乍然當今 京師 關東之御模様にてはとて天下を御起し被成候御思召無之候へば此處に落着致候事當然之結局かと被存候。其上列藩も同様之事に候。且外國之事情も横濱鎖港も大方無異議受け可申候。長州も今日と成りては一通りは受け可申候。左候へば依舊之 幕庭之御政事に歸り、又々暫は太平と相成候事と奉存候。

薩も一旦歸國重々可然、決て滯京はよろしく無御座候。海軍之事はとても行れ候事にて無之問答書は無用に歸し申候。兵庫も諸生修行位にてよろしく被存候。拙家生活之事不一方御心配忝々奉存候。嘉悦君に話し候事も其御許御模様には被應、どふともこふとも宜しき様に御取り固め被下候様奉頼候。必しも刀・鞍等返し候方可然とも存じ不申候、何分能き様に御取斗可被下候。

左平太兄弟並岩男、勝先生に託し遣申候。定て上京何かと御咄し可申候。何分よろしく御頼申候。兩公子御書達拜見仕候、誠に感心仕候、中々御見識格別と奉存候。此段迄拜呈、餘は略仕候。以上。

四月十二日

小楠拜

四四四

嘉悦(市之邊)
山田(五次郎)
宮川(小源太)君
江口(純三郎)

(編者藏)

一五八 甥左平太・大平へ

元治元年七月二十八日

小楠在熊本
二甥在神戸

岩男兄弟に托して勝塾に在る二甥に書き送つたもの。

明日岩男兄弟出立に付一書申遣候。彌相替無之無事珍重に存候。此許も同様聊不相替候間安心可被致候。扱長州世子(市廣)も登りに相成候由誠に絶言語候。京師も諸藩人數も莫大之由、何に睨合に相成り于今戦争には至り不申事かと被察候。外國軍艦去二十三日横濱出帆長に押懸けの段長崎より急報有之、昨今日迄には下關かに到着、是は直様戦争に相成候事と存候。薩州は勿論此許よりも一番手既に被差立候へば肥薩之人數も大分にて、京師方左程弱くも有之間敷、當分之處持ちこたへ候へば不遠大隅公(津久光)も御上洛と被存、且亦澄良兩公子(義久・護美)殊之外御憤發是非御上洛之筈にて御家老中え十分に御押懸に相成昨今廟議最中に有之候。御家老中も大に發揮別て監物殿兄弟大はまり甚大慶いたし候。何に

近日に大議相決し可申、い才は山田(五次郎)より可被致承知候。此外相替不申尙後便に可申遣候。以上。

七月二十八日

小楠

兄弟當

尙々勝先生定て心配之事と被存候。此許社中一統相替り不申候。夏中一切雨降り不申、誠大旱にて人も物も堪へ兼申候。近日聊秋涼相催し悦申候。何も大略申縮候。以上。

(横井時靖藏)

右書状を見てから左平太は元治元年八月二十六日付にて興味ある内容の滿載たる左記書状を小楠に寄せた。

左平太より

一書奉拜呈候。朝夕秋冷相催候處被遊御揃益御機嫌能被遊御起居、重疊恐悦之御儀に奉存候。次に私共何相替り不申無異に脩行仕候間、乍憚御安心奉願候。然ば岩男兄弟當十一日浪華着、丁度私も十一日に大坂に罷越候間委細御様子も承御状も直に奉拜見候。段々思召之儀仰被下難有奉存候。先以京師も漸戦争に相成、一旦は餘程此元杯も動搖仕候。御國表も一旦は大分起立申候由、近日は如何成行候と奉存候。段々御國元にも俗論起り色々六ヶ敷事に罷成候由、實に残念千萬に奉存候。段々此表様子も馬淵罷下り候付十九日前後様子は大躰御聞被遊候と奉存候。十九日夜より先生も觀光丸より浪華の様に被參候間塾中何申談二十人斗供仕候て浪華罷越、此節一戦仕候と奉存候得共大坂無事にて實に残念千萬に奉存候。京師様子は内藤(榮吉)より申上候と奉存候。此節は長州誠に手弱引取大に

敗走之様子に御座候、残念。京師にて長之殘兵手負候者杯先月二十一日・二日兩日に山崎よりぬけ候由にて、神戸を丁度千二百人程通り直に兵庫より船にて下り申候。段々諸藩固めも御座候得共何畏れ候て通し候由。益田右衛門殿杯も二十一日に通行仕候。何飯に饑候て罷通り候由にて聊人數有し之候得ば速に打取可申、大に残念にて御座候。扱其後は京師何相替り不申、此表には一向に事情も分不申候間十一日より私壹人出京仕候。坂本良馬も頃日より薩之屋敷に罷越大に周旋仕候間私も良馬に參、京地事情承候處其時分は大分都合宜敷運も付可申奉存候間、私も兩三日滯京仕候筈に奉存候處、丁度先生姫嶋談判被仰付に相成候由承申候間直に浪華之様に罷下り申候。先生も十三日早朝より出懸に相成候得共最早異人は長州參戰爭相始め後にて御座候間直に引歸に相成申候。談判之儀も行不申誠に残念千萬に奉存候。先日京師にて内藤と申談、大體其時分成行申上候積に御座候處私は右之通り速に罷下り申候間定て内藤より申上候と奉存候。頃日後之事情一切分不申候處一昨日龍馬罷歸候間大體承候處、中々京地は六ヶ敷事に罷成候由にて例の因循に落入候間最早致方も無御座候。天下之事も是切と申候。征長之儀も來月十日期限之由に御座候得共未だ被命候國々も何支度も不仕、大に因循仕候由に御座候。薩も一國にては力に及不申候と申候由、京も上之都合宜敷御座候得共一橋公不怪因循にて何事も行不申候由に御座候。

一 幕府も一旦は大分動き又々御上洛にも相決候處近日は又大に因循仕、中々御上洛も速に有候儀無御座候由、先達大久保越中守殿(忠實)も御勤御奉行に相被成候由、大久保殿より御上洛議論大に御座候由にて一旦は其方に相成、將軍家も不怪御同意にて速に御上洛之思召にて御座候處、段々俗論起り候由にて大久保殿も三日登城に相成直に御役御免被成候由、幕の方は絶言語候様子に御座候。

一 下關如何相成候や、一向に相分不申候。大體戰爭之様子は分候得共其後事情一切分不申大に案勞仕候。長州も此節西洋に打せ候ては誠に致方も無御座候、残念至極に奉存候。京師にも有名大名も出京無御座候。春嶽公も京師より御召も參、會、薩より御使者も參り候得共一向出方無御座候。青山・平瀬杯は實に必死之盡力仕候得共中々行不申、切齒痛歎仕候。

一 良之助様御様子如何被爲在候や。愈以十八日御元御出立之由承、誠に恐悅至極に奉存候。此節は良之助様も必死之御盡力有之度奉祈候。左候へば少は動き可申奉存候。京師にて此節御國之御様子は委敷御聞被遊候と奉存候、誠に絶言語候次第に御座候。實に藤本御奉行因循之説を大唱、不整之基を爲肥後國の耻辱を醸し實に不埒千萬に奉存候。

一 此表海軍之儀此節は十分之機會に奉存候處中々只今之形勢にては行申間敷奉存候。段々江戸表之内情杯承候處にて兵庫に海軍之起り候儀は公邊よりは大きら申候様子に御座候。此元に勝先生諸生を集候て天下之儀を二つに爲とか申候様子に御座候。私共も近日は藝一途に打懸り脩行仕候。塾中も相替り不因循仕候。近日は塾中にも色々心配之事起り實に困り申候。諸生も三十人斗は集申候。越前より十人斗參候得共何有し心人も一切無御座候。日々兵庫遊女屋杯(二字不明)に申候位にて、追々先生より申付も聞不申候間先生大に送鱗(逆力)にて塾も止め候と被申、越前姓は何春嶽公に紙面付けに相成申位にて實に心配仕候。併漸く斷濟申候間安心仕候。其後は塾中門限杯も夜五ツ時(八時)に相極申候。其儀用不申候得ば忽退塾申付候と相決申候間兩三日は大に治珍重に御座候。遊女屋杯に參不申候者は私共三人位にて御座候。段々此節御國元より航海連參り候得共格別有志者も無御座候間此者共にも大に申談置申候。御國元蒸氣船如何成行候哉と奉存候。此間平野九郎右衛門殿下り節丁度私大坂に滯留仕候間一寸の面會仕候處、此節は是非御買上に相成候様心配仕候と被申候間此節は定一艘位は御買上に相成候と奉存候。此節は段々御申上度儀

も御座候得共御飛脚に差懸り相認め申候間餘後便に申上候。謹言。

八月二十六日

御伯父様

横井左平太

尙々御元は何程に御座候哉、此元は朝夕大分暮能罷成申候。當夏は不_レ怪暑にて御座候。此元は丁度八十日ぶりに雨降申候。近日は日々雨勝にて誠に困申候。乍_レ憚_レ下折角御自愛御專一に奉_レ祈候。大平も病後にて五月末頃は少々不_レ鹽梅に御座候間内藤に参り相見候處暫薬用仕候間、暑中は何申分無_レ御座、壯健に罷成、最早とんと本に復し申候間御安心奉_レ願候。近日は大平觀光丸(神戸操練局備付)に乗組被_レ仰候。一日越に塾に上り申候。段々先生心配にて御座候。

- 一 良馬より宜敷申上候様相頼申候。此も又近日より出京仕、薩之方に参り候筈御座候。
- 一 先生えの御紙面は慥にさし上げ候、何も右迄申上候。以上。

(横井時靖藏)

一五九 勝海舟へ

元治元年八月六日

小楠在熊本
勝在兵庫

一書奉呈仕候。残暑之砌愈増御安泰被_レ成_二御座、奉_二恐賀_一候。扱京師變動一旦相治り、此末如何と想像仕候。長は存之外手弱く、眞に兒戯とも可_レ申一笑仕候。御許航海此節好機會かと奉_レ存、定て御乗出しの御趣向可_レ被_レ在候。薩大隅公(島津久光)も不_レ遠上京、且良之助(長岡護美)も近日此地出發罷上り申候。薩・肥此節は一致可_レ仕、大に都合宜敷御座候。此二藩主と成り御許航海之御助力も申上候様に御座候へば、列藩も隨て参り候様

に可_二相成、薩人高崎猪太郎先日大早にて罷上り候節、拙宅に立寄申候間い才話合置申候。將又拙藩長谷川仁右衛門と申者此節良之助供頭にて罷上申候。此者拙藩にての人才にて小拙格別懇信に候間、是又い才申談置候、乍_レ憚_レ左様御聞置可_レ被_レ下候。事情朝暮の變態にて今日之好きが明日は惡敷相成候間行先何とも斗られ不_レ申候へ共、先今日に付先條之次第申上置候。

薩は決して疑惑は無_レ之、是は小拙分明に見取り申候間、乍_レ憚_レ左様御聞置可_レ被_レ下候。此事に對ては様々之次第も御座候得共筆にて盡しかたし。

此段迄拜呈申上候。餘は大略仕候。頓首拜。

八月六日

安房守様

横井平四郎

尙々残暑甚敷、御厭可_レ被_レ成候。豚兒共不_二相替_一下劣にて罷在可_レ申、萬々奉_レ願候。以上。

(勝海舟著「亡友帖」)

一六〇 甥左平太・大平へ

元治元年十一月七日

小楠在熊本
二甥在神戸

一書申遣候。彌無事に被_二相暮、珍重に存候。此許も何のさし障も無_レ之安心可_レ被_レ致候。然ば長州征伐も彌相決、何よりの大慶に候。明日より二番手將監(有吉)殿出立、引續て良之助様御發駕、夫より太守様(慶四)も御押出之筈にて何かと賑々敷事に候。薩も今日一番手熊本通行に候。扱其許之様子とんと分り不_レ申如何

やと案申候。委細申越され候様相待申候。いまだ江口・馬淵(純三郎・健助カ)よりの書状も参り不_レ申、是又如何と案申候。金子年内中に三十兩遣し可_レ申、左様承知可_レ被_レ致候。何分出精相祈申候。極々さし急ぎ無事之段迄申遣候。餘は後便に可_レ申述_レ候。以上。

十一月七日

小 楠

兄弟 當

尙々勝先生え書状さし出不_レ申、よろしく、且龍馬・昶次郎(坂本)へも同様之事。

(竹崎八十雄藏)

一六一 勝海舟 へ

元治元年十一月十日

小楠在熊本
勝在江戸

一書奉呈仕候。初寒砌益御安泰に被_レ爲_レ成_レ御座、奉_レ恐悦_レ候。然ば山田五次郎歸國御許之御事情具に承知仕候。幕庭御威光御舊復に付ては御許風波増長、御痛心之程想像仕候。今更驚く可からざる事とは乍_レ申、餘り成る御趣向實以 皇國治亂之分界今日に迫り候にて、有志の國々は十分之盡力いたし、此門關は破り不_レ申候ては難_レ叶、征長落着之上は諸藩有志之御方は直に御上洛心力之限御盡し被_レ成度、乍_レ不_レ及内輪専心配仕候。薩・肥・越之三藩さしはまり候へば其餘之諸藩も響應可_レ仕、何分此三藩一致之處第一にて、天下公共之國是相立て申度奉_レ存候。先達て番町(大久保一翁)より御書状参りい才御申越に相成 大樹公

益御聰明に被_レ爲_レ在候故群小相憚り、何事も達_レ御聽_レ不_レ申閉塞甚敷由實に落涙仕候。此勢にてはとても關東にて御開明は六ヶ敷、御上洛被_レ遊候へば第一 天朝より明白之御議論被_レ 仰出、諸藩よりも十分之献白に相成り候へば是非達_レ 御聽_レ可_レ申、其上にては是非黑白必ず御了解被_レ遊、御明斷に出ざる事不_レ能勢とも變じ可_レ申哉、懸_レ神明_レ奉_レ祈候。

方今之勢戰爭程大適藥は無_レ御座、薩・會・越等趣向は相違り候得共因循之氣習は漸々變却に向い珍重仕候。弊藩因循尤甚敷御座候處、昨今出陣に向ひ候ては何やらん本氣に相成り申候。此上一戦いたし候へば勝敗共に功能可_レ有_レ御座_レ候。逆徒相こたへ暫にても籠城いたし候へば大馳走と奉_レ存候。宇和島老侯(宗城)明君に相違無_レ御座_レ候。家中一致政事筋も行届申候。實封十八萬石位にて産物輸出之高米穀を除き四十萬兩内外に至り餘程富貴之由にて、征長にもさし支へ無_レ御座、精兵四千餘出し申候。近日薩士五代才助御招請に相成申候。私へも追々御近習被_レ差越_レ下問有_レ之、乍_レ小藩_レ頼み御座候間達_レ御聽_レ置申候。此段迄拜呈、餘は追々可_レ申上_レ候。以上。

十一月十日

小楠 横 存 拜

安房 守 様

尙々時分柄御自愛可_レ被_レ成候。甥共如何罷在候哉、不_レ相替_レ怠惰に打過可_レ申候。御嚴叱萬々奉_レ希候。

神戸の操練所にあつた勝海舟は元治元年十一月二日を以て突然早々江戸に歸るべく命ぜられ軍艦奉行をも免ぜられたので、此の書面は多分江戸で受取つたであらう。此の書面に對してらしく一或は此の後かもわからぬが一勝は慶應元年正月二十日付にて左の書面を小楠に寄せた。

勝海舟より

被_レ仰下_一候宇和島侯其老侯春山公は小拙も懇意家に御座候。諸侯中之人物と存候、先年大坂にて一會談して見申候。

新禧芽出度奉_レ賀候。扱舊臘御差立之御手翰正月五日入手、縷々被_レ仰下_一候事共至極御尤千萬と奉_レ存候。小拙儀も舊年放官漸歩行願も相濟候仕合更に一言も無_レ之、土・越も折々來訪候へ共別段議論も無_レ之、唯々消閑の工夫より他は無_レ御座_一候。都下至極之無事皆々復舊之事に取掛られ、また別に手段も無_レ御座_一模様驚入候形勢而已。少々議論ある輩も不_レ被_レ行半信半疑而已、不_レ遠又々一變相生可_レ申と存候へ共各々一_{（不明）}遁に暮行候と推察被_レ致候。長州之御所置も散々之事之由、各其筋え加り候者も甚不首尾之様子と被_レ察候。小拙從_レ初此事には論も有_レ之、乍不_レ及建言致候處終に不_レ被_レ用、其終に到りては拙策を被_レ遊候事共痛憤に堪不_レ申候。神戸も先其儘建居候由、是は御取崩に相成可_レ申哉更に定評不_レ承候。當時は先御取止之方可_レ然哉、之も果敢敷事は有_レ御座_一間敷、とにもかくにも不_レ出_二數年_一御取建に成可_レ申と安心_{（一カ）}□笑いたし候事に御座候。

舊歲松前豆州上京さるべく候處歸東直にも引籠候。是は穩密に云々も有_レ之候由。當節は唯々眼前之穩に有_レ之候へば悦候人而已、掩_レ耳竊_レ鈴と申事實に的當之名言と存候。御示教之策相建候へば少々覺知候者も可_レ有_レ之、何分當時は天保度之舊弊人ならでは在官被_レ致難く、纔に氣骨ある者も放官と相成扱々無_レ是非_一次第、氣運之變形勢之遷轉は存

外のものと同存候。畢竟は人物無_レ之、無識故と恥入候事に御座候。又々□_{（付カ）}後便_一先達ての御請旁如_レ斯御座候。已上。

正月廿日認

安房守

横井小楠先生

（彌富熊太藏）

慶應元年

一六二 岩男俊貞・野々口爲志へ

慶應元年五月二日・七日・十三日

小楠在熊本
岩男・野々口在長崎

岩男は名を俊貞と云ひ、小楠門下。小楠の二甥左平太・大平と俱に勝塾に學び、當時も同じく長崎に語學修業中。野々口は名を爲志と云ひ、同じく小楠門下。夙に開國進取の説を抱き率先洋學を研究し熊本洋學校の開設に力を盡くしその教師となり、後には私塾を開き肥後洋學の鼻祖。當時は藩より選拔されて長崎に洋學研究中。

十二月十四日の御狀相達、忝々拜誦仕候。愈御安康珍重に奉_レ存候。御許何先生引立_{（禮之助、長崎語學所學頭）}宜敷諸藩生も漸々多人数に相成、別て社中は格別精勵の實相貫き候段重々大慶仕候。

宮部事上海迄乗込候段、就ては墨夷密商之事扱々奇怪々々。宮部事は初耳にて、長州密交易之事は先日京都より申參り候と符合仕候。京師よりの次第にては長州より英人と及_二密易_一候故フランス人尤激怒

いたし 幕府に申出候段迄申來候。何に其儘にては相濟中間敷、どふか落着は可有御座候。
 京・關之事情先頃得_ニ貴意_一候筋と又々打替り、先は大に都合宜敷方に相成申候。其次第は 幕府張威之
 主人牧野・諏訪兩閣老先比御役御免、其外美譽閣御役々々御免有_リ、之たる由、いまだ實情不分明。塚原・御手洗の兩御目附長州に下向、大膳殿父子
 被_ニ召寄_一之命申聞、長州御返答次第に 大樹公直々大坂に御出にて親征可_レ被_レ遊との被_ニ 仰出_ニにて
 有_レ之候。

幕府より京師に被_ニ仰越_一之趣左之通り。

上坂之儀先達て被_ニ 仰出_一も有_レ之候處、方今長防之形勢全鎮靜とも不_ニ相聞_一、既に激徒再發之趣も
 有_レ之深被_レ爲_レ惱_ニ 宸襟_一被_ニ 仰出_一も有_レ之、且先達て塚原但馬守・御手洗徹一郎被_ニ差遣_一候趣意若
 相背候へば急速進發可_レ有_レ之候間日限被_ニ申出_一候節聊差支無_レ之様可_レ致旨被_ニ申出_一候。此段御兩卿
 え御通可_レ申旨年寄共より申越候事。

四月

右之通迄申參り候、政府(肥後藩)えも同様之信報之由、中々案外之變態恐悅々々。幕庭一新いたし候へば當時
 之勢 京師も決て異議は有_ニ御座_一間敷、且又長州之形勢は激徒益盛に相成、萩之諸有司正義之徒は渾て
 追退け別に登用に相成是皆末家清未之斗之由、夫故萩表も悉皆激徒に屬し當時は長門殿山口に居られ
 候も萩之様に移住之由、長防一圓共に激に屬し、獨岩國のみ正義相守り必死に相固め居候由、右は京師の傳報、並に熊本より探

擊に出し候者之書、附大抵符合す。

塚原・御手洗兩監察長州着後之次第いまだ相分り不_レ申候、近日中には相知れ可_レ申候。必竟
 幕府今般之一新、其所以一向に相知れ不_レ申、實に驚心仕候。當月十五日前後には嘉悅・内藤歸府いたし
 候間い才事情も相知れ可_レ申候。

茶當時は直段下落之段全洋商之奸曲と被_レ存候。如_レ此不都合にては折角競立し茶急に衰亡に可_レ及、洋
 人共誠に遠大之心無_レ之、日本商人と同一情可_レ憐者共に御座候。何に七八月比にも至り候へば又々上げ
 可_レ申候。此段迄拜復、餘は付_ニ後雁_一申候。已上。

五月二日認

小楠拜

岩男君
野々口君

尙々時分御自愛可_レ被_レ成候。佳筆被_ニ贈下_一忝々拜受仕候、近々に試可_レ申候。岩男君御全家御無事々
 々、御許諸君え御致聲可_レ被_レ下候。已上。

追啓

前書相認置候内追々急報參り、彌以 幕之光景盛大と相成申候。全體是迄之體段牧野・諏訪之兩閣を初
 幕威主張之輩私見を張り立、京師の情實は申に不_レ及何事も 大樹公之御聽に達し不_レ申、誠に否塞之甚
 しき申も中々愚也。然處御譜代之内誰殿と申姓名不_ニ相分_一二三人京師之事情を得候て參府之上段々言

上に相成、右之内姫路酒井大老(忠勝)之嫡子同様にて是迄大老は牧・諫之味方之處、大に合點にて一々言上に相成候由、夫より大樹公初て情實御聽に達し大に御英斷にて會津えは格別之御直書被_二仰下_一、是迄會之忠勤御賞詞に相成る、松前閣老(宗廣)は牧・諫と合ひ兼引入に相成候處尙出勤被_二仰付_一、板倉防州(勝頼)も再勤也。夫より長州御親征被_二仰出_一、去る五日より御先手漸々江戸押出し、大樹公には來る十六日御發駕姫路迄御動座也。勝先生海軍總督被_二仰付_一、鐵炮方にて江川太郎左衛門相添らる。全體此節は關西之大名疲弊被_二聞召上_一候由にて御譜代等にて御征伐之筈也。此方様えは江戸御役人取り切御先手御願に相成候處六番手に被_二仰付_一旨いまだ寄せ場之様子は不_二相分_一、將又一切御政事文久御改正之度に被_二仰付_一、當年參府之大名は御免許に相成段天下一統御達に相成る。

右今日迄相聞候處大略追啓仕候。誠に以恐悅至極萬々太平の基と御神酒を御上げ可_レ被_レ成候。

岩男君御紙面今朝相達、龍馬事(坂本)い才承知仕候。是は此變動にて定てどふかいたし可_レ申候。沼山に參り候へかしと重々相待申候。此段迄申縮候。以上。

五月七日晝認

小 楠

岩 男 君

野 々 口 君

三 白

勝先生海軍之事前書に認候處是は實否不分明也。近日急報參り不_レ申、どふぞ實事にて有_レ之候へかしと祈申候。

長之兵力は中々盛成る由にて一旦には落去に至り申間敷、甚氣遣に存申候。海軍にて直に萩に押懸け候へば必ず全勝と存候。陸斗にては無_レ覺束、何に海軍は起り可_レ申、吳々も勝先生被_レ用候へばどふとも相成可_レ申候。

幕庭兵力は彌以盛成る由、農兵二萬は出來、全くの西洋流にて十分操練熟し鐵炮も大抵「ミニイケル」にて有_レ之候由。去月何日にて候哉 大樹公操練上覽被_レ爲_レ在候處着到姓名五萬人、其日大風雨之處無_レ御延引_一終日上覽、大小炮之音夥敷事にて爲_レ在_レ之由、尤稽古衣之儘にて何も改め不_レ申候様被_二仰付_一。前書塚原・御手洗長州に御遣しの上御親征と被_二仰出_一候處最早其儀に不_レ及旨にて、直に御親征姫路に御本陣也。東海道御上りと被_二仰出_一候へ共大方海路にて直に大坂に御動座なるべしと申來る。此段迄拜呈、餘は大略仕候。已上。

十三日認

小 楠

岩 男 君

野 々 口 君

一六三 甥左平太・大平へ

慶應元年六月十五日

小楠在熊本
二甥在長崎

其許洋學館幕吏聚斂扱々心外に候。乍^(あたりまへの意)然是等ありまへの事、可^レ驚事にあらず、他に拘らず可^レ成丈心力を盡し修行可^レ被^レ致候。他の非をのみ唱へ我が修行おこたり候は士君子の可^レ耻事也。志さへ厚く候へば木石をも動かし申候。目前之變態聊心に被^レ懸間敷、何も扱置き一身之修行第一にて、後來皇國中興之御用に相立可^レ申候外何も無用之閑是非也。能々可^レ被^レ心得候。此段迄申遣候。已上。

六月十五日

小楠

兄弟 當

尚々諸君へ可^レ然頼申候。伊達より書狀參り、返書仕出し得^レ不^レ申、宜敷申傳可^レ給候。

唐菜種早速うえ可^レ申候。當夏は雨計にて田畑共に惡敷、庭前沖之田は度々之出水にて半毛も取れ申間敷、四五日來晴に相成どふぞ續き候へかしと存候。

至誠院様久しく坂口^(不候)に御出之處今夕御歸に相成候。不^レ遠寺倉歸りに何も承り可^レ申候也。

追て膳所御とまりの節逆謀之者露顯、同家中にて六七人程被^レ召捕、外に水戸者一人本國寺にふみ込み召し捕候由、此者共申出同類二百人餘も有^レ之段、此段申來る。末如何。

(小楠遺稿)

一六四 甥左平太・大平へ

慶應元年八月二十七日

小楠在熊本
二甥在長崎

去る廿二日之書狀相達夫々承領いたし候。不^レ相替^レ無事之段珍重に存候。此許聊もさし障無^レ之候。扱京師之事情別紙之通りにて絶^レ言語候。何に様々之内症可^レ有^レ之、征長はととも出來申間敷、如何落着いたし可^レ申候哉、扱々痛心いたし候。必竟幕之私故如^レ此之成行とも相成候。就ては種々心配いたし責て御國許正義相立候様に存候。正義さへ相立候へば如何成る變化にも應ぜられ候。とても天下之事は成り行に就き所置するより外盡力之致方無^レ之、今日之勢決て妄動致す間敷、是より先種々變態いか斗とも知られ不^レ申候。先々靜に修行被^レ致度存候。

時計江口より受取、此節は十分直り候と大慶いたし候。且西洋亂丸望之通にて小鳥渡候へば運動之爲古加邊迄時々出浮可^レ申候。無盡燈は宜敷都合次第遣し可^レ被^レ下候。右代金貳兩貳歩位にて可^レ宜哉、羽織之中に入置候間受取可^レ被^レ下候。先此段迄申遣候事。

八月廿七日

小楠

兄弟 當

(赤星陸治藏)

左平太へ

西洋渡存念之由尤に存候。然し被_レ申越_レ候通り通辨且は彼の文字一と通は出来不_レ申候ては無益に候へば何もさし置十分修行專一に存候。直傳習も出来候へば誠に致_二大慶_一候。且又天下之事も總て變態のみにて今日之凶は明日之吉と相成、明年中には如何變態可_レ致哉、何も其時之所置にて只今よりどふとも不_レ被_レ申、唯々當然之修行重々祈申候事。

八月廿七日

小楠

左平太殿

(小楠遺稿)

右二甥への書状のはじめに「去る二十二日の書状相達」とあるは左記書状である。これも内容なか／＼面白い。

左平太より

尙々岩男より宜敷申上吳候様申候。此節御紙面の茶の儀御申越被_レ下候間早速調、後便委細可_レ申上_二奉_レ存候。以上。

一書奉_二拜呈_一候。秋冷相催候處被_レ遊_二御揃_一益御機嫌能被_レ遊_二御座_一重疊恐悅之御儀に奉_レ存候。次に私共儀何相替不_レ申無異に修行仕候間乍_レ憚御休意奉_レ願候。然ば去る七月八日御仕出之御狀并金子一昨日堀内より相渡、慥に受取難_レ有奉_レ存候。私儀は久々書状も差上不_レ申、思召も奉_二恐怖_一候。

一京攝之事情も追々御申越被_レ下、難_レ有奉_レ存候。此元にては格別相分り不_レ申如何と案勞仕候。長州御追討之儀如何相成候や、只今の通りにては中々急に行候儀は六ヶ敷、扱々心外千萬に奉_レ存候。幕府も此節御征伐之御達有_レ候て、再御追討も出来兼候位に候得ば迎も幕府は是切と奉_レ存候。最早今日に至御歸城と申譯にも相成不_レ申、只々御因循と奉_レ存候。大坂之風評抔承候には此節將軍家莫大之御人數にて御滞坂に相成候ては町家の困窮甚敷由、何れ當年中も御滞坂に相成候ては町家は滅亡仕候と申事にて實に氣毒千萬に奉_レ存候。長州之様子は機械等も十分買入一日々々と強く相成候勢、幕府は乍_レ恐一日々々御困窮に相成候ては迎も天下挽回之儀は相立中間敷奉_レ存候。近日は京師之御模様如何相成候や、一切相分不_レ申甚案勞仕候。長州も吉川_(監物)抔御召に相成候得共罷出不_レ申候處にては最早日延も行中間敷奉_レ存候。天下之勢實に危急存亡今日に至候得共、諸藩一藩も天下之爲盡力致候國も無_二御座_一候。誠に切齒慨歎之至に奉_レ存候。

一長州之事情は瓜生_(福井藩士)三寅罷出候由にて直と御聞被_レ遊候と奉_レ存候。其後は一切相分不_レ申、其外外國之事情も近日は格別相聞候儀も無_二御座_一候。對州餘程之内亂之由、格別委敷事情は相聞不_レ申候得共此儀は内藤より言上仕候間略仕候。當港も近日は不_レ怪異船入津仕候。船數も五六十艘参り賑敷事に御座候。併交易等は誠に寂寥たる事に御座候。交易船等は格別無_二御座_一、多は賣船之由に御座候。軍艦も四五艘参り申候。魯之軍艦も頃日入津仕候間此間見物に罷越候處不_レ怪丁寧に見せ申候。丁度私共参り候中にプロイセンの「コンシウル」_(領事)参り祝炮等打申候間大炮の手續等見物仕、實に速なる事感心仕候。

一私共修行之儀も追々言上仕候通り學授も相不_レ替寂寞たる事にて思敷修行も出来兼申候間、先頃より申談直傳習之儀を申立、私共連中より中山_(左治右門、肥後藩留守居)御留守居迄願書差出候處中山より御國掛合に相成候處存外速に願濟に相成候間、何れも大歡にて直に教師へ罷越私共志之儀を得斗申談候處大きに合點仕候。教師も中々寸暇無_二御座_一候得共左様之存念

にて御座候得ば西洋一時別段肥後生の爲傳習仕吳候様申候。尤傳習の都合は教師より何禮之助迄届けに肥後生大に志有之學校にて十分之傳習出来兼候と申候間自分宅にて傳習仕候と何迄届け申候間中山よりも表向にて何に罷越右之趣相咄、何よりも別段肥後生世話に相成候段教師にも頼み込吳候様相頼候處何も大きに受合申候間、夫より中山は教師に罷越表向にて頼込候處十分受合申候。尤教師云に自分は幕府より御雇に相成候間別段肥後よりの謝物等は一切相受不申候と申候。尤此節之儀は學校にて届兼候間自分宅に引寄教導致候間決して學校其外役人共より六ヶ敷申儀は出来不申候と申候間大に好き都合に罷成、此節は十分之修行出来候と何れも大慶仕候處何杯表向にては受合候得共段々六ヶ敷名儀を付け、全躰此節之傳習を崩す胸中にて御座候間私共何れも憤り、此節は十分議論仕候て學校并に何を引拂候決心仕候て何に罷越右之趣相咄候處、大に恐れ決して左様の儀にては無御座候間本の通り日々教師宅に御出之儀は少も差支無御座候と申候間昨朝より罷越傳習仕候。實に當地之者共何之用にも相立不申候。何杯の心中も外藩生強より候儀をきらひ其より此節之傳習も娼妓致申候。扱此節之御紙面にては私共修行之儀器械等尤肝要と被仰越、私共も出立前御咄御座候間其主意は決して怠不申、實に現在に取かゝり修行仕候と奉存候處當地に参り候ては何も御咄の通りに参りかね、製鐵場にも追々罷越見申度奉存候得共中々幕吏の聚斂甚敷、製鐵所に参り候ても御留守居より鎮臺迄御願に相成其上にて無御座候得ば見物も出来兼候位にて、萬事此節之様に譯なき事に罷成申候。併軍艦には追々罷越候間器械等之儀は十分心を入申候。私も段々考候に洋學に打立候ては迎も日本にて成就致候儀は六ヶ敷奉存候間私には是非々々洋行不仕ては迎も實事は出来申間敷奉存候。洋行之都合も段々洋人に承り入費等相調申候處中々莫大之費用にて御座候間餘程六ヶ敷奉存候。付ては私英學も尤肝要之處迄一日も早く仕上申度奉存候。第一通辨の儀は志有者は是非仕すては相成不申候と奉存候間先通言を肝要と奉存候。私共も必死

にて來夏中も學候得ば今日入用丈けは出来可申かと奉存候。其上にては随分異人と咄も出来必ず縁も付志一つには「^(水夫)マタルス」にても相成候得ば随分洋行も行可申奉存候。併此儀は私壹人決心仕候間乍憚左様思召被上可被下候。私儀も此間は此元引拂候方に決定仕候時分一寸罷歸り色々御思召奉伺、其上にて進退相定江戸の様にも暫は罷越候覺悟にて御座候得共直傳習の儀も本の通りに相成候間先當地にて一通出来候迄は十分之勉強仕候筈に奉存候。色々此動搖罷成ては一寸罷歸奉伺度儀も御座候得共往來に大分日數も費し候間先相止め、何れ冬に相成候て稽古も休み候得ば一寸罷歸可申奉存候。此節は差急ぎ相認め申候間御推覽奉願候。余は讓後便、早略如し此に御座候。恐惶謹言。

八月二十二日夜認

横井左平太

御叔父様

尙々時下乍憚折角御自愛御專一に奉祈候。扱此節は金子御贈被下難有奉存候。併嘸々御世話被遊候と奉存候。此元も思の外入込甚心痛仕候。

一 無盡燈此節は是非さし上候存念にて余程せがみ申候得共まつり前にて一向出来かじ不申候。何れ後便には是非差上可申奉存候。

一 西洋亂丸此節さし上申候間左様御承知奉願候。以上。

(横井時靖藏)

一六五 在長崎同社中へ

慶應元年八月二十七日

小楠在熊本

別紙内密前記書面一六四と同時に二冊に與へるべく書
きし、此の部分だけ同社中へとしたのである。

京師之事情御留守居並探鑿方より政府に申參候趣は追々申遣候通り。

公武之御問御一致にて公平之御趣向彌以不相替、近來に至る迄無別狀との事にて外に何之模様も知れ不申内十日以前に越邸より書狀參る。其大略は

是は初秋之比同社より越・薩に方今之議論申遣候返書、薩よりいまだ參らず。

方今之勢甚以危急に落入候次第は、大樹公御上洛は全く幕威更張之御趣向にて初發御參内之節も御熟議に至り兼、御下坂後御上洛は深く被爲厭候御模様、京師より人材御舉用文久度之改正に復せられ候様被仰出候へ共長征後に可被仰上旨にて御請無之、其上御老中上洛にて征長等之議一々には御伺不被爲出来一段御届に相成等にて全く、幕威御更張之御趣向近比に至り候ては參謀之御方々も一言も被出がたき勢

參謀之御方々とは會・桑杯を言なるべし。

右之通りにて越よりは周旋等一切否塞、此許より申越次第重々同意に候へ共何とも盡力いたしがたし。此上は十分の御更張却てよろしかるべし、左様なれば強き者は眞に怒り弱者は眞に屈す更に又一大變動と相成に相違無之と申來る。

當公御召に相成居候へ共御脚痛にて御斷、是には越邸何も大に骨折之由

春嶽公御召と申事は先頃申遣候通りにて、此許京邸より政府に申參候由に候處越の紙面に一切此事無之、且書中之趣に候へば雲泥之相違にて必定虚言なるべし。此紙面參り不申前京邸よりの飛脚も間遠にて内々政府に聞合すれば唯々不相替何に因循ならんとのみ申事にて甚疑惑いたし居候處右之紙面にて案外之事情大に驚き申候。必竟上田初探鑿之面々會・桑に寄り懸り、薩・越等之諸藩は向方に見離し居候故會・桑よりの傳聞のみにて却て内輪之事情は分り兼たるに相違無之と噂いたし居候内、一昨日葉室新助大坂より大早にて到着

葉室江戸より交代にて下懸け大坂より早に成る、當時上田列大方大坂に下り居る由

京師事情大變動、近衛殿初舊鎖港之思召、廷臣は大方是に一致被致、二條殿も同様にて、大樹公に御押懸けに相成候。公・幕兩端に相分れ全く氷炭いたし候由に申來る。

越之紙面は早速政府にさし出候處是迄聊も京邸より不申來筋故に何やらん疑惑之處、葉室着にて大驚き所謂寢耳の水之如き扱々案外之至に候。先頃此方より獻白之次第は内藤子承知之通りにて尙又其條理に因りて獻白いたし候筈也。

案に、幕府之御趣向全く越之申越之通りにて人心憤激いたし、夫より舊鎖港と云ふ横かみ破りの出しならん。幕の困窮は察せられ候。扱々いたし方無き事也。

長州之事は吉川・徳山御斷にて、長府・清末え上坂被仰出、四十日限り也、是は京師よりも被仰

出し也。

右之通り晝夜雲泥之相違、此末如何成り行可申哉不_ニ相知。乍_レ然我等は決して妄動いたし不_レ申靜に順應可_レ致候。不_レ遠京報も可_レ有_レ之、先今日之形勢如_レ此に御座候事。

八月廿七日

小楠拜

同社諸君

尙々此紙面は兄弟當之心得にて相認候間、文式失禮御海恕之事。

内藤兄先便御狀忝候。對州絶_ニ言語_一申候。以上。

(岩男忠亮藏)

慶應二年

一六六 青山小三郎へ

慶應二年三月二日

小楠在熊本
青山在江戸

牛島五(小楠社中)一郎列出府仕候に付一書拜呈仕候。時節愈御安康に被_レ成_ニ御勤_一、珍重に奉_レ存候。先以久々御安否伺不_レ申失敬御海容可_レ被_レ下候。小楠不_ニ相替_一無事に消光仕、御休意可_レ被_レ下候。然ば即今之光景何とも難_レ申、如何成落着に至り可_レ申哉、扱々不可思議之世界に御座候。御許之事情は一向承り不_レ申、大久保(忠亮)。

勝(ていし)兩氏不_ニ相替_一沈淪致し方無き次第に奉_レ存候。乍_レ去是亦天命にて却て後日之開とも相成可_レ申哉。定て時々御尋可_レ被_レ成奉_レ存候。九州筋之動靜は同社中より御承知可_レ被_レ下候。一言にて云へば先づ割據之二字に落入申候。言上之儀は山海に候へ共、任_ニ幸便_一御起居相伺候迄大略拜呈。餘は付_ニ後雁_一申候。已上。

三月二日

横井平四郎

青山小三郎様

(友野三惠藏)

牛島は慶應二年三月に出府したし、又『續再夢紀事』所載の松平春嶽が同年四月十五日付にて勝海舟に寄せた書面中に當時青山は江戸に居ることが記してありもするから、右小楠の書面は慶應二年のものである。

一六七 彌富千左衛門へ

慶應二年六月五日

小楠・彌富
在沼山津

千左衛門名は朋承後道雄、小楠居村沼山津の素封家西彌富家(外に中・東の兩彌富家あり)の主人。小楠はよほど氣心が合つたと見え、裏門から川傳ひに殆ど毎日の様に訪れ、四方山の話の末はいつも酒席になつたとのことだ。

先時は御書紙被_ニ成下_一忝々、宗兵衛君明日御出立_□々拜祝仕候。罷出候様被_ニ仰下_一候處、御承知の通りにて御無禮仕候。扱鶴霜・カミツ_(藥草)レ持居申候に付御さし合仕候。一樽祝呈仕候。此段迄略呈、何も近日に

横井小楠遺稿

四六七

參謁萬縷可三申上候。頓首。

六月五日

千左衛門様

小楠

(彌富破摩雄藏)

一六八 毛受鹿之助へ

慶應二年七月三日

小楠在熊本
毛受在京都

毛受晩年は洪と稱す、越藩士。初明道館訓導師であつたが、後政務に與りて側用人本役に果進した。當時春嶽は長防再征につきては其の名義明らかならず、諸侯にも出兵を背せざる者少からざるより、之を斷行せば幕府の威權失墜し不測の動亂を惹起する恐ありとて之に反對して居たので、毛受をして小楠に目今の征長事情と其の意見とを聞かしたるが、本書は之に答へたもの。

國家事端起りしより既に十餘年に及び禍亂月日に長進し内は列藩人心服従せず外は各國兵端を開かんと爲るの砌、長州御征伐を急務と被遊朝・幕之命を以諸藩之人數を被召候處、藝州口之外藩命に應ぜず、御譜代衆にて御討入勝敗互に有之、長州方聊屈挫之色無之由、九州は小笠原閣老小倉に御下り候處諸藩之人數參り居不申、依之諸藩へ頻に御催促に相成り、久留米・柳川少々人數さし出、肥前は中途迄、筑前は黒崎迄、弊藩は近日に小倉に差出、薩州并宇和島は初發より御斷にて有之は、長州方先月十七日洋船五艘にて田浦へ逆寄いたし、臺場を乗取り直に滞在翌日引島へ引取、引島は長州にて小倉城下眼前に見る。下關には大

分之人數罷在候由。閣老より引島乗取候様下知有之候得共、弊藩人數は先手少々參着之日にて外は久留米・柳川等些少之人數にて其事行れず、然る處英・墨・蘭三國之軍艦先月初横濱より長崎に參り、同所領事官并教師等集會談議之次第は偽勅之一條を初是迄不信義之稜々并兵庫開港之取り極め、長州戰爭相止め等此節一舉に押破り候趣向之由、墨之教師フルベツキより弊藩士人承り候趣也。其後三艘は薩州并宇和島へ親懇を結候爲罷越候旨鎮臺に相届出帆、外二艘は長州に參り候由、薩州人鹿兒島へ參居候内三艘同所へ入港いたし候。先月廿二日佛艦二艘小倉に參り上陸閣老に面會、長州公命を受不申は長之非分にて御征伐同意之由にて、長州へは書翰にて説得いたし候旨申出候。同日英艦にも參着、閣老に申入候趣は征長に付談判可致旨有之軍艦に御出被下度との由、内々御聞繕之處征長不同意、佛とは雲泥之相違之由、閣老御病氣之由にていまだ御應對無之旨近日小倉よりの急報にて有之候。大抵小倉之光景は藝州口既に戰爭を始候より、閣老頻に乗入をさし急ぎ被申候得共諸手之人數さへ未だ參集不致、且三里之渡海長は洋艦五艘を繋け、諸藩は其用意も無之勝算一として無之、必死之地に乗入候は何方も一切不承知之由、肥前は軍艦も有之外に洋船三艘か所持にて、先手乗入候へば直に進發可致との申立にて差控居候。諸手一切談議も出來兼候上に英・佛黑白之難決を持懸け候得ば、如何之御議定に相成可申哉、何れ曠日持久月日を空するに至るべく、更に又如何成る變態を生じ可申哉、朝變幕動更に無極勢に相成申候。薩州は一切否塞に落入り隱然と一趣向を立專外國と親懇相結び候。必竟は幕庭舊來之御威光御張立・文久度之御改正

御引戻し・外藩御參豫・兵庫海軍御さし止・專長州御征伐御取り懸り、薩は一々御非政申立屢献白に及び、殊に會津とは趣向黑白に相變り、彼是今之否塞と相成候。譬ば長州御勝利に相成候共更に又一大強國之長州眼前に生ずるは必然にて、況哉長州必勝之勢見へ不_レ申候得ば所謂是乘_レ虎之勢遂に進退維谷之地に可_レ至、伏願は 廟堂之上 皇國太平之爲、萬姓安穩之爲、斷然として自ら罪し玉ひ、天下人望之名公を御登用、旗下有名之諸君子御妙撰、内外之隔無く天下之御政事天下と共に被_レ議候御趣向に御改正被_レ遊候へば未だ一令を出されずと云へ共天下之人心渙然と相改、歸向可_レ致は必然にて有_レ之候。大體

保險上坂之閣有_レ之、薩之有名者火船にて馳登れり、是其確證なり。然上は外國之信義自然に相立、長州之御所置干戈を動かさずして治り候は更に可_レ疑事に無_レ之候。今日之危険實に太平之基にて不_レ可_レ失之大機會と奉_レ存候。頓首。

七月三日

横井平四郎

毛受鹿之介様

任_ニ高諭_一今日の事情承り次第隨て拙意聊附呈仕候。彼是忌諱に觸候事不_レ憚認め候間、外間に流布不_レ仕様御心附吳々奉_レ希候。以上。

認置候中小倉急報之趣、英も談判の上長州無道に相極り征長無_ニ異存_一旨申出、英・佛共に引取申候段相聞申候外は、本行の通り相替り不_レ申候事。

(小楠遺稿)

一六九 彌富千左衛門へ

慶應二年七月二十九日

小楠・彌富
在沼山津

唯今安場一平參り、廿七日小倉戦争の委細承申候。平野・永嶺・大丁坂御物頭手。外御物頭手四箇所の戦争何方も御國に勝利を得、恐悦此事に御座候。御國討死名前

手 負

- 山野平八郎
- 高橋作左衛門
- 楯岡四郎兵衛
- 野村虎太郎
- 濱治七郎平
- 田邊格太郎
- 竹原半藏
- 尾藤新之允
- 緒方常彦
- 關勝之助

松村十之丞
松村組小頭

右の通り大急の御使に申参り候由、委細は今晚・明朝迄には申参り可申候。御氣遣も可有御座、御通知仕候。以上。

廿九日

小楠拜

千左衛門様

(彌富破摩雄蔵)

一七〇 勝海舟へ

慶應二年八月三日

小楠在熊本
勝在大阪

先月十一日尊書相達、難有拜見仕候。益御安泰に被成御勤、奉恭賀候。縷々被仰下候趣一々奉敬承候。殊に會へ御書達重々御至當無間然奉存候。如高諭忠實の意は兼て感入候得共一藩知識に乏敷、夫故専征長を主張し薩へも疑惑致し、今日に至り至困之地に落入申し、扱々残念に御座候。大樹公御薨去・征長瓦解、大難事一時に到來安危寸尺に迫り申し、御繼嗣橋公強て御辭退と承り、何れ御深慮可被爲在奉存候。皇天若し 皇國に幸し玉へば必ず賢明の君立せ玉ふべし。一新更始今日に有之、危を變じ安と爲すは更に疑無御座候。不能然ば不可復爲、同屬相喰慘怛を極め可申候。天意何にか在るや可恐可懼。越老公御出方は誠に急流底中の柱共可申、此節は十分の御盡力可被遊深く奉念願候。先達毛受鹿之助より申越旨に御座候て、拙存さし出申候。今日に成候ては何も跡事に相成申候。拙藩も使者さし立國議言上可仕候。此段迄奉復申上度、餘は後日に言上可仕候。頓首拜。

八月三日

横井平四郎

安房守様

再白小倉之容躰は夫々御聞に相達可申候。先日宮川小源太上坂、定て拜謁仕候と奉存候。拙藩近況は御承知被下候通りにて、澄之助・良之助彌以議論明白大に快然たる事に御座候。薩とは聊以異趣無御座候。何も大略仕候。以上。

右も「亡友帖」より採録したが、勝は右書簡に左の如く附記してゐる。

慶應二年六月余謹實中突然として命あり大坂に到る。七月將軍大葬の事あり、此際の悲惨不可言。國家挽回すべからざるの勢益固たし。竊に使を馳せて先生(小楠)の所見を問ふ、是其時余に答ゆる者也。嗚呼余が日録中詳記して後證に備ふるものこゝに五六年、就中當時の形勢また再讀に堪へざるものあり。

なほ「竊に使を馳せて先生の所見を問ふ」と云ふ慶應二年七月十一日付の勝の書翰は左の通である。

勝海舟より

秋暑強候へ共益御勇祥被成御起居、重々奉賀候。扱小拙事先々月廿八日俄に降命再職并速に上坂被仰付、近年萬事を放擲仕益懶惰と相成、御斷可申上心得に候へ共一ト先上坂の上と存候。去る十日出立廿一日坂着之所忽ち上京

横井小楠遺稿

之事有之、其事は西海併合津大説に於て既に實に預言也御用も相濟七月六日歸坂、追々長防之事共も承試候得共散々之事而已、少々愚説も申出候得共閣老飯倉兩侯は大に宣敷、其他監察山内等岩田等有之而已、皆微力上臂を引れ候事多く事不被行他は又不可論不可言、越老侯も御上京鳥渡一橋殿にて拜謁、中々御説は彼行申間敷勢有之、今少々時機御見合之方哉と相考候。薩岩下えも面會可感卓絶之活話、乍去未だ大猜忌解けず、しかし是等は小拙力にて解説可足哉と存候。○彼の萬民性靈を保護被致候大侯伯中今少々眼目有之候は、此同屬相喰之場合に陷申間敷、殆ど印度之前轍、既に狎邪輩佛蘭西之金を借裂地之説行るゝと聞く、誠に痛敷之限。坂地は米金缺乏甚敷由、危急旦夕に有之候。猶兩三輩之小人私念逞せむ爲に我が國家を破る、可驚之甚敷もの也。御國并肥前邊之兵を頼み一日を遁候様子實に可驚事と存候。何とか御周旋可有之至嶮之時機と存候。御高案被下度候。何分此會に押至候ては大諸侯に有らざれば聞かれず言はれざる場合有之候。邦内之一小事猶如斯、況哉外國之交際に於ては如何之成行と押移可申哉、諸官上下共餘りに征長に屈退被致居候間會津家へは極て陳腐之説認差出置候。草稿内々御廻申上候、何分狭小に候得共誠實可感家柄と奉存候。○小拙何之御用も無之、唯々愚説被相問候位にて此御場合に居候は誠に汗顔不堪、且莫大之御費弊中米穀を費候而已計も尤不本意故度々御免引籠之事申上候得共中々御ゆるしも無之、可談人も無之小人に忌れ屬目せられ候も堪不申候間何とか一手段致可申と存候。御國は追々智覺相増候由度々承及候間、龍良力之助公子も篤と當節之至難御聞に入置、皇國へ御大忠御立被遊候様偏に奉仰候。先生之御見解速に御示教も承度、多事中亂筆を以略々申述候。以上。

七月十一日

小 楠 先 生

安 房 守

尙々小拙之説も第一等・第二等・第三等々々と申立置候。第一等は多分西隣邊は同意と存候。其第二・第三は兵は拙速を貴ぶ、速に戦速に寛大を以所置す、是人を殺し人を破る事少き故也など申愚説に有之候、御一笑可被下候。皆空談に相屬將たして一時も行はれ申間敷、尤取捨は上に有之小拙是を何とか思可申哉、御一笑可被下候。如斯長く兵を露候へば費弊は勿論、忽ち冷氣に到候得ばコレラ並熱病にて死亡戦争より多かるべし、況哉數萬金を費して恨を下に買候は何ともかとも申候様も無之候。

自 書

先年以來御國議紛々中大抵有志之正論と申は、天朝・幕府之御一和を以て致口實さるには無之、小臣愚昧之意を以熟考仕候に、既に是遠く、神祖之御微意を不奉察之狭少説と奉存候。此論説を以一朝御採用相成候は、果して御邦内之一隔絶は判然と相起、所謂同屬相喰笑を外國に取る而已ならず、後世之大批判御遁遊れ難き根定と推考仕候。夫當今之幕府は上、朝廷之御任に替らせられ下萬民之姓靈を司之御接對は開闢以來之御事にて、王代隋・唐・朝鮮之比に無之、御邦内悉く一致士民志を一にし舉賢任能小人を遠け遠く海外之情實を明にし、彼が道とする我が道とする所に於て御損益御取捨遊ばされ大小廣狭之所御平心を以事實に御充遊され候はずば恐らくは下民年々月々暗に陥り、勢上下反覆之形を顯し可申は必然たる事と奉存候。況哉鎖國以來之御舊典を主とし、此分域を出ざるに於ては御至難重ね到り可申と奉存候。甚奉恐入候得共幕さたら候重大之御大任に御座候間、天朝・幕府之御間に於て御和御不和は決て無御座候道理に御座候處、何ものを以御一和と指可申哉、若將たして御名實之異成所候は、御邦内之紛擾は如何程御高配御座候共終に不被爲遁候處斷然たる御儀と奉存候。天正以來は唯々御邦内之不羈を御鎮撫遊され候而已ゆへ自から、皇國時之宣敷に御所置も立させられ當今に押及候儀に御座候由。今世外國

府の御職掌と 徳川御家御一家之御事との御分別能々御勘辨遊され、願くは 幕府當今御至當之御職掌え御全力を盡させられ候所小臣愚昧之輩深く奉願候御儀に御座候。此御大典正實に御辨解無御座候はゞ決て御萬解は有御座間敷、當時西國は風化漸く進み必らず萬化他國に先立候間一朝御機軸至正に及候はゞ益御教化に感動仕候も極て速成事と奉存候、厚御勘辨被下候様奉存候。瑣細之事共は書面に不能、空敷紙筆を煩候而已と奉存候間以口上可申上候。謹言。

丙寅六月廿六日

勝 安房 守

會津 侯 閣 下

(肥後藩國事史料)

一七二 元田 永孚 へ

慶應二年八月三日

小楠・元田
在熊本

忝々拜見仕候。昨夜は嘸々御氣削被成候と奉存候。扱小倉御引あげ誠に神速なる事にて、流石に隱居(下津休)平生之精神感心之至に御座候。惣て萬事定て無殘處一行届候事と豫想仕候。御廟議符節を合せ、實に恐悦々々。京攝御献白今日は定て相決し候ものに奉存候。實以一刻も早く被差立度萬々奉希候。如レ此瓦解に相成候ては是より先甚以六ヶ敷、とても 幕庭は是迄にて、被致様は有御座間敷、定て關東御引返と被察、誠に諸有司之罪絶言語申候。夫はさておき、此方様御國議尤御明白に御立被成不申候て、獨立致しがたき勢にも相成可申哉。 兩賢公子御廟算格別之御剛

決可被在夫のみ豫想仕候。先此段まで拜復す。朝變暮動、一兩日には尙又御模様相聞奉待候。頓首。

八月三日

小楠 拜

茶 陽 先生

(元田竹彦藏)

一七二 甥左平太・大平 へ

慶應二年八月八日

小楠在熊本
二甥渡米航海中

一書申遣候。海上彌安全珍重に存候。留守中至誠院様始小兒に至る迄何もさし障無之無事平安にて、安心可被致候。當月中には着港と被存、如何のおち付やと想像いたし候。渡海中喜望峯は勿論風濤烈敷所も可有之、或寒暑之替り等意外之事のみと存候。扱此許征長之一件藝州口より事始にて、先手柳原井伊手散々之敗軍、紀州は聊もちこらへ候位にて有之、石州は津和野・濱田落城、長州中々一致にて強大之勢に相成候。小倉は小笠原閣老參着にて諸藩へ頻に出兵催促候處一向に應じ不申、御國并久留米・柳川迄人數さし出に相成り、尤御國は溝口・監物殿兩手也。久留米・柳川は申譯之爲めに少々の人數也。其外は何方も出し不申。先月初長より押渡り田浦之臺場に責懸り小倉方一戦に敗奔、其後大里に取り懸候上に又小倉敗軍也。先月廿七日御國備場に責懸り候處朝六ツ半頃よりの戦にて七ツ過(午後四時)に終り、四ヶ所之戦争總て御國方打勝三百人餘もうち取、此方には討死七人手負十人餘に過ぎ不申、中々非常のは

たらし驚入申候。尤此節は下津隱居・監物殿付き添被_二仰付_一防戦之手配り等大に宜敷、二手惣懸りには
たらし申候。然處諸方應援は一切無_レ之、御國一手にて遂にもちこらへ出來べき様無_レ之、此勝を鹽合と
して（小笠原）筭閣老に及_レ論判、晦日・朔日に二手引揚げ八日・九日に惣軍歸城之筈に候。尤此議は熊本に於ても
澄之助様・良之助様惣軍御引揚之御議論にて政府中も一決、二日に木村徳太郎御使にて大早にて被_二差
立_一候處、南關にて監物殿よりの大早に出會兩方符節を合せ誠に恐悅々々。小笠原閣老は朔日に軍艦よ
り大坂に歸りに相成候。小倉は同日外郭盡く自焼はだか城に成し家中必死之覺悟にて籠城いたし居候。
小倉君侯は去年死去にて御嫡豊千代殿と申ていまだ幼弱、右豊千代殿・奥方・女子三人并家中家内子供
總て六百人餘御國にたより監物殿一同に被_二罷越_一山鹿（開本郡）より引き分れ内牧御茶屋に御介抱に相成筈に
候。右之次第にて長州彌強大之勢に乘じ、不_レ遠上京之打立いたし、既に藝州へは路を借り候書狀も差付
け候様に相聞へ、是は扱置 將軍家先月中旬御薨去に相成、御跡を相續一橋公に御内命之處一切御請
無_レ之強て御斷と承り、如何落着いたし可_レ申哉、非常之大難事一時にさし起り誠に危急切迫之至に候。
全躰征長を專に主張いたし候は會津尤甚敷、閣老にては小笠原侯にて有_レ之、薩より申出候は天下之大
事を誤り候は會津にて有_レ之と顯然さし付候程にて、今日と相成り大困窮に落入候。越老公并勝先生も
出坂に相成り（野は勝）專盡力有_レ之、一橋公は定て御内存有_レ之の御斷と相見へ、幕威を主張之面々盡く
御退斥、橋公御請に相成正議相立候へば薩は申に不_レ及長も伏從いたし候に相違無_レ之、左無_レ之候へば

幕は是切にて 皇國割據分裂誠にいたし方無き勢に落着可_レ致候。御國よりは近日に御使者被_二差立_一、御
國議被_二仰上_一筈に候。御國議之所は拙者献白之通り 兩公子思召に相叶、政府俗議盡く御論破に相成り
誠に感心之至に御座候。

先月中旬 澄之助様御養子に被_二仰出_一、良之助様御政事御上聞被_二仰出_一候。一統誠に難_レ有恐悅々々。
澄之助様御議論甚堅確實に案外之御模様、良之助様と始終御一致聊御隔り無_レ之、尤時ありて御議論
は合ひ兼候へ共終に一に歸し政府是迄之因循御破り被_レ成、漸々政府中も好き都合に參り申候。是迄薩
に疑惑甚敷候處 良之助様より薩に何之疑惑か可_レ有_レ之、若し疑惑之節有_レ之候へば御聞可_レ被_レ成と政
府中に被_二仰出_一、又は京坂探警方會津一方に相成り甚不_レ宜、必學校よりのみさし出申間敷杯被_二仰出_一、且
又御國人物も十分御承知、御二方様共御聰明恐悅々々。御二方様蒸氣船追々御乘廻し被_レ遊長崎迄
も御出にて、良之助様思召は御自身ヨウロッパ・アメリカへも御出可_レ被_レ遊、中々傑然たる御模様也。
海軍にて無_レ之では不_二相成_一筋も能々御了解にて軍艦御買上も頻に御催促之由、將又交易も外國に乘り
出之思召也。何様監物殿初明日・明後日は歸城にて其上は御軍制一變可_レ致候。虎之助殿も監物殿養子に
被_二相成_一御家老見習被_二仰付_一、此人大に聰明大慶いたし候。先日溝口孤雲隱居御家老再勤被_二仰付_一珍重
々々。唯々残念成るは政府中道家一人外に可_レ然もの無_レ之、是も漸々どふとも相成可_レ申、右之次第にて
御國は中々興起いたし候に相違無_レ之重々大慶に候。

一 外國交易且修行として諸藩より罷越候儀兄弟出帆後無_レ程 幕より御免達に相成候。尤 幕に相届罷越候様との事也。

一 當月中には到着可_レ被_レ致候。其上は早速書狀仕出可_レ被_レ申候。書狀參り候へば政府にさし出し候筈に付アメリカにて日本之評判等其他アメリカ政事之様子且風俗等何に寄らず悉敷認め可_レ被_レ申候。尤此節熊本之様子申越候に付てはよしあし政府之事は別紙に認め遣し可_レ給候。尤兄弟之落付且修行の都合等は本紙に認め可_レ被_レ申候。唯々政府之事は遠慮之事。

一 小倉之戰爭平野拒馬臺大に勝利を得申候。長崎方本道より押懸り候間追々と引受操り廻し_レ打立候て、此手にて二百人程もち取候様子に相聞へ、是迄西洋炮は專遠敵を打候ものにて玉目も大きく操り廻し輕便に無_レ之、日本流之陸戰には場所に寄りては却てコバ臺・行軍杯(靈說カ)よろしくと被_レ存候。尤永嶺手は「ポウト」にて勝利を得申候。是は谷を隔候てうち合いたし遠敵也。永嶺は自身「ミニイケル」にてうち取首をも取り大に功名いたし候。アメリカ南北之戰にて陸戰に輕便之筒發明いたしたるにて可_レ有_レ之、い才聞繕ひ悉敷可_レ申越候。我等存るには臺はコバ臺・行軍臺等を斟酌し筒を西洋の筋付にいたし百目位なれば可_レ宜哉、車臺にてはとても輕便には有_レ之間敷存候。此節之戰にてヤリ(槍)・具足は廢り可_レ申をかしき咄様々有_レ之候。小銃は「ミニイケル」に歸し可_レ申候。

一 五穀を初日用之物品金・銀・銅・鐵・材木等何に寄らず根段委敷聞繕可_レ被_レ申越候。尤茶之根段上・

中・下能々しらべ可_レ被_レ申候。岡田拙藏歸國にて承り候へばフランス・イギリスにては十分之上茶を珍重いたし、根段も格別に高價之由。是は唐國より差し送り候上茶にて可_レ有_レ之候。是迄長崎之模様にては宇治製杯の上茶は用ひ不_レ申、一統用ひ候下茶買入候間茶之方は甚以不案内との咄しのみ承り候。岡田咄しとは大に間違候。アメリカも風俗は英・佛と同様に候へば委敷可_レ被_レ申越候。

一 御國近來米之根段二百三四拾目迄上り申候。諸物も是に釣り合何も上申候、百姓は大に仕合にて珍重々々。大豆類は外國に用ひ候ものにて有_レ之候哉。御國之品物にて其許にて専ら要(要)ひ候もの茶・ロウ(蠟)の外何物にて候哉。シヨウイ(醤油)の類は如何に候哉。是又委敷吟味之事。

一 新聞紙之事、諸物之根段等疑敷見へ候事有_レ之翻譯之間違か、又は奸商之所爲なるや、聞き正し可_レ被_レ吳候。

一 軍艦・賣買船共に大小新古精粗様々なれば根段も又様々なる可し。然處其許新造之根段軍艦何十間大炮何十門なれば幾位程、賣買船も又同様、且「アルムストンク」(事説カ)「ミニイケル」の類アメリカにて専ら行れ候大小砲新製にて註文いたし候へば幾位程と申候能々聞繕可_レ被_レ申越候。

一 前條小倉外郭迄自焼と認候處矢島源助昨夜參り承り候へば本丸共に自焼いたし、家中惣人數中方方面に落候由。御國へは前條之外末家二軒主從男女懸り參候由、御人數引き舉は右之落人之混雜にて甚だ難澁いたし候由、様々之咄しにて一向に取り認出來不_レ申候。源助咄しに藝州へも長より押懸り、何とか

申所城下より二里計迄乗り込申候處廣島の城は紀州公に守らせ、藝之人數は盡く出張いたし防戦なんなく長勢を防留め對陣いたし居候由、家中家内は最寄々々の山林に隠し置候由、終始之處如何相成べきや、遂には落城に至るべきと存候。源助は人夫宰領にて小倉に參り居、大心配いたし候。

一 萬國公法と云書手に入候。是は原書はアメリカの惠頓氏エイトン之著書にて、歐羅巴各國の人物・諸國交際之道を論辯いたしたる書にて當今專流行之學問と存候。唐國にて翻譯、當春江戶開板、萬國交際には尤も需用にて定て其許にても流行と存候。其外此類の書様々可有之、又此學術は定て一科に立候事に被_レ存候。心を用ひられ度存候。

様々申度候へ共限り無_レ之、此段迄申縮候。何も後便可_三申入_一候。已上。

八月 八 日

小 楠

左 平 太 殿

大 平 殿

尙々水土異なり候へば別て自愛祈申候。此許當夏は痢病等流行いたし候へ共留守は勿論縁家心易き所迄何のさし障り無_レ之、尤小野殿(彦次郎)カク症さし重り、先月盆後に死去に相成候。

一 前條に申遣候其許書狀熊本政府之事は何も無事に候。參り候へば必ず政府にさし出候間 君上の御覽に入候必定にて其心得可_レ被_レ致候。何事も明白に認め可_レ被_レ吳候。

一 前條小笠原閣老は上坂と認候へ共長崎より申越には長崎に被_レ參候由。肥前・筑前を相催し尙征長之存念と申事に候へ共其實は大狼狽にて、上坂も出來兼候様子也。

一 大坂より急報有_レ之一橋公將軍職御内命之處一切御受無_レ之、徳川家御相續迄御聞入、是迄因循虚張之幕習御一新、天下之公論を御用天下と共に天下を治るの思召之由。尤征夷之職掌は天下に御撰可_レ被_レ成との思召斷然と閣老并會・桑に被_三仰向_一候由、然し長州は尙御征伐の御所存にて既に當月廿日大坂御發途藝州へ御下向と一昨日に大坂より申參り如何之思召に候哉甚致_三疑惑_一候。此方様よりは 御二方様御英斷にて是非々々征長御留之御國議一定いたし、昨日小笠原美濃殿御使者として急速出立上坂被_三仰上_一筈に候。

一 越前三岡列御免許、平生之隱居也。春嶽公は大坂御出方也。越よりは八木八十八又々長崎に再遊、近日沼山にも參候筈也。八木より飛驒(本多)・主馬(松平)初何もより書狀送り、大に都合宜敷段申參り候。柳川も大分宜敷相聞候。

一 牛右衛門十分のはたらき、山田(五次郎)・嘉悦(市之進)も同様也。

一 江口榮治郎(美)アメリカ渡海之打立、いまだ決定はいたし不_レ申候。

一 若殿様(美)・良公子(美)今日より蒸氣船にて長崎に御出懸四五日御到留、何に外國人抔へも御應接も可_レ有_レ之候。

一 橋公御家督甚非常之御存念、征長は大方御止に相成可申候。何に天下も一新更始可致、御國御二方様御英明何に政府之舊習漸々一新可致候。
兄弟純一之修行是祈候。
様々申遣度候へ共此段申縮候也。

八月十八日

書狀追々に相認何も致前後候。十月初頃は書狀仕出し可申候事。

追 啓

本書認終り候處に去る七月二日發バタヒヤ港よりの書狀到着、先々無事に同所迄到着珍重に存候。い才申越之趣うち寄り致三讀、數日之風波別て甚敷いか計苦勞と察入申候。船將壯年格別之長達感心いたし候。且又バタヒヤの光景國主之可憐一々驚嘆之至に候。被申越候通りにては十月終り迄には(新約)ニヒヨロク(宛)に着と被存候。至誠院様より此節之御返事は不爲成候間拙よりよろしく申遣候様との事に候。バタヒヤにてさへ右之通に候へばニヒヨロク着にてはいか計之美麗成る事や想ひやり候。何もく不遠到着之書狀相待入候。此許之成り行も天下治亂之分界來月中には相成り可申候。(分カ)來月末迄には當書狀仕出し可申候。此段迄申縮候事。

廿九日 認

小 楠

兄弟 當

(小楠遺稿)

一七三 毛受鹿之助へ(別啓)

慶應二年八月十一日

小楠在熊本
毛受在京都

先便小倉等之事情拜呈、其後之光景夫々御承知之通り果て大變動と相成、殊に 大樹公御薨去大難事一時に到來誠に危迫之御時節如何之御所置に出候哉。老公様御苦心御憂慮奉恐察候。一日も早く 新大樹公御相續誤國の奸邪御黜斥、内外高名之侯伯は申に不及御旗下顯名之諸君子御登用、別て薩は無實之冤塞に候へば大隅公早々御呼上長州之御所置御任せ被遊度、惣て舊來之御非政御改正、天下列藩と其公正之御政道に出候へば所謂凶を變じ吉と爲す一新更始 皇國之興隆此時と奉存候。若又然らず、此大變に當り尙舊來之御所置に出候へば各藩分裂同屬相喰不可言之大禍亂とも可相成候。何も先書之拙存にて外に言上之筋無之候。過言奉恐入候へども拜呈仕候。頓首々々。

八月十一日

毛受鹿之助様

横井平四郎

(續再夢紀事)

又 副

横井小楠遺稿

先便拜呈仕候^(之可良之助)・良之二公子政事御聞に相成、件々之御英斷有^レ之、舊來之因循漸く耳目を改候勢にて別て當節藩中之大慶此事に御座候。附呈仕候事。

十一日

小楠拜

(村田英彦藏)

一七四 彌富千左衛門へ

慶應二年八月十九日

小楠・彌富
在沼山津

一昨日は惣兵衛君首尾能御歸陣、重々目出度奉^レ存候。私は例の通にて御無禮仕候。扱一樽拜祝之印迄に呈上仕候。何に罷出御手柄御咄拜聞可^レ仕、此段迄略呈仕候。已上。

八月十九日

小楠拜

(彌富熊太藏)

千左衛門様

一七五 高崎兵部へ

慶應二年十月十九日

小楠在熊本
高崎在薩摩

高崎は薩藩士。初は猪太郎、後に五六と稱した。文久二年小楠の畫策した公武合體連合運動に奔走盡力した。此の書面は送達の便を得ざりし爲か其のまゝ横井(時靖)家に藏せられてゐるのを採録した。

一書拜呈仕候。時節愈御安祥に被^レ成^ニ御起居、珍重に奉^レ存候。然ば去春は御書狀被^ニ成下^ニ縷々被^ニ仰下^ニ、且清茶拜戴不^レ淺忝候。早速拜復の處是迄押移怠慢奉^レ謝候。近日村田新八君御來訪にて御様子も承り暫御休暇之由、彌以御修養被^レ成大慶の至に候。扱即今の世態奇々怪々之變遷とは申ながら、其病因より見る時は又怪むに足らず、誠に衰弱之極處と存候へ共必竟は様々之邪氣分離とも可^レ申哉。良醫の見る處にては必方劑の投じ方可^レ有^ニ御座^ニ候。尊藩諸君何に御盡力之場と奉^レ存候。拙存は村田君え御咄し申候、御同人より御聞可^レ被^レ下候。夫は兎もあれ箇様之世變に生れ候へば非常之大精神を養ひ不^レ申ては善惡吉凶の觸れ來に従ひ我靈臺之屈伸と相成り、耻づ可^レき事に御座候へば老拙が身に受けて深く覺も有^レ之、大に修養之力を盡し聊間斷無^レき様に心得罷在候。如^レ此養ひ不^レ申ては萬一之大事に當り畏縮仕るは相違無^レ之、誠に残念千萬に奉^レ存候。才も智も何も此大精神より引廻す事に候へば人間第一の尊き所須臾も不^レ可^レ忘と奉^レ存候。老拙心上如^レ此、爲^ニ知己^ニ不^レ得^レ不^レ言。扱又此養ひ様は定て御心得可^レ有^ニ御座^ニ候、態とさし扣申候。賢契以爲^ニ如何^ニ。必ず好便御報奉^レ待候。此外山海拜話仕度候へ共何も筆頭に盡し得^レ不^レ申、御安否伺旁拜呈仕候。頓首拜。

十月十九日

横井平四郎

高崎兵部様

尙々時下御厭被^レ成度、老拙も極て平安に罷在り御休意可^レ被^レ下候。近頃は酒も小酌、養生のみに心

得罷在候。御一笑々々。

(横井時靖藏)

一七六 甥左平太・大平へ

慶應二年十二月七日

小楠在熊本
二甥在米國

一筆申遣候。此砌愈無事に被_レ相暮、珍重に存候。留守中至誠院様初參らせ小供に至る迄聊相替り不_レ申、安心可_レ被_レ致候。扱ニイヨロク到着も十月廿日前後と被_レ存、今頃は太分居り合に相成たるにて可_レ有_レ之、書狀も不_レ遠參りいかゞの安住にて候哉。又は學校出席等何邊之事共承り可_レ申と屈指相待居候。

一 京師橋公御相續後武備節儉は非常に御改正、平生御行列御側鎗一本之外諸道具一切廢せられ股引半切にて下着は惣てツ、ホウ袖に相成候。夫故會・桑等も同様にて大抵西洋家に歸し、京坂は砲聲之絶間は無_レ之候。○先達て勸修寺之宮を初廷臣二十餘人蟄居・閉門等被_レ 仰出_レ候。是は長州征伐不同意且つ薩へ同意之人々にて、徒黨を企て異議申立候趣にての御辭令と承り、勝先生長州へ被_レ差越_レ長の申出取り上げ歸りに相成候處甚不首尾に相成り、御斷りにて東歸被_レ致候。將又小笠原閣老小倉之不都合にて一旦御役御免之上閉門被_レ仰付_レ候處尙又近來御召に相成候。是等にて幕之景色相見へ申候。十八大名御召にて 良之助様先頃御上京御非政筋被_レ仰上_レ直様御歸國、九州中は薩・肥初大抵上り無_レ之、當時上京は加州・藤堂世子・筑前之世子・備前候・上杉候・雲州候是迄之由。加州候は何か存念被_レ申達_レ十二月中旬歸國、其外の御方々も皆々歸國御願立に相成候由、是よりは上京之大名は有_レ之間敷候。○兵庫開港外

國より近々申出候由にて既に近々に異船も參り談判も有_レ之筈之處夫は相止と相聞へ候。幕は 朝廷に追從にて鎖港の説主張の由、右等の次第にて何之條理も無_レ之ゆらくとして一日々々押移り終には兵禍にも相成、扱々致方も無_レき世界に候。

一 長州は寄手藝州表引取候後彼表之戦争は相止候へ共小倉との取り合追々有_レ之、終に小倉大敗にて國境迄被_レ追詰_レ候處、小倉より和を乞ひ何とか申川を界に關門を立互に戦は相止居候處、長より熊本に被_レ參居候世子を人質に遣し候様申向て、左様無_レ之候へば直に戦を始るとの申懸にて先日小倉より使者を遣し嘆願いたし候。熊本にては致方無_レ之右使者薩州に參り候に木村徳太郎^(總カ)・坂本彦兵衛被_レ差添_レ當時薩に參り居如何成り行可_レ申哉、いまだ歸り不_レ申候。

一 薩州は自國取り堅め國論一定いたし彌以富國強兵に取り懸り、西洋器械も大抵取り寄せ、洋人も四五輩呼寄せ操練等甚盛大に相成候。家中若者共は大抵洋服截髪いたし候。是迄國中旅人は嚴禁之處、鹿子島内は勿論何方もさし許候故諸國商人追々入込み、城下杯は日々にぎはひ候。國論大にうち替り智術計策にて行れざる事も合點いたし、何も誠心公平之處に一統歸候由、必竟は大隅公非常之人にて此地にかたまり珍重に候。當君も餘程宜敷日々政事堂に出方自身上聞候也。近頃訴訟箱を被_レ出、下情を聞もし聞かれ候主意に付いか成下賤よりも言上不_レ苦、毎朝自身開封被_レ致候。是等は近來之美事也。

一 越前も次第に回運に相成り候。先達下山尙長崎へ參り、歸り懸に此方に立寄、御家老中よりの傳言

にて當今之存念承り度旨に付い才咄合、且書附をも遣し直に春嶽公に相達し其節は春嶽公在京也候筈にて上京いたし候處、既に春嶽公は御歸國にて直様福井に歸り拙者存念之趣先御家老中に相達し候處、直に兩公の御聽に達、翌日下山を御召にて段々書附に付き御尋有之深く御感心之御様子に有之候。夫のみならず拙者起居暮し方等委敷御聽き被成候由、然處一昨日越より御家老連名並御側御用人等數通の書狀參り、先頃下山に傳言之献白之次第兩公深御感悅被成吳々禮謝可申述、且又以來存念有之候へば乍筆勞申吳候様、當年柄暮し方如何と被思召候て金子百兩御送被下旨申來、誠に存懸け無之の大慶に候。其上社中何もより五十兩相送り、此節火急之飛脚にて一統申合出來兼候間追て當金子さし出可申との事也。社中は飛驒・主馬・豊後初牧野・三岡・松平列彌(本多)以心術の一途に歸し集會も甚盛成事之由、別て三岡修行之功夫實地に歸し、以前とは人物大にうち替り候趣也。當時市・在一統三岡を景慕すること甚敷、家中も十に七八は三岡々々と申候。何に不遠復職可致候。右之勢にて當時に至り上にも下にも聊も嫌疑は無之候。(原本部)松平去月初參政に被命候。源太郎はよ程人物も進め、一統之依頼と相成り候由。

一 御國許何之相替り無之、政府は全因循、別て政府中一人之人物も無之先は道家一人也。此道家も當時は京師に相詰中々否塞甚敷、何とも可申様無之候。乍去世子・良之助様へは政府之因循内輪之情實迄具に御承知に相成、實學連にあらざれば人は一人も無之深く一國之情態を御見ぬき被遊候へ共只今御人之黜陟有之候ては物論沸騰に御恐れ一日々々と御押移り機會御待被遊候御様子也。米家

虎之助殿を養子に被致御家老見習被仰付左馬助と改名此人非常之人物、先監物殿よりも勝れ候て 良之助様へは別て御懇意にて無内外御うち明し御咄も有之候。拙者へは別て信ぜられ元田中次(水守)にて萬事計り合被申候間存付候事は一々此人に申達、直様 良之助様御聽に相達し候。是は極密いたし候。當時は誠に大因循に候得共何に二三年内には必ず變態可致候。一躰之人心はよ程振り立候内御番頭・組脇別て折合宜敷、組脇は一致いたし講習討論も無遠慮場合に至り、必竟は神足十郎が力にて有之候。

一 長崎より下の關をさし塞ぎ運漕出來不申候に因て九州・北國商船一切塞り京坂穀類大に乏敷、夫のみならず八月に五畿内より北國筋に懸け大風雨有之何方も洪水出候て田畑殊之外之損失に相成候。近江の湖一丈八尺と申事にて越前は風水殊に甚敷、二百年來絶て無之大害之由、右等にて當時大坂之相場三斗五升米にて六兩迄上り申候。九州中は風水之害は無之候へ共一體不宣、御國內阿蘇南郷別て不作にて有之候。當暮之御双場根段三百五十目に相立候。下々方大困窮に及候。必竟大坂米價之沸騰は五畿内北地風水之大害とは申候へ共北地は越前迄大害にて加州より先は格別之損失は無之由にて、此害之懸る處は七八ヶ國故日本一統にならしては十の八九分に至候へば是程之困窮に至るべき様無之、唯々下關塞り候て穀類之融通無之候故大坂の功乏敷相成如し此馬鹿らしき根段に相成候。九州中は下地穀類は餘計に有之候故地双場は二百四十五夕程にて格別に上り不申候。夫も一切買ひ手無之持居候て、百姓共は却て難儀いたし候。夫々大坂に釣り合三百五十目に御双場を相立候間き、んにては無

之、穀類持ながらの大き、んに相成り、錢と申もの一切乏敷、百目の高もかり出し兼候程に有之候。扱々不思議成る年越にて候。

一 其許落着如何様之成り行に候哉、日々其噂のみいたし候。當時之勢不ニ相替ニ盛大なる事にて可レ有レ之、最早南北戦争後之終末は何も相治り、南方人心も落着たるにて可レ有レ之、將又政事向諸般主向漸々熟知可レ被レ致、言語も今頃は分通じ可レ申候。定て可レ然人物様々之事に存候。乍レ去來春中頃迄は熟懇之人も思ふ様には出來申間敷、萬端困窮之事のみと察入候。然し暫も居合被レ申候へば漸々懇意之人も出來可レ申候。

一 萬里之山海隔り候へば山川草木何もかも異類のみ多かるべし、乍レ去人は同氣之性情を備へぬれば必ず兄弟之志を感じ知己相共にする人出來するは自然之道理にて、却て日本人よりも外國人親切なる事に被レ存候。申迄も無レ之候へ共木石をも動かし候は誠心のみなれば、窮する時も誠心を養ひうれしき時も誠心を養ひ何もかも誠心の一途に自省被レ致度候。是唯今日遊學中之心得と申にて無レ之、如レ此修勵被レ致候へば終身之學中今日に有レ之、航海之藝業世界第一の名人と成り候よりも芽出度かるべし。

一 諸般之事共聞繕等之事は先便に申入候間何も略いたし候。何に來春早々可ニ申遣、先此段迄、何も申縮候也。

十二月七日

小楠

左 平 太 殿
大 平 殿

尙々此許社中何も無事に居申候。必ず精業相勵之程祈申候。先便にも申候通其許之紙面は上にも差出候事故くはしく被レ認、且御國之忤忌諱に懸り候様之事柄は別紙に認められ候様存候。何も來春に付し申候也。

(小楠遺稿)

一七七 毛受鹿之助へ

慶應二年十二月十日

小楠在熊本
毛受在福井

去月十二日御狀相達忝拜見仕候。先以 御兩家 上々様益御機嫌能奉ニ恐悦ニ候。隨て貴家御揃愈御安康に被レ成ニ御起居、奉ニ拜賀ニ候。然ば下山氏歸北之砌聊之愚存言上仕候處、 老公様達ニ御聽ニ御滿息に被ニ思召ニ候段被ニ仰下、誠に以難有仕合に奉レ存候。扱は當年柄別て不自由に可ニ相成ニと被ニ思召出、百金被レ爲ニ拜領ニ旨被ニ仰下、銘レ肝難有謹で頂戴仕候。當暮は金極之究地に落入可レ致様無レ之、拱手罷在候處、御恩賜飛降誠に積鬱を散じ春風無限之至に御座候。先不ニ取敢ニ御手元迄御禮申上度、餘は開春目出度得ニ御意ニ可レ申候。頓首々々。

十二月十日

小楠 拜

毛受鹿之介様

尙々時下御自愛專一に奉存候。小生も不_二相替_一老健に罷在候。御地去秋は非常之風水にて、貳百年來絶て無_レ之大害之由甚驚入申候。御救恤御手當何廉と想像仕候。九州筋は風水之害は無_レ之候得共一體不作にて、殊に下關運漕塞り諸物融通不_レ致方金錢必至之不足誠に絶_二言語_一候。御地日々飛雪之由今程は封印之世界と想像仕候。此許は寒威は三十二三度に至候得共雪は絶て無_レ之、誠に打替り候事に御座候。日夜御勤御苦勞可_レ被_レ成_二御自愛_一、何も申縮候。

別 啓

小倉表追々長州と戦争有_レ之、終に小倉及_二大敗_一、領内境迄被_二押懸_一其末和を乞、何とか云川之界に關門を建出入を禁じ居候處、長より申遣候には世子を質に差出候様、當時熊本に被_レ居候人也此事承引不_レ致候得ば去る二日より戦争可_二相始_一、二日之日限は廿日に延候也右次第にて先達て小倉より熊本へ御使者差立如何様にぞ取計吳候様との事に御座候處、熊本にて被_レ致方無_レ之、右使者薩へ罷越候に付、此方よりも使者を差添遣し候ていまだ歸り不_レ申、長よりも桂小五郎薩へ罷越候由に承り申候。如何相決し候哉、伊豫松山へも長より使者差出候由其子細は承り不_レ申、薩州器械場を開き洋人を呼迎へ、海陸軍兵之訓練等盛大之事は加藤氏列見聞にて御承知と奉存候。近來國論一變は甚致_二感心_一候。薩人之習として動もすれば權變智術に出候て、自然と他の疑惑を受候弊不_レ免候處、大隅公深く此弊習を御省悟にて一統に御諭筋有_レ之、近頃に至り一藩誠心公道を主張し、夫より自然と黨派之異論は融解に相成候由、當公御天授宜しく日々政府御出方何事

も御聞に相成候。其上訴訟箱被_レ出、每朝御自身開封にて下情相達し人心想付も甚宜敷由、流石大隅公人傑と奉存候。肥前不_二相變_一富國強兵は先十分とも可_レ申哉、此藩之情實藩中一人として閑叟公に及ぶもの無_レ之、夫ゆへ治居り候。豊後肥田御郡代久保田治部左衛門近日暗殺に逢申候。此者支配所より莫大之金を掠取候より大に怨を受申候。定て其末之事と被_レ存、又長州より共言。

弊藩相變り不_レ申候。世子御上京御延引に相成候。軍艦御買入之決議にて漸々海軍御取起之筈に候。他は依然たる光景に御座候。

京師御上京に相成候諸侯漸々御引に相成候趣相聞、小笠原舊閣御召は別て人心失望之第一にて、爾後上京之御方有_レ之間敷、一新更始之大機會を失ひ候のみならず却て禍亂之増長と相成可_レ申、方今天下疲弊之極に至り再戦争とも相成候ては、上は 皇天之照覽恐敷、下は生民之慘怛如何計に候哉、閣老諸有司此處に心付なく、舊日之私見を張立られ候は寔に痛心之至に奉存候。今日之勢一國獨立之覺悟專一にて、自然之天理に隨ひ自然之人事を治め人心一致之地に運び候て、進では天下之非政を正し退ては一國の人民を安じ、所謂天吏之道を盡すの外利害得喪は決して心を動す處にて無_レ之候。御笑覽に附呈仕候。是等承り候次第にて拜呈仕候。九州筋尙相變り候儀も御座候得ば早速に言上可_レ仕候。頓首々々。

十二月十日

小 楠 拜

鹿 之 介 様

(續再夢紀事)

一七八 元田永孚へ

慶應二年十二月十一日

小楠・元田
在熊本

時分柄珍敷暖和に御座候。扱次第に押詰候處にては在中^{ザイ}殊の外大困窮に落入候勢は追々御承知も可^レ有^レ之と奉^レ存候。必竟は五畿内・北地去る八月風水之害も候へ共是は十分之二二分にて、下關運漕塞り候より九州・北國諸物滞り融通出來兼候よりの事にて、京坂は諸物拂底米價莫大に引上げ、九州・北國之大困窮と相成申候。夫は先扱置、御國之情態一統金札一切乏敷候故米を初諸物必死と滞り、夫の上三百五十目と云^{大坂目}莫大の御双場根段被^三相立候より在中一統何方も上納さし支へ大困窮に落入候。米粟・たばこ等の品物持ちながら如此の仕合は誠に珍事と被^レ存候。殊に阿蘇南郷等の北地は下^キた地、^(畿内)に相違無^レのみならず、去々年來宿驛の人馬に疲居候て必死之困窮、一切御役人聞入無^レ之故内牧會所には不^三容易^二張り紙、坂梨には付火、又は二個村より強訴之打立等も可^レ有^レ之風聞、甚以恐敷黨民も起り可^レ申、大に氣遣事に御座候。右等之次第一日も早く^(長岡野物)丸承知に相成申度、河瀬安兵衛能々事情承知致し候事故、速に安兵衛被^三呼寄^二下情聞取に相成度吳々奉^レ存候。熊本も御案内通り御藏切手一切買方出來不^レ申候にて御承知可^レ被^レ下候。此處置は預貳百萬兩も作り出し、在中諸物借り根段を立、何物に寄らず、質に取り、來年に至りうりさばき候上割り返し可^レ申候。御家中切手も同様也。然し只今貳百萬

兩之札無^レ之事故、在中は先切手を出し置取りさばき、札之出來次第に引替ればいと安き事也。左候へば官府にては人情之自然に隨ひ、札をふり出し諸物をさばき何之心配もいらすして一國人心の信を取る事にて順風之上に帆を懸る勢也。是等之所置定て河瀬心付も可^レ有^レ之、何より一^レ日も早く同人被^三呼寄^二得斗下情聞取に相成候様吳々御心配奉^レ希候。様々拜話も御座候へ共大略仕候。以上。

十二月十一日

小楠 拜

茶 陽 先生

尙々近日之光景如何、御知せ可^レ被^レ下候。以上。

(元田竹彦藏)

一七九 元田永孚へ

慶應二年十二月十九日

小楠・元田
在熊本

御念書縷々之趣拜承仕、昨夕山田^(五次郎)參り一ト通り承り、勿論何之見込も無^レ之、重々御同意に奉^レ存候。今日の危迫に至り 廟堂俗論誠に沙汰之限に候へ共、夫はありまへの事怪むに足らず候。末章之 雲上御模様難^レ有御事にて、引入も何も此上は天にて、唯人事を盡され候迄と奉^レ存候。山田定て參上可^レ仕、略仕候。日向・小倉・天草被^三仰下^二忝々奉^レ存候。小倉人質にて無事に治り候へば珍重に奉^レ存候。萬一再戦に相成候へば老幼婦女等實に不^レ忍^レ聞事に御座候。

山田咄しにて京師も存外宜しく御座候由、珍重々々。然し一向に安心は聊出來不_レ申候。先此段迄拜復、餘は他日に付申候。以上。

十二月十九日

小楠拜

茶陽先生

(元田竹彦藏)

慶應三年

一八〇 村田巳三郎外四名へ

慶應三年正月三日

小楠在熊本
村田等在福井

巳三郎は村田、孫右衛門は高田、五市郎は堤、藤左衛門及び彌三郎は千本を姓とする。

新春目出度申納候。各様愈御安康に被_レ成_レ御加年、珍重に奉_レ拜祝_レ候。先以無_レ申譯_レ御無沙汰に罷過御海容奉_レ希候。然ば舊臘は、老公様被_レ思召付_レ金子拜戴仕誠に以難_レ有仕合に奉_レ存候。其上に御同志之諸君御贈惠被_レ成_レ下_レ拜謝難_レ申盡_レ奉_レ存候。御承知被_レ下候通り非常之嚴罰を蒙り日月を押移候處莫大之借金相重り、去暮に至り何之手當も無_レ之唯々拱手罷在候處大金飛降、春風吹起り堅氷積雪一時に消融仕候。偏に舊情被_レ思召出_レ御恩賜拜戴仕候處別て難_レ有奉_レ存候。不_レ取肯_レ御禮奉謝迄仕候。餘は春永

く得_レ貴意_レ可_レ申候。頓首拜。

正月三日

小楠拜

巳三郎様

孫右衛門様

五市郎様

藤左衛門様

彌三郎様

尙々時下御自愛專一に奉_レ存候。小拙も不_レ相替_レ依舊罷在候、御安心可_レ被_レ下候。堤君は執法見習被_レ仰蒙_レ重々奉_レ賀候。久々御不例之段は下山氏より承り如何と御案じ居候處御全快珍重に奉_レ存候。藤左衛門様圍碁御樂之段是又下山氏より傳承仕、定て依然たる御手段と奉_レ察候。小拙も村老に聊心得候者有_レ之時々參り樂申候、近來は一目半位進歩仕候、御一笑可_レ被_レ下候。何も此段迄申縮候。以上。

(村田英彦藏)

一八一 本多修理・中根鞆負へ

慶應三年正月十日

小楠在熊本
本多・中根在福井

本多は敬義、銳次郎と稱し通稱は四郎右衛門又修理、大藏とも云ひ釣月又眠雲と號した。越藩の家老として藩主を輔翼して藩政に

も國事にも功があつた。かの安政年間の建儲問題につきては橋本左内・村田氏壽と俱に賛畫し、元治元年茂昭征長副將たる際には軍事總奉行となり、長州再征に當りては春嶽の意を體してその中止に努力したことは有名である。

改曆目出度申納候。愈御安康に被_レ成_二御加年、珍重之御事に奉_レ存候。小拙事依舊に罷在御安意可_レ被_レ下候。然ば舊臘は貧家御助力として松源君より金子御廻し被_レ下早速相達、誠に以御厚情之至深忝々奉_レ存候。嚴罰以來無策無術にて一年々々と押移居候處、去夏左平太兄弟洋行莫大之出費打重り、舊臘に至りては實以致し方無_二御座_一拱手罷在候處、老公様被_二思召出_一金子拜戴仕、且諸君子之御助力にて窮陰積雪一時に融解に至り、快哉之春風を迎へ申候。誠に拜謝之申様も無_二御座_一候。先不_二取肯_一寸楮拜呈仕候。此段奉謝迄餘は大略仕候。頓首拜。

正月十日

小 楠 拜

眠 雲 君
味 庵 君

尙々御起居如何に御座候哉想像仕候。御家内様方御壯健に御暮可_レ被_レ成、可_レ然御傳奉_レ希候。
松源氏迄聊之愚存申遣候へば御一覽可_レ被_レ下候。此節は書狀數通相認何も略仕候。何に後便萬縷拜呈可_レ仕候。以上。
(松平慶民藏「都鄙文書」)

一八二 松平源太郎へ

慶應三年正月十四日

小楠在熊本
松平在福井

松平、通稱は源太郎名は正直、越藩士。小楠に愛せられて萬延元年その歸熊の時も隨ひ來りて小楠堂に滞在して講學の傍九州諸地方を視察しなどした。明治維新後地方官に歴任し内務次官に進みて男爵を授けられ、後實業界に雄飛し樞密顧問官に列した。

一書拜呈仕候。時節愈御安康珍重之御事に奉_レ存候。去る十二月十八日之御狀相達、忝々拜見仕候。先以上々様益御機嫌能奉_二恐悅_一候。隨て貴家愈御安康に被_レ成_二御加年、奉_二拜祝_一候。然ば御社中御助力尙又被_二贈下_一、誠に意外之御惠投、御厚情之至り拜謝難_二申盡_一奉_レ存候。先便にも得_二貴意_一候通り御庇にて去暮之窮迫相凌可_レ申處、此節之御助力にては十分之仕合、近年至窮之貧家俄に光華を發し滿堂春風を迎、則御廻しの姓名諸君に拜謝さし出候、宜敷御届可_レ被_レ下候。貴君よりも可_レ然御傳奉_レ希候。秋來之御美政被_二仰下_一、一々感戴之至り奉_レ存候。就中御大臣東西之遊學は_(三・四字書遣)之長進と奉_レ存候。兎角國家之不形_(一・二字書遣)は人心不明に本_(一・二字書遣)候へば、他邦に出廣く交り自然に智識開け至極之御良法と奉_レ存候。薩よりも大臣之子弟江戸へ_(數字書遣)京師之光景一向に相聞へ不_レ申候。幕庭如何之御都合に候哉、何角想像仕候。被_二仰下_一候_(數字書遣)は眞實御自反之砌に御目的定り被_レ成_(一・二字書遣)に候へば_(一・三字書遣)心爲_二國家_一恐悅萬々奉_レ存候。乍_レ然疑念更に解け不_レ申、何分御模様被_二仰聞_一可_レ被_レ下候。

今上崩御之御沙汰御承り奉_二恐入_一候。天・幕御續きの大變誠に不可思議之御事に奉_レ存候。

九州筋新聞并愚存任^レ仰拜呈仕候。御許御同志之議異同も可^レ有^ニ御座^ニ候、何分被^ニ仰聞^ニ可^レ被^レ下候。春風長く御取遣可^レ仕候。不^ニ取敢^ニ御禮拜復、餘は大略仕候。頓首拜。

正月十四日認

小 楠 拜

源 太 郎 様

尚々時下御自愛專一に奉^レ存候。御端書之趣家内共に夫々申聞候處、前後之御禮吳々可^レ然^{□□}候様(一、二字違)申出候。毛受君に宜敷御致聲可^レ被^レ下候。奥垣子無^ニ存懸^ニ事にていたわ敷被^レ存候。御序も御座^{□□□□}候(二、三字)子に弔詞可^レ然御傳可^レ被^レ下候。以上。(横井時靖藏寫本)

慶應二年の秋藩命によりて小楠を訪うた越藩士下山尙が小楠の窮狀の甚だしきを目撃して歸り越藩君臣に物語りたるより春嶽は金子百兩、同志は五十兩を贈り來りたるに對して、小楠は毛受と村田巳三郎外四名とに禮狀(一七七・一八〇)を遣はしてあるが、前記本多・中根への書面と此の松平への書面とによると福井同志から更に送金し來つたと見える。なほ右文中「九州筋新聞并愚存任^レ仰拜呈仕候」とあるが肝心の物を存せぬのは遺憾だ。

一八三 甥左平太・大平へ

慶應三年四月二十七日

小楠在熊本
二甥在米國

宛名の左太郎・三郎は左平太・大平の事。それは兩人が渡米の時はまだ外國遊學が公許されてゐなかつたので、左平太は伊勢佐太郎、大平は沼川三郎と姓名を變へたから。但し小楠はよく佐太郎の佐を左と書いてゐる。

一書申遣候。時分柄愈無事に被^レ致^ニ精業、珍重之至に候。留守中至誠院様初參らせ小兒に至る迄聊御替り無^ニ御座^ニ皆々御康在^レ被^レ成^ニ御座^ニ候間、安心可^レ被^レ致候。先以先便政府より御助力之事御詮議相決し、此節フルベツキ手許迄御遣しに相成、同人より取り斗ひ其許に相渡し候手數に有^レ之、此節夫々受取被^レ申候事に存候。誠に是迄之艱苦押斗られ候處此御助力にては氣寛かに修行可^レ被^レ致難^レ有^ニ仕合に奉^レ存、留守中皆々安心いたし候。近日に社中並縁家内へ神酒を上げ申答にて有^レ之候。

久々書狀參り不^レ申何に不^レ遠參着いたし可^レ申相待居申候。最早大分月日も相立言語も漸々通じ候様に相成たると被^レ存候。學業も定て入所等被^ニ心得^ニ候事に存候。

此許京師漸々都合宜敷、幕府大分之御悔悟にて薩之御疑惑も大に融解に相成り候に付大隅殿先月末上京、土の容堂公・宇和島老公等上京、其外越之當公・尾之老公・阿波・備前等追々上京之筈、いまた薩・越等上京之後之次第は相聞へ不^レ申候へ共此節は、幕庭右之通りにて内外之差別無く御相談に可^ニ相成^ニ何に一致いたし候事に被^レ存候。左候へば海軍も起り可^レ申、大分都合宜敷致^ニ大慶^ニ候。幕府御手許御改正は誠に驚く斗に參り、い才は先便に社中より申遣候通に候。夫等之筋は彌以被^レ行能々御精神も届候事に存候。此上は外藩御一致御手許御非政筋御改正公供の御政事に歸候へば不^レ遠邦内治平可^レ致候。(三條實美外四卿)五卿も歸京に相成候。是は薩之心配と被^レ存候。十七卿も御免と相聞へ候。

兵庫開港之事先頃 幕府より 朝廷に御建白有^レ之、十分之理を盡したる御書附にて致^ニ感心^ニ候。朝

廷より尙諸大名に御尋有之、大名何方もさしたる異議無之皆開港之議にて候。京師之勢諸生輩迄鎖港之説は一時に消亡と承り候。

内藤泰吉又々京師詰被_レ仰付、二月初に此許出立、其節老拙存念薩・越へ申入置候。二藩之存念有名之大名被_レ召寄、御政事御相談并列藩有名之士被_レ召寄、候等之趣意にて實は押詰候條理に至り不_レ申。老拙存念は事業を離れ座論に相成候ては却て紛々を生じ其益有_レ之間敷、海軍局を被_レ建、大樹公大總督有名之大名薩・越等之如き參豫旗下并諸藩有名士被_レ召寄、上・中・下院にて御詮議有_レ之度、一之海軍より富國に及び外國萬端に至り此にすべざるは無し、日本之大政府と云べし。去れば匹夫たり共直に 大樹公へも御面謁不_レ苦、尤公卿も此に御出方にて公武外藩貴賤共に公供之政事に歸し可_レ申大趣意也。泰吉書狀昨日社中手許迄は參り居候由、いまだ承り不_レ申候。

熊本は先便に社中より申遣候成行之末米卿御家老御斷に相成候。當時は溝口隱居專全權にて有_レ之候。隱居二千俵にて小笠原上座御家老被_レ仰付、依然たる俗習にて政府中道家一人頼有_レ之候。いまだ小倉武功も御賞無_レ之、列藩よりは大因循國と稱し申候。然し 若殿様・良之助様は必ず夫々御同意と申にては無_レ之候へ共致され方無_レ御座、御様子に相聞へ候。夫と云ふも一統之人心向ふ所夫々有_レ之、御英斷出來兼候勢と被_レ存候。然し是はわけも無き事、京師の御都合さへ彌宜敷一新勃興いたし候へば直に夫々應じどふともこふとも相成るは眼前之事にて聊以氣遣は無_レ之候。

江口榮次郎彌以アメリカ遊學に相決し七月初迄には 御國出立之筈に候。此節は航海には懸り不_レ申、商法脩行に申談じ、當人も夫に重々同意いたし候。横濱にてアメリカ飛脚船出來不_レ遠乗り出し候様子にて大方此にて出帆可_レ致候。此に引き懸り居候は金子にて是も大抵出來之見込に候。申述度義は山海に候へ共何も大略いたし、此段迄申入候事。

四月廿七日

小 楠

左 太 郎 殿
三 郎 殿

尙々彌以自愛脩行可_レ被_レ致候。小川御袋様御逝去残念に候。其外縁家中何も替り不_レ申候。當年は宿本にて茶製法に取り懸り大分宜敷出來いたし候。江口出立之節は遣し可_レ申候。何なりと草木之類珍敷物種子にて苦しからざる品幸便も候へば送り呉られ候様に存候。尤給られ候もの可_レ然候事。
(横井時靖藏)

一八四 甥左平太・大平へ

慶應三年六月十五日

小楠在熊本
二甥在米國

前文が缺けてゐるが、五月廿三日一橋慶喜参内。長州處置・兵庫開港兩件を奉伺せるに朝議紛々として決せず翌夜二更に及んだこと、それから防長寛典の 勅諭及び兵庫開港の 勅許が見えるから、本書はその直後將軍の英明や越藩の近狀を報じたもの。

(前文缺)御參内之御約束にて候處、薩侯は御病氣申立にて出方無之、越・宇一同に御參内、攝家初宮方、公卿御一座にて御評議、廷臣方鎖港之論多く中々六ヶ敷候處、大樹公莞爾と御應對一々御説得にて一人も敵すること不能、其節は二日と一夜と三時之御參内中、大樹公聊之御怠りの顔色無之非常之御精神、遂に開港は相決し御伺濟に相成候。大樹公近來は西洋學者等被_レ召出、彼の方之事情は勿論富國強兵深く御信用全く西洋之治道之御趣向也。天授の御英明にて當時之諸侯一人も御助け申人物無之、大樹公之御心に天下無人之思召有之、以後御驕慢之御病甚以恐敷事也。越は、幕と御咄し合能々熟し何之隔も無之、薩は、幕之非を咎めたる心底にて春嶽公も此間に立十分之御辨解も有之たれ共氷解之姿無之之扱々残念なり。要之、大樹公如_レ此御英明有爲の御方なれば、皇國中之因循は自然と取れ、西洋流之富國強兵に起り候は必定なり。唯々残念は眞之治道之目的無之、終に第二等之事に落入可_レ申候。

右之通りにて當年中には日本之光景も大にうち替り候に無_レ相違、定て海軍も起り外國交易も初り、就ては、御國之事も是迄とはうち替り可_レ申、随分相樂み修行可_レ被_レ致候。

越前も嶽公よ程御開けにて此節も拙者に献言御求め何事も申述吳候様に申參り、近日山田出京いたし候間是に托し存念申入候筈也。三岡事も彌以進歩、心術之一途に修養いたし、夫れ故一統之人望一人に歸し、三岡が一言は一統耳を傾け居候位之事也。嶽公大分の御解にて何に不_レ遠復職可_レ致と誰も相待居

候由、此段迄申入候。餘は追々付_レ後雁_レ候。以上。

六月十五日認

小 楠

左 太 郎 殿

三 郎 殿

尙々至誠院様熊本に御出御留守にて御狀も御遣し不_レ被_レ成候。當年は茶大分出來、よ程上品に相成樂申候。來春はおふいもいたし候筈に候。其許紙面一切届き不_レ申日夜相待候。何に不_レ遠内到着いたし様子も承り可_レ申候。先便にも申候江口來月比には其許にうち立可_レ申、其節い才可_レ申入_レ候。以上。

(横井時靖藏)

一八五 甥左平太・大平へ

慶應三年六月二十六日

小楠在熊本
二甥在米國

一書申遣候。時分柄相替り不_レ被_レ申精業可_レ被_レ致、珍重に存候。留守中至誠院様初參らせ小兒に至る迄聊相替り不_レ申、安心可_レ被_レ致候。然ば去十二月晦日并三月五日認之書狀當月中旬に相達、被_レ申越_レ候次第夫々承り候。第一其節迄此許書狀到着不_レ致段いか斗之案勞かと押はかり入申候。此方よりは去冬迄に數通之書狀仕出し其後も追々節々に仕出し、いか成間違にて候哉、誠に心外千萬に存候。フルベツキ手許にも精々申談、以來無_レ別狀_レ到着いたし候様頼み入候事に候。

御助力之專政府無異儀相濟、當月六日に金子フルベツキに御渡に相成候間何に不遠相達候事に存候。是も段々及延引候へ共夫は致し方無之、右金子到着迄之心痛想像いたし候。

西洋列國利の一途に馳せ一切義理無之、就ては二典三謨熊澤書彌信仰之段甚以致大慶候。此許にても夫のみ及講習候。富國強兵器械之事に至りては誠に驚入たる事業にて今日程盛大成るは前古より無之之至れり盡せりと可申、唯此一途のみ取り用べき事にて道に於ては堯舜孔子之道之外世界に無之彌以分明に候。一言にて是をいへば西洋學校は稽業の一途にて徳性をみがき知識を明にする學道は絶て無之、本來之良知を一稽業に局し候へば其藝業之外はさぞかし暗き事と被察候。既に西洋列國是迄有名之人物を見候てもアレキサンデル・ペイトル・ボタマルテ杯之類所謂英雄豪傑之輩のみにてワシントンの外は徳義ある人物は一切無之、此以來もワシントン段の人物も決して生ずる道理無之、戰爭之慘怛は彌以甚敷相成可申候。我輩此道を信じ候は日本・唐土之儒者之學とは雲泥之相違なれば今日日本にて我丈を盡し事業の行れざるは是天命也、唯此道を明にするは我が大任なれば終生之力を此に盡すの外念願無之候。近來に至り越前は十分此道に興起いたし、春嶽公も程御都合よろしく三岡列道之一途に歸着いたし候。嶽公よりは追々御下問參り或は書上或は社中上京之節夫々相達し深く御信用に相聞へ致大慶候。京師の成行とても見込無之、い才は社中より申遣候間何も略いたし候。御國許依然たる光景は勿論也。然し良之助様へは別段御心被爲在、左馬助殿へは何も御うち明御咄

し合有之候。本より政府へは一切御出方無之候。夫故越前之取り合・京師之事情等此方に相聞へ候は御内々にてさし出申候。其許此節之書状もさし出候間以來共に其心得にて認め可被申候。段々申度事山海に候へ共此節は極く急ぎに認候間何も略いたし候。以上。

六月廿六日

小楠

兄弟當

尙々申迄も無之之自愛第一に候。此土に無之之野菜物か何にても實まき出來候もの贈り呉られ候様存候。花類にても桃杏あんずの様成る物か何にてもよろしく候。

茶は長崎・唐土杯にて意味不詳ロバ杯が仕入候外に上品も行れ候哉、根段いか斗にて候哉、承り度存候。以上。
(横井時晴藏)

一八六 元田永孚へ

慶應三年七月十一日

小楠・元田
在熊本

忝々拜見仕候。誠に至極の炎威難堪事に御座候。別て御城下御暮し兼被成候と想像仕候。扱脇差代三十金御贈り被成下、慥に落手仕候。さぞ御世話被成下候と奉存候。御庇にて盆仕舞快く仕、拜謝難申盡奉存候。

京師之成り行甚案勞仕候。如高諭全閑是非之事、扱々無人界にて御座候。

宮川罷越候段米家書狀參り、別て咄し合の都合可_レ宜奉_レ存候。此上攝津如何の落合相成可_レ申候や、何分上京出來候様に祈申候。

廟堂無事泰平之段珍重に奉_レ存候。餘り暑さにて日々裸體に押送り申候。聊涼氣催候へは御光駕萬々奉_レ待候。先拜謝まで、早略申縮候。頓首。

七月十一日

小楠 拜

茶陽 先生

尚々新堀(下津休也)も漸々快御座候由珍重に奉_レ存候。左平太共去十二月晦日と三月之狀一同に到着悦入申候。少々は新聞も有_レ之、何れ近日さし出可_レ申候。以上。

追 啓

手製茶乍_レ聊拜呈、御味可_レ被_レ下候。當春は大分よろしき評判に御座候。以上。

小楠

(元田竹彦藏)

一八七 松平源太郎へ

慶應三年九月十二日

小楠在熊本
松平在福井

六月廿七日附之貴翰先月末長崎より到着、忝々拜見仕候。先以上々様益御機嫌能被_レ遊御座、奉_レ恐

悦候。隨て貴家御揃愈御安康に被_レ成_三御起居、奉_レ祝候。然ば宰相様御出京非常之御盡力被_レ遊、乍_レ恐奉_レ感戴候。幕庭公共正大之御運に相成兼、無限之遺憾に奉_レ存候。宰相様にも御歸國被_レ遊、重々至當之御事に乍_レ恐奉_レ存上候。爾來薩州間隙彌益に相成候趣扱々致方無き世態に御座候。貴諭之通り以來 皇國之變態本より見詰無_レ之事に候得共、當今一般西洋之兵制に一變致し駸々然と憤興之勢甚可_レ賀事に候得共、必竟自國同胞相喰之私心に發し、皇國防禦之本意とは難_レ被_レ申、夫故各々外國に親懇を盡し應援求勢にも相成り、以來 幕命不_レ行國々割據之形に落入候得ば必ず邦内生靈之慘怛に到り可_レ申候。其末甚敷に至りては制を外國に受にも至り候勢は決て無_レ之とは被_レ申間敷、是等言語に發候も甚耻敷恐敷實以大息仕候。然し餘り過慮にも出可_レ申哉、高意如何相伺申候。

差出し候十二ヶ條政府に御差出之處、執政衆より 御二方様御覽に被_三奉呈候段被_三仰下、誠以て過分の至り難_レ有奉_レ存候。右に付御問合御別紙幾回拜見仕候。一々至當之御高論更に間然無_三御座、社中に相廻し意見も御座候得ば其上得斗話合、尙拜呈可_レ仕候。

宰相様毎々御直書にて小拙救郵之御申込被_三遊候段被_三仰下、誠に御懇篤之思召九拜難_レ有堪_三感涙不_レ申候。然る處此許之儀は是等之筋殊に嚴重に有_レ之候間、沼山の匹夫毎年之御恩賜にて餘命を繋ぎ、何之望も無_三御座、天命に安じ罷在候間此段は御聞置可_レ被_レ下候。

弊藩之事御尋被_レ下、誠に平々たる事にて耻入申候。乍_レ去世子(慶久)・良公子(蓮美)此御二方は全く御聰明に相違無_レ

之、皇國之事情一國の人物邪正等能々御承知にて、有志之者何も深く依頼致し居候。藩籬甚敷習俗にて、一切御沈黙にて御座候へ共自然と内外に響き、俗有司輩は何哉らん恐敷罷在候。近來は執政之面々時世之切迫なるに驚き、追々宅寄合等致し大分起立申候。長岡監物(是存の嫡子)は執政相斷、養子(實は弟)左馬介見習有之に付政府に出席仕候。此人物は大臣中之秀傑にて世子・良公子能々御承知にて、内々は何事も御打明し御咄し有之候。何も扱置藩籬相解二公子御遠慮無之政事御聞被成候様に相成り候へば、夫より何事も被行可申、此等之處左馬之介十分心配致し大に都合も宜敷様子に御座候。左馬之介は小拙へは極内々にて諸事問合遠慮無御座、則十二ヶ條も同人には見せ申候處、良公子へは極内々にて入御覽申候。右之通りにて此節御問合之別紙も左馬之介爲心得見せ申候筈に御座候。自然は良公子へも相達し可被成、其他は不及言上候。申迄も無御座候へ共此事萬一流布も致し候へば忽我が國家之大破壊と相成候間、他聞御嚴禁所希に御座候。拜話之筋山海に候へ共何も盡得不申、此段拜答仕候。以上。

九月十二日認

尙々御端書之趣社中に相傳へ、何も宜敷申上候様申出候。家内共よりも同様に御座候。
左平太共追々書狀遣し、彼方大に都合宜敷修行仕候。近比に至り此許政府より修行料給り、兄弟仕合に御座候。

此節は諸君に書狀差出し得不申、吳々宜敷御傳可被下候。何も付後雁候。以上。

(小楠遺稿)

一八八 安場 一平 へ

慶應三年十一月三日

小楠・安場
在熊本

拜呈仕候。山田への書狀出來さし申候。何方よりの使にても早き方に御仕出し可被下候。別紙扣も無御座候間御覽之上御寫置可被下候。上封御手許にて宜敷奉希候。此段申縮候。以上。

三日

小楠 拜

安場 君

一八九 山田五次郎 へ

慶應三年十一月三日

小楠在熊本
山田在京都

上記の如く安場をして送らしめたもの。

去月十六夜附之御狀忝々拜見仕候。諸事案勞之内別て 幕庭之御様子感戴仕候。大に苦心を慰め申候。扱て御申越に付て聊心附之次第別紙に認さし申候。極早々に認め申候間諸事不都合に可有御座候。春嶽公御上京被成候へば早速に御差出し可被下候。別に書狀も付け不申段も御演舌可被下候。其他御了簡次第に任せ申候。此段迄拜呈、餘は大略仕候。以上。

十一月三日認

小楠 拜

山田 兄

尙々此節は内藤(奉吉)にも書狀出來兼、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。以上。

一九〇 安場 一平へ 慶應三年十一月六日・八日

小楠・安場
在熊本

昨夕は忝候。御歸御氣削と奉_レ存候。扱茶陽より一件吳々斷申越、則返事仕候。御序に御届可_レ被_レ下候。越への書附は昨夜申談候通りにて、書附之別啓と御座候を口述位に御改、山田當を削り小楠拜と御清書被_レ成下、持參いたし候様奉_レ願候。此段拜呈仕候。以上。

六 日

小楠 拜

安場 君

越献白之書昨日得_レ貴意置候後尙心附左之通り

一 發端別啓を献白に改む

一 末 文

右等件々即今之御急務かと奉_レ存候。學校を初御改政之諸事愚案御座候へ共政府之基本相立候上御取り興之事に奉_レ存候。至急に相認、別て不都合に御座候へ共、聊寸志表白迄に献言仕候。以上。

十一月三日認

横井平四郎頓首拜

右之通りに御寫遣し被_レ成下一度奉_レ希候。度々御筆勞甚心外之至、御海容可_レ被_レ下候。老拙昨日よりは又々不鹽梅にて昨夜は別て相いたみ難澁仕候。何も大略仕候。以上。

八 日

小楠 拜

一平 君

(一八八一—一九〇三通安場保健藏)

右によると小楠は在京山田五次郎よりの來書により新政に就きての意見書を認めて春嶽及び安場・山田に送つた。即ち其の書を一通書きて先づ安場に見せ、彼をしてそれを前記山田への書簡と俱に山田に送らせ、山田をして其の發端の二文字と末文の數行とを書直して春嶽に呈せしめたので有る。(「建白類」六参照)

明治元年

一九一 甥左平太・大平へ 明治元年正月三日

小楠在熊本
二甥在米國

京都よりの召命により上京の事とならんとする時のもの。

七月七日・八月廿二日並横文字十月某日・同四日長崎社中への書狀追々相達不_レ相替_レ無事に修行之段珍重に存候。留守中聊相替り不_レ申安心可_レ被_レ致候。扱此許之事情嘉悦先便之書狀並岩男狀にて夫々可_レ致_レ致_レ承知_レ候。先々存外之成り行と打替り申候。拙者も一兩日には上京可_レ被_レ仰付_レ御模様相聞へ

内々用意いたし居候。良公子も御上京故此節は聊盡力之心得に候。全體之見込幕府・薩州平穩之都合に相成候へば其餘は格別之難事とも不_レ被_レ存、此兩所解け合ひ安着之所さし寄り心痛可_レ致と存候。海軍等は勿論大に起し候勢到來大慶此事に候。

京師にて日本政府相立上院・下院人才相集め諸事議定之趣向にて自_レ今兩三年内にはどふなりと落着安堵之地に至り可_レ申候。然しさし寄當年中は種々之難事と存候。彼是想像可_レ被_レ致候。

熊本も御改政、種々難題も觸れ來り候へ共 世子・良公子非常御英明故遂に何も治り可_レ申候。然し四五十年來之惡舊習にて御次並諸御役人因循格式全く國是と相成り候故此場所人心誠にこりかたまりいたし方無_レ之候。是以當年中之風波かと存候。

十餘年來の紛亂今日に押爪め、一旦に開明いたし候へば中間善惡は様々可_レ有_レ之、然し全體人心大分開けたる事にて京師といへ共鎖國攘夷之説は出不_レ申候。先は大分治め能き勢に相成候。

拙者上京いたし候ても至誠院様御元氣よろしく留守何之氣遣も無_レ之可_レ被_レ致安心候。何角多用にて好便さし懸り此段迄申入候。餘は京師より何も可_レ申述候。

正月三日

小楠

左太郎殿
三郎殿

尚々申迄も無_レ之候へ共自愛第一修行可_レ被_レ致候。拙者も痲疾にて困窮いたし候處大分よろしく上京可_レ致候。京師へは内藤も居候事にて心強く有_レ之候。竹崎か典次かを同道之心組に有_レ之候事。

(横井時靖藏)

一九二 竹崎律次郎へ

明治元年正月十三日

小楠在沼山津
竹崎在横島

名は政恒、晩年茶堂と稱す。小楠の門生で相婿。家塾を設け子弟を教養すると共に農耕・植林・新地開拓等に力む。肥後に於ける文化生活の先驅者たると同時に産業界の先覺者である。此の書は小楠に慶應三年十二月京都より召命があつてからのもの。

虎右衛門宿行にて一寸拜呈いたし候。先以頃日久々得_レ寛話大慶いたし候。扱小拙出京も 良公子初左

馬殿・洞水(由良)道家列は御内決と相成、昨夕は於_二一日亭衆議と申事に承り、大抵御遣に決定かと存

申候。尤 公子御供と申事にては無_レ之、御跡より登り候との思召と昨夕宮川・駒井(小源太)參り承り申候。自然

登京被_二仰付候は、宮川・河瀬(典次)もうち立申候間乍_二御苦勞御出懸被_レ下度存候。右之次第にて一寸御

出府吳々相待申候。此段幸便に得_二御意申度、早々以上。

十三日

小楠

竹崎君

尚々いまだ内々の事にて御口外は御用捨可_レ被_レ下候。以上。

(竹崎律次藏)

一九三 志内半兵衛へ

明治元年三月二十一・二十二日
小楠・志内
在沼山津

半兵衛は小楠と懇意であつた沼山津村の素封家の主人。左の書面は二十一日・二十二日の日付の二通だ。口上書のやうな短文でもあるから宛名を最後にのみ出した。

私儀從_ニ 朝廷_ニ 赦被_ニ 仰出_ニ 候付士席被_ニ 返下_ニ 旨被_ニ 仰出_ニ 難_レ 有仕合に奉_レ 存候。此段御知せ仕候。以上。

三月二十一日

三月二十二日

志内半兵衛様

横井平四郎

(志内孫太郎藏)

一九四 宿 許 へ

明治元年四月二十日 小楠在大阪

此の書は小楠 朝廷よりの召命にて四月八日上京の途につき同十一日着阪、徴士參與を拜命して滞阪中のもの。本書から宿許への

書面の宛名に「又雄」が加はるが、これは小楠嫡子で、もう當年十二歳である。

宮川急歸に付拜呈仕候。御全家被_レ 成_ニ 御揃_ニ 奉_ニ 拜賀_ニ 候。隨て小生相替不_レ 申罷在、御安心可_レ 被_レ 下候。

此許い才之儀は同人より御承知可_レ 被_レ 下、大略仕候。先々出立前は何角御配意被_ニ 成_下 忝々奉_レ 存候。着後舊病も次第に快き方にて仕合に御座候。日々多忙の至誠に困り入申候。只今通りにては老體實、以たまり不_レ 申、御憐察可_レ 被_レ 下候。四位の參與古今無_ニ 比類_ニ 仕合深く恐懼仕、何ともいたし様無_レ 之候。

關東も服罪に落着、會津いまだ無事に治り不_レ 申、是は必ず一戦には相成可_レ 申候。

主上いまだ御滞坂、不_レ 遠御歸京と奉_レ 存候。其節私も上京可_レ 仕候。若殿様不_レ 怪御ふみはまり先日寛

りと被_ニ 召出_ニ 候。明後日は此許御發帆至急に御歸國、此節は大變革に相成申候。虎之介殿は昨夜出帆に

て四日過には御先に到着にて有_レ 之候。御隱居いまだ到留にて候哉、此節は必定出方に落着いたし、病氣

如何と案じ申候。日夜多用大に困り入申候。此段迄申上候。以上。

四月二十日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々此許天氣日々晴にて候へ共氣候不順に御座候。最早茶も相濟候事と奉_レ 存候。

新本一卷・宮かたびら地・ほうちよふ五本・せんまひさし出申候。此節迄は何方へ書状も仕出し得
不_レ申、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。以上。
(横井時靖藏)

一九五 宿 許

明治元年閏四月十三日

小楠在京都

早飛脚立候に付一寸申上候。愈増御安泰に被_レ成_二御座_一、奉_二恐賀_一候。私も聊相替り不_レ申無事に罷在候。
去る四日に此許に着仕少々外邪にて引入、昨日より太政官に出勤仕候。制度局判事被_二仰付_一候。是は
暫之間のよしにて何に近日に御政事改正に相成候筈にて、其節は轉じ候御内意にて御座候。一抵大に都
合宜敷、私は何方よりも大にまちに相成、餘り過分にて御座候。

關東之方も會津は必ず一戰に相成可_レ申候。然し是は官軍之爲には却てよろしく御座候。何に不_レ遠落着
可_レ仕候。様々申上度候へ共此節は極急にて無事之段迄申上縮候。以上。

閏四月十三日

横井平四郎

至 誠 院 様

お つ せ 殿

又 雄 殿

尚々京着以來晝夜來客大ひま無しにて外邪之養生も出來不_レ申、出勤仕候處四_時より七_時迄被_二

是多用、其上引取より直に岩倉様に參り夜四_時頃に歸り申候。今日も同様にて夜に懸り可_レ申、ケ様
之繁用にて是には誠に困り入申候。

左平太共より送り候實物ははへ申候哉、ひわやゆすら最早_うれ候へば又雄・おみや日々給_タ候事と思
ひやり申候。又雄書物修行重々いのり申候事。
(横井時靖藏)

一九六 宿 許

へ

明治元年閏四月十九日

小楠在京都

早飛脚出立に付一寸拜呈仕候。増御機嫌能奉_二恐悅_一候。私も相替り不_レ申無事に罷在候、御安心可_レ被_二成
下_一候。此許近日御改正にて大にいそがしく、晝夜間、無_レ之誠に困り入り申候。りん疾も相替り不_レ申し
まだ十分には快無_二御座_一候。然し御案じには及び不_レ申候。

天子様も晝五_時より表に被_レ爲_レ出、夜五_時に奥に被_レ爲_レ入、其間は政府にも御出、且文武之御稽古等御
修行被_レ爲_レ在候様に相成り、不_レ遠二條御城に御移り被_レ遊、一切御改正に相成筈に御座候。太政官も段
々御改正にて私も近日に顧問に轉任可_レ被_二仰付_一御模様、左様に相成候へば誠に多用にて實以迷惑に
奉_レ存候。い才は次の便に可_レ申上_一候。

關東の方會津伏從不_レ仕追々合戦有_レ之、毎度官軍勝利にて不_レ遠落着可_レ仕候。江戸は全く伏從、必竟大
久保・勝之心配故に無事に治り申候。御國之御人數は大惣督之本陣付にて江戸に罷在、いまた合戦に

はあひ不_レ申候。

左京亮様へは日々御集會申上、其外春嶽公・閑叟公初諸大名且公卿方大に心安く仕、別て春嶽公は以前(長岡通美)よりも猶御親しく既今夕は太政官下りより 左京亮様御一同嶽公に參り申筈にて御座候。

左平太共書状はいまだ着不_レ仕哉、着仕候へば御回し可_レ被_レ下候。今暫見合せ、此方彌以御都合よろしく私も居り合候へば兩人共に呼よせ申心得に居申候。左候へば御國へも歸り又々出浮可_レ申候。イッレ何に來月中も暮し候へば見爪め出來可_レ申候。其節書状是より遣し可_レ申、此段迄あら_レく申上縮候。以上。

閏四月十九日

横井平四郎

至 誠院様

おつせ殿

又 雄殿

尙々時分柄御自愛專一に奉_レ存候。又雄不_レ相替_レ讀書修行怠り不_レ申様に存候。

左平太共遣し候種物ははへ申候哉、不_レ遠大根其外な_レもの取りそろへさし上可_レ申候。(舊物)

村中千左衛門初宜敷奉_レ希候。彌富は長崎より最早歸り申たと奉_レ存候。痛所治し申候哉如何。

御母様御遺物之御羽織わた入のときもの見へ不_レ申、定て落ちたと奉_レ存候、御送り可_レ被_レ下候。

會計局御銀(金まはり)くりあしくいまだ月給渡り不_レ申に困り申候。色々さし上度候へ共何に渡り申候上にい

たし置候事。

(横井時靖藏)

一九七 宿 許

明治元年閏四月二十六日

小楠在京都

早飛脚被_レ差立_レに付拜呈仕候。彌益御機嫌能奉_レ恐悅_レ候。私事相替り無異(不_レ申脱カ)に罷在御安心可_レ被_レ成下_レ候。

然ば私儀去る廿一日參與之内より撰出被_レ仰付_レ翌日別紙之通り被_レ仰付_レ誠_レに以て無_レ存懸_レ難_レ有仕合何とも申上様無_レ之次第に御座候。必竟此節御政事御改正に相成り、輔相・議定二位に御進み候に付、私共并辨事官に五位を給り、い才は太政官日誌に御布告に成り候通にて大略仕候。此節之御改正は格別之事にて大に御都合宜敷、何も競立候勢に相見へ申候。

山田今日會計局より御用申來り、いつか役付可_レ致候。大取紛れ此段迄申上縮候。以上。

閏四月二十六日

横井平四郎

至 誠院様

おつせ殿

又 雄殿

尙々村中前條神酒御上げ御披露可_レ被_レ下候。以上。

禁庭より上なら一疋拜領仕候。初ての事にて至誠院様・おつせにかたびら染させさし上可_レ申、おい

つには何ぞ遣し可申候事。

(横井時靖藏)

本文中の別紙とは從四位下宣下の寫である。

一九八 米田虎之助へ

明治元年閏四月二十八日
小楠在京都
米田在熊本

虎之助は後の虎雄、先代監物(是容)の次男、當代監物(是蒙)の弟で、小楠とは交情最も親密である。本書は當時熊本に在りて藩政を執れる虎之助に京都新政の事情を通報したもの。

一書拜呈仕候。先以 御兩殿様益御機嫌能奉_三恐悦_一候。隨て愈増御安泰に被_レ成_三御勤仕、珍重之御事に奉_レ存候。若殿様御着後最早大分日數も重り、御改正大分御乗り付に相成候と不_レ遠御報告も參り可_レ申相待罷在候。何角御配意御多用之至りと想像仕候。扱此許種々の弊政相重り、此度御一新御改正に相成りい才別紙之通りさし出し、何も御推察可_レ被_レ下候。小生事過當之御舉用位階迄も拜戴誠に以無_三存懸_一萬々奉_三恐入_一候、定て御一笑と奉_レ存候。日夜多事老躰實に堪へ不_レ申、夜分一酌仕のみ樂地に入申候、御憐察可_レ被_レ下候。

孤雲老御免許に御決議近日に御達放可_レ有_三御座不_レ遠歸國と被_レ存候。別紙に拜呈仕候通り公卿・諸有司是迄無_レ謂御舉用_六月給一月六萬金也_三實に因循之甚しき、此節過半以上之減少に相成昨今は怨嗟の聲のみと被_レ存候。此段拜呈、餘は後便に可_レ申上_一候。頓首拜。

閏四月廿八日

小楠 拜

米 大 夫

玉 几 下

別 啓

尙々乍_レ末 監物様へ別呈不_レ仕可_レ然奉_レ希候。(下津休也)新堀老人同様不_レ惡御申傳可_レ被_レ下候。以上。

新政是迄之次第にては種々因循に落入、第一公卿初め其人にあらずして猥りに御舉用に相成、御役人上下に懸り夥敷相成、且諸局名々各々に趣向を立本末一切貫通不_レ仕、制度も亦自然に混雜致し實以無_三致方_一次第と罷成候故、第一御政躰の大趣向を被_レ立、其任にあらざる人物公卿始め一切御退け其中より御登用に相成、且廣く人物御求め諸職に被_レ任候筋に御座候。惣て是迄の通り諸局隔絶仕候は必竟御政躰立兼候而已ならず、人材其根本に不_レ居して諸局に分離いたし候に本づき、病源分明に相見候故此節第一三職を被_レ建、左之通

公卿已下末小吏に至迄減省半分に至申候。

公卿初末々迄御所附は皆俸祿御加増之御決議にて御座候。近日御達に可_三相成_一候。

一 所々裁判所最弊害有_レ之候間知府事縣令等に被_レ改候。等級等は政體書に有_レ之候間略_レ之。

一 輔相 岩倉公

横井小楠遺稿

三條公も御一同被_二 仰付_一候筈之處御東下に付欠員、御歸京之上被_二 仰付_一候筈。

一 議定 二官同職にて御間も一席也。

一 參與

一 辨事

右委細は政體書に有_レ之候間略す。

上より出候儀は輔相より議定・參與に御渡し、下より出候事は辨事受取議定・參與に相渡し、議定・參與にて議定いたし輔相にて御斷決。主上に御伺相濟候上辨事に御渡夫々執行に相成候。夫故辨事を行政官と被_レ命候。

一 議定

中山前大納言

正親町中納言

徳大寺中納言

中御門中納言

越前前宰相

肥前前中將

薩摩中將

阿波少將

一 參與

小松帶刀

後藤象次郎

大久保一藏

廣澤兵助

三岡八郎

福岡藤次

添_マ島次郎

横井平四郎

右の内福岡・添島は和・漢・西洋之制度に委敷、此節之御政體も全く兩人にて調出候事。

一 辨事

人名等未相分不_レ申候。近日に日誌に出候筈に付略_レ之。

一 八局之中内國制度被_レ廢候。軍防も海陸軍相立候へば被_レ廢候筈。

一位階を被_レ下候儀は、右三局御政事之根本にて外國に對しては大臣と稱し候事にて、輔相之御任體三位之右衛門督にては是迄之御格合清華以上之御方には手を突き御咄合有_レ之候位にて、御大政御執行は決て出来不_レ申候に付二位之右大將に被_レ任、議定も四位之諸侯にては御同様に付二位之中納言御宣下、參與は諸藩士之御撰出、辨事は公卿・諸侯も被_二 仰付_一候得共三の二は藩士にて相勤候へば不_レ被_レ

得_レ止事、參與に四位、辨事之藩士に五位之位階を御宣下被_二 仰出_一候。然處岩倉公に於ても甚だ御心痛、議定之諸侯并參與・辨事之藩士は勿論之事、實に當惑至極に有_レ之候得共、御政體に於て不_レ被_レ得_レ止事之條理に候へば御辭退申上候は不_二罷成_一、去迎直様御受申上候儀は心底相濟不_レ申、今暫之處人心折合候迄御受不_二申上_一、宣旨は辨事に預け候に申談、今日大略相決申候。

一 太政官諸局人名は近日黜陟相濟候上、出版布告被_二 仰付_一候筈。

一 海陸軍は先陸軍より御取起、先日一統御達に相成候通に御座候。御しらべ萬石拾人之出兵、壹人前百兩之出銀、右之内先三人之出兵にて、此兵士出京之上十分精練之處にて尙又三人出兵、右同様、左候得ば十人之出兵相揃候迄は來春・夏にも懸り可_レ申候。關東・會津平治し、右出兵過半にも至り候へば京師不虞之御用意は充分に相立、自然に諸侯互之猜忌も相歇、所々警衛御人數等一切御解放に相成、纒斗之御手廻にて出京に相成候は必然に候。御國に取りてしらべ見るに五百四十人之御人數に五萬四千兩之御公役、餘は一切御出方に及び不_レ申、諸藩皆同斷にて富國之道は兵を省くに如くは無く、公私に於て至極之良策と奉_レ存候。

一 關東大久保・勝_(忠實)・勝_(安房)之兩子非常之盡力にて徳川氏彌以服從に相成、御處置として三條公閔四月十二日御發途、大坂に四五日御滞り、蒸氣船より御東下に相成申候。此元にては右御報告を日々相待居、一兩日に報告を不_レ待御處置筋御評決に相成候筈に御座候。大躰百拾萬石より百五拾萬石迄にて宗社を被_レ立

候見込みに候。併三條公報告之次第に仍ては御處置筋相替り可_レ申候。

一 會津君公は謹身長髮入寺、家老壹人切腹服罪之由に相聞へ候。未表立ち筋々之報告は無_レ之候。家中一統は矢張枕城之勢にて、別て越後之方手固く相固め候旨にて彼表先鋒より報告有_レ之、先鋒惣督岩倉公輕騎にて一日も早く被_二押詰_一候様、且肥前雷流丸外に一藩_(名前)海軍被_二差立_一、長・薩之海軍と力を戮候様一昨日太政官より被_二仰付_一候。

右之次第にて不_レ遠北陸も一戰に相成可_レ申候。

一 野・總所々之戰爭多くは江戸之脱走浮浪之徒等にて有_レ之、尤會人も少々宛は加り居候由也。戰爭之次第は日誌に有_レ之候間略_レ之。

一 東海道へは一昨廿五日柳川人數貳百五十人繰り出、二十より三十、五十迄之内昨廿六日備前にても候哉一備繰り出、今廿七日阿州勢も同様、右之次第にて追々諸藩出兵、此方様同斷出兵被_二 仰付_一候事に付一日も早く御人數京着、江戸御人數繰替等之儀有_レ之度相待候。

一 大坂裁判所被_レ廢、知府事に被_レ改、長谷川・岩下直に知府事被_二 仰付_一候筈に御座候。木村得太郎日州富高之縣令に轉任之筈、全躰諸藩御預地は一切御取上、縣令支配に相成候筈に御座候。

一 山田五次郎昨廿六日會計局出納司權判事被_レ命候事。
大略右之通に御座候、餘は追々言上可_レ仕候。已上。

閏四月廿七日

米田虎之助様

横井平四郎

(小楠遺稿)

『小楠遺稿』には右書面を掲げその欄外に左の如く記してある。

先生の手帳中左の建議案を記するあり曰く、會計局急迫に付東征平治に至り候迄御役給減省被_レ仰付、左の通にては如何。

第一等官	三百五十圓	二	三百圓
三	二百五十圓	四	百五十圓
五	七十五圓		
	以上半減		
六	元五十圓 卅五圓	七	元三十圓 廿五圓
八	二十圓	九	十圓

六・七は斟酌を加へ、八・九は御定りの通り也。

一九九 宿 許 へ 明治元年五月十日 小楠在京都

宮川被_レ差越、此許事情等被_レ仰遣候に付沼山にも参りい才御承知可_レ被_レ成下、何も大略仕候。

一 左平太共一寸立歸り仕候様申越候間長崎より上り候へば御許之方に罷出可_レ申、若又兵庫の方より上り候へば夫々手數仕置候事に御座候。

一 萩へ頼置候刀拵之儀定て御遣しの事と奉_レ存候。同人には尙御催促可_レ被_レ下候。出來之上は千左衛門へ御預候様、千左衛門へは出立前に頼み置候事に御座候。

一 新堀むすめ久馬・山形にも能々及_レ相談候處何も存寄無_レ御座、至極同意に御座候へば隱居夫婦も

子細有_レ御座間敷、都合次第にていつ何時も御呼取被_レ成置候て可_レ然奉_レ存候。尙御許にて御相談被_レ成度事。

一 金子御不足と奉_レ存候。此許にて會計方大拂底にていまだ御渡方に相成不_レ申大に迷惑仕候。先貳十五兩さし出置申候。跡は七月に尙々進上可_レ仕候。

一 たばこ大拂底、其上三岡より種々送り物有_レ之、同人望に御座候間先貳貫目程大急に御遣し被_レ下度、尤品は是迄給料に遣し候ものにてよろしく御座候。

一 御母様御かた身之御羽織わた入の表参り不_レ申、何に出立之節落ち候事に被_レ存候。御序に御遣し可_レ被_レ下候。

一 先達て御布一疋拜領仕候。なら地にて宜敷は無_レ御座候へ共初て拜領之品故只今もん付に染させ申候。何に下津近々歸國に付其節さし出可_レ申候。おいつにはちぢみもめん求置候間一同に遣し可_レ申候。

一 御國産物何ぞ望み無_レ御座、内青のり極々上品ぶりに入御遣し可_レ被_レ下候。此段迄拜呈、い才は宮川より可_レ申上候。以上。

五月十日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々此許梅雨よ程久敷降り續き昨日より晴に相成、かも川等大分之出水、よど川は壹丈三尺と申事にて上り舟は暫は留り申候。沼山定て出水と奉存候、何角思ひやり申候。

一 越前桃當年は實に成候や、(朱壁)ざぼんは花咲き候や、朝顔(酸漿)・ほふつき如何候や、竹山は定て太とり申たると奉存候。

又雄書物彌出精と存候、不遠(墨)すみにても下し可申候。以上。

(横井時靖藏)

二〇〇 彌富千左衛門・矢野大玄へ

明治元年五月十日

小楠在京都
彌富・矢野在沼山津

大玄は沼山津の開業醫。初の姓は桂。

一書拜呈仕候。御兩家愈御安康珍重に奉存候。隨て小拙事何もさし障りも無御座。上京仕、御休意可被下候。

先以出立前は何角御世話に罷成千萬忝々拜謝難申盡奉存候。爾後宿本萬端御世話被成下、乍此上幾重にも御依頼萬々奉希候。小拙此節太政官御改正格別之御拔擢被仰付從四位下に拜任、匹夫の身誠に未曾有の天寵を蒙り實以奉恐入候。依之位階は當分御受難申上御役所御預申上置候。段々承合候處御斷は決て罷成不申由に付甚以當惑罷在候、御推察可被下候。

新堀(下津休也)隱居出立後も寛りと到留之由、何角御配意と奉存候。其後は病氣も次第によりしき様子に承り、悦入申候。誠に繁雜甚敷晝夜寸暇無御座候。此段迄呈上、い才の儀は宮川立歸沼山にも參り可申、御承知可被下、何も大略仕候。以上。

五月十日

小楠拜

千左衛門様

大玄君

尙々御自愛第一に奉存候。小拙もリン疾依然といたし格別難澁も不仕候。乍末御家内様え可然御致聲可被下候。

中庄(中小路力、中瀬宮家女主人)司不(中瀬宮家女主人)相替、彼の方行れ可申候。清之助最早歸り申たると存候。病氣は定て快復と存候。此節別狀遣し不申、御序によりしく御傳可被下候。其外村中何方へも吳々可然、奉願候。以上。

(彌富熊太藏)

1101 宿 許

明治元年五月二十四日

小楠在京都

先月廿一日之御狀到着難有拜見仕候。時候益御機嫌能奉_三恐悅_一候。隨て私事相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。先日宮川急歸にて最早到着と存候、此許之成り行い才御承知と奉_レ存候。引き續き庄_(助右衛門)村歸省是又同様、其後格別相替り不_レ申候。

左京亮様初薩・阿二侯御東下、阿と_(備美) 左京亮様は今明日に此許御立大坂より火船にて直に江戸に御發向なり、江戸は去る十五日に上野に集り居候賊御討伐官軍大勝と相聞え申候。三公御到着之上は江戸丈は彌以治平可_レ仕候。其上にて會津御征伐に御議定に御座候。仙臺・米澤杯大分賊に應じ候へ共是は會津落

御座候。暑中出軍實以痛心之至に

明治大皇帝御英姿を

禁中日々多事繁用誠に困り入申候。然し前にも申上候通り 主上日々御出座、議定・參與被_三 召出_二萬事被_三 聞召_一候。私共罷出候所よりは 玉座は一問半位、八疊之御間に中央に高き御疊二枚敷き御敷物_(何か薄き一ト通外に御たばこ盆位なり) のみにて御近習衆も一ト間隔て二三人も扣え被_レ居候。私共は御居間之下_ト 御敷居之下_ト に罷出申候。

議・參一同に罷出候時も有_レ之、或は一人罷出候事も御座候。千餘年來絶て無_レ之御美事に御座候。御容貌は長が御かほ御色はあき黒く被_レ爲_レ在御聲はおふきく御せもすらりと被_レ爲_レ在候。御氣量を申上候へば十人並にも可_レ被_レ爲_レ在哉、唯々並々ならぬ御英相にて誠に非常之御方恐悅無限之至に奉_レ存候。

謹記して宿許に寄らせたる小楠の簡書 (横井時靖藏)

先頃申上候御かたびら染出來さし上申候。色薄く候へ共是は此許之流行にて御座候。地_(合)あいらく敷如何に御座候へ共不思議之拜領物誠に難_レ有御品にて目出度御着用被_レ成度奉_レ存候。おいつに木綿ちとみ遣し申候。至誠院様御たばこ入延引仕候、是等は四條・三條の橋ぎわに有_レ之候へ共みせに出し候ものはよろしく無_三御座_一候。註文仕筈にて何角押移り申候、何に不_レ遠さし上可_レ申候。又雄釣りの獲物并にゑび忝候、早速給_(タ)申候。此頃之大水にて肴類一切無_レ之大に難澁仕候。湖水一丈五尺よど川一丈以上にてとも切甚敷、いか斗之手入に有_レ之哉難_レ計、通船今日より明き候由。大坂は今以水

につかり居申候。非常之出水百年來無_レ之事に御座候。當年は九州筋如何、北國・越前杯は田うへ兩度いたし其上出水にて最早うへ付出來不_レ申由、甚以恐敷事に御座候。御許如何、定て庭前大水と想像仕候。何に近日には何方よりぞ申參り候事と存居申候。

新堀・牛島目出度、必竟 若殿様非常之御聰明故にて重々奉_レ感伏_一候。此上隱居病氣快方のり申候。其外何角漸々うち替り可_レ申候。若殿様をも御召にて何に不_レ遠御出京可_レ被_レ爲_レ在、重々御待申上候。追々申上候たば一切には大に難澁仕候。此許之品は貳歩以上にて無_レ之ては給られ不_レ申、夫も口に逢ひ候品は無_レ御座_一候。定て小源太持參可_レ致、相待申候。先此段迄申上縮候。頓首拜。

五月廿四日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々乍_レ憚御自愛專一に奉_レ存候。私も痲病寸斗勝れ不_レ申是には困り入申候。日々すわり或は終日夜にも懸り候位にて實にいたし方無_レ之候。夫故何方へも參り不_レ申、酒も至て少々ねまへに給申候。然し外に申分は一切無_レ御座、御安心可_レ被_レ下候。

又雄讀書修行且英學決ておこたり不_レ申様吳々申入候。自然おこたり候へば直に御申越し可_レ被_レ下

候、夫々存念有_レ之候。彌以出精いたし候へば墨・筆之類は申に不_レ及、色々之書物下し賞美可_レ致候。
(みや子のこ)みふやんおこり御申聞け、聞き不_レ申候へば先頃遣し候かたびら御取り上何も御遣し無_レ之様に存候。人物宜敷相成り候へば衣類其外様々のくわし遣し可_レ申候事。
(菓子)

(横井時靖藏)

主上の聖徳に感激し且つ天顔に咫尺するを得る光榮を心から喜んだ小楠の眞情は楮表に溢れて居る。なほ文中「新堀・牛島目出度」とは下津休也が五月十八日に肥後藩財政改革を委任され、牛島五一郎が五月三日肥後藩軍艦主任を命ぜられたことを云ふか。

IIOII 宿 許

へ

明治元年六月六日

小楠在京都

返すく御國許も大改革、新堀兎や角よろしき段牛島先生寸暇無_レ之い才承り、大慶仕候。さぞく浮言浮議様々可_レ有_レ之、何分秋の末にも至り候て聊靜り可_レ申と被_レ存候。此上いん居元氣よき方のみいのり申候事。
(下津休也)

一書奉呈仕候。暑中益御機嫌能奉_レ恐悦_一候。隨て私事相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。然ば宮川一昨夜虎之助殿と同道到着、御國之次第并沼山之御様子い才承り大に安心仕候。宮川も三日之到留珍敷、引返に御座候。虎之助殿も只今迄私方に到留、晝夜咄合申候。直に今夕淀舟より大坂に被_レ參、二三日中に 左京亮様御供江戸に參向之筈に御座候。

江戸も大抵静り、徳川氏御知行も定り（駿河一國并に遠江之内且奥羽之内にて）七十萬石給り是にて安堵に相成り申候。其外諸浪之徒は先日上野の戦にて落着、外には格別之手障りも無御座模様なり。今日より薩手陸行、君侯と阿波侯は近日軍艦より會津表に御出張之積り、左京亮様は江戸え御出之筈なり。越後之賊も大敗軍大抵引取申候。

一 主上も近々關東御親征（三四日中には御布告之旨）誠（御布告之旨）に非常之御事に御座候。此節は至て御手輕き御動座にて有之候。右之次第にて何に不遠平定に至り候に相違無之、大に安心いたし申候。

一 私痲疾近日不鹽梅にて七八日以前より引入養生專一に仕候。今暫は出勤出來申間敷、十分全快之上迄は引入養生と心得居申候。今日共よりは少しく心能何に藥用等應じ候ものと大に競ひ居申候。（高橋）文貞も大坂に下り居候間越の岩佐玄珪（後の通）に頼み都合よろしく、少も御氣遣被下間敷候。只今より虎之介殿うち立にて不取肯相認め、此段迄申上候。何も大略仕候。以上。

六月六日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々只々御自愛のみ祈申候。

此許（無禮）ぶるんの肴一切無之困り申候。ほし（干懸）るび或はほし（干懸）まん引きの類便宜御座候節御送り奉願候。又雄書物修行祈申候。

一 書物虫ぼし懸物同様の事。

（横井時靖藏）

本文中の左京亮（長岡護美）米田虎之助の行動につきましては『横井小楠傳』第二十章に詳である。返す／＼書の牛島先生とは牛島五一郎のことであるらしい。

110111 米田虎之助へ

明治元年六月十日

小楠在京都
米田在大阪

前文略す

此許之次第（賢助）い才馬淵（賢助）に咄し合申候間夫々御承知可被成候、略す。

江戸戦一條住江注進（甚兵衛）に相違無御座、是又馬淵より御承知可被下候。扱て絶言語候次第、痛心此事に奉存候。然し是は左様に成り行候が當然にて、全體江戸御人數中之論談津田紙面（山三郎）が一統之定論に御座候へば其勢ケ様にふるわざる事が自然之次第と奉存候。安場（一平）も先頃参り候節承り候へば同様之論に御座候間私より大に論破仕置申候。必竟は鎮撫の二字の文義ちがいにて、其文義ちがいは競わざるより起り來り事情明了に聞え申候間安場初十二分（一平）之御説得被成度萬々奉祈候。安場も追々申上候通り思慮淺き生質にて獨り離れの出來兼、實以氣遣仕候。必ず／＼十分々々御責め可然奉存候。此段迄他は大

略仕候。頓首々々。

六月十日

平四郎

虎之介様

尙々暑中御愛養第一に奉存候。何も後便可奉呈候。已上。

(林田政廣藏)

二〇四 副島二郎へ

明治元年六月十五日

小楠副島
在京都

愈御安康被成御出勤、珍重に奉存候。然ば至急に御内話申度義御座候間、乍御苦身今夕・明朝迄に御出臨被成下度萬々奉希候。此段拜呈、餘は拜鳳之上可申上候。以上。

六月十五日

横井平四郎

副島二郎様

(横井時靖藏)

二〇五 宿許へ

明治元年七月三日

小楠在京都

一筆拜呈仕候。残暑之砌益御機嫌能、小兒共迄無事に御座候段重々奉拜賀候。此許相替り申儀も無御

座候。去月廿八日迄に 左京亮様御人數も大坂出帆に相成、關東御平定は必定と奉存候。關東も江戸内は鎮靜、會津表于今伏從不仕、仙臺は昨日より本家之事に付宇和島老公御出懸けに相成り、江戸より軍艦にて直に仙臺に乘入御説得之筈にて大抵是にて治り申見込に御座候。越後之方は越前・加賀其他藩々出兵、仁和寺宮大總督にて去月末に御出馬、いまだ何とも傳報は無御座候へ共不遠治平に至り可申候。

主上も當月末・來月初には關東御動座之御内決にて有之、此節は大抵何方も靜平に歸り候事に奉存候。(下津休也)新堀隱居出方私方に到着、夫より十丁斗之處に旅宿、日々相見え咄し合仕候。病氣近來は大分宜敷いとま有之候へば道具屋せつき様々のもの買ひ求め中々勘定方續き兼可申と心遣仕候。いまだ歸りの日限も分り不申、何に益過と被存申候。珍敷所にて出會いたし、是も不思議の一つにて御座候。金子は新堀歸りにさし出可申候、左様御承知可被下候。

私事も痲疾再發例の通りに歩行正座出來兼申候間先々月末より引入、岩佐玄珪に懸り養生仕候。其内内藤も歸京いたし兩人にて治療仕近來漸々宜敷、只今通りにては益前後には出勤可仕奉存候。「シヨウウサンギン」もなれこみ一切き、不申候。一旦は誠に困窮仕候處玄珪列十分盡力仕全快に至り可申相樂申候。酒も丁度四十餘日一切給不申、十分之養生に取り懸り近日漸く夜分猪口四ツ五ツ位給申候。肴類惡敷とんと給られ不申、鶏鳥一兩日越に給候て取り續き申候。右之次第にて是迄之事は中々困窮のみ

に相暮し御察可_レ被_レ下候。お龜宇土によめり(い脱カ)いたしあり付も宜敷段範介より申越大に安心仕候。うわ張(體服)りさし合(結婚祝品)に送り候筈に候處紋形覺え不_レ申、次の御便に御送り被_レ下候様奉_レ希候。龜松に心當仕置候金子太多助方(徳高)に遣し置き、竹崎(津次郎)に御相談當暮半高返し候様只今より御約束被_レ成置、水導(水道町の水領カ)に御さし合可_レ被_レ成候。半高は此暮能々御改尙御預け可_レ被_レ成置候。益後は御隠居うち(休也)にて其節い才可_レ申上、先此段迄拜呈仕候。已上。

七月三日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々此節は内藤貞八急使にて罷歸申候間自然は沼山にも参りい才可_レ申上、かと奉_レ存候。源三郎急死仕候段さぞあとの者共困窮と奉_レ存候、御序に吊儀御申聞可_レ被_レ下候。
千左衛門列え宜敷奉_レ願候。大玄(大野)は不_レ相替罷出候と奉_レ存候。治療如何、定て病家も漸々出来申たると奉_レ存候。例のぶしよふ不_レ相替はたらき候事と被_レ存、迷惑成る馬鹿ものに御座候。是又宜敷ぶしよふ致さず病家うち廻り候様御申傳え可_レ被_レ下候。以上。

(横井時靖藏)

IIOK 宿 許

明治元年七月十二日 小楠在京都

明日御飛脚出立に付拜呈仕候。秋暑之益御機嫌能奉_レ恐悦候。隨て私事相替不_レ申御安心可_レ被_レ成下候。然ば先達内藤貞八急使にて罷歸り沼山えも罷出候筈にて着之上はい才此許之事共御承知被_レ成候と奉_レ存候。其後格別相替り不_レ申、江戸大に鎮靜、奥州口も官軍大勝利、白川より進撃いたし(圖)タナ倉も乗り取り候段注進昨日申參候。仙臺杯は元來家中内亂、只今に至り大に當惑之様子に相聞へ何に不_レ遠歸順可_レ致、尤極内々其次第宇和島老侯え頼入候事に御座候。越後之方會津より必死と取り堅め對陣いたし居候。是も奥州聊定り申候へば必ず散亂可_レ致事に被_レ存候。東北之方は是迄之形勢にて御座候。此許は彌以御都合宜敷事に御座候。越當公脚氣(茂形キヤツキ)にて數年來不鹽梅近來彌以不_レ宜、其上此節越後出張被_レ仰付、少し宜しければ御出陣之筈に御座候。且御家中末々は何と無く不安心之次第も有_レ之、此節春嶽公暫御役御斷御歸國之御内意出申候。いまだ御許は無_レ之如何に相成可_レ申哉、右等之次第其外は何ぞ相替り不_レ申、先此段迄申上候。以上。

七月十二日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿